2019年度（令和元年度）

沖縄県NIE実践報告書

おきなわ
NIE
Newspaper in Education

沖縄県NIE推進協議会

目 次

【日本新聞協会指定ＮＩＥ実践校】

読谷村立古堅南小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

名護市立久辺小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

石垣市立大浜小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

浦添市立牧港小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

石垣市立崎枝中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

沖縄県立具志川高校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

ヒューマンキャンパス高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・33

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定実践校】

沖縄市立高原小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

沖縄市立比屋根小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

うるま市立川崎小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

名護市立小中一貫教育校緑風学園・・・・・・・・・・・・・・・55

与那国町立与那国小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

糸満市立糸満中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67

沖縄市立コザ中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

沖縄県立宜野座高校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

【資料１】沖縄県ＮＩＥ推進協議会組織と運動の経過・・・・・・・105

【資料２】これまでの実践指定校・・・・・・・・・・・・・・・・113

【資料３】全国大会・実践フォーラムの新聞記事・・・・・・・・・116

ごあいさつ

沖縄県ＮＩＥ推進協議会
会長　仲村 守和

本協議会は平成１２年（２０００年）に設立され今年で２０年目を迎えました。本会は「教育界と新聞界が協力し、新聞教材の開発、活用の研究と普及を通して、児童生徒の情報活用能力の育成を図ること」を目的として、ＮＩＥ（Newspaper In Education）活動を推進してきました。特に、昨年度から沖縄県教育庁県立学校教育課、義務教育課の指導主事が幹事として加わり、協議会組織の強化が図られました。

昨今、ＮＩＥ活動が県議会で取り上げられるなど、県民への理解が深まって参りました。これも県教育委員会はじめ市町村教育委員会や学校、ＰＴＡ、地域そして沖縄タイムス社、琉球新報社等のご理解とご協力によるものであります。現在、多くの学校で新聞をツールとした教育実践が推進されています。

ＮＩＥ活動を実践する学校には、本会の事業の一環として、年度毎に、日本新聞協会および県内新聞社と連携して、実践校の指定をし、各新聞を無償提供して実践活動を支援しております。

新学習指導要領の「アクティブラーニング」、つまり児童生徒が「主体的、能動的」に参加する授業づくりのためにも「生きた教材」といわれる「新聞」を授業に積極的に取り入れてほしいと思います。新学習指導要領では「新聞活用」が全ての校種で指導すべき内容として位置づけられていることから不断の研究が求められています。

この度、本年度の実践指定校の実践概要が本冊子にまとめられました。実践指定校では、「新聞」を有効に活用し、楽しく有意義な授業の構築が図られ、子どもたちの生き生きとした活動の様子が報告されています。ＮＩＥ活動を通して、児童生徒の思考力や判断力、表現力等が培われていることは、ＮＩＥの教育的手法が児童生徒の課題解決能力の育成に大きな効果があることを実証しています。つまり、児童生徒が「自ら学び、考えて行動する『生きる力』の育成」が期待できます。

本報告書のねらいとするところは指定校の実践を各学校で共有することにあります。学習教材としての新聞活用や新聞づくりなどＮＩＥの教育的手法を取り入れ、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を培っていく授業実践のためにもＮＩＥ活動を各学校で推進していただきたいと思います。

結びに、ＮＩＥ活動の実践事例としての本報告書が県内の学校や家庭、地域社会など多くの機関で活用され本県の有為な人材育成の一助になれば幸甚に存じます。

令和元年度　　古堅南小学校　ＮＩＥの取り組み

低学年：新聞に親しむ・遊ぶ

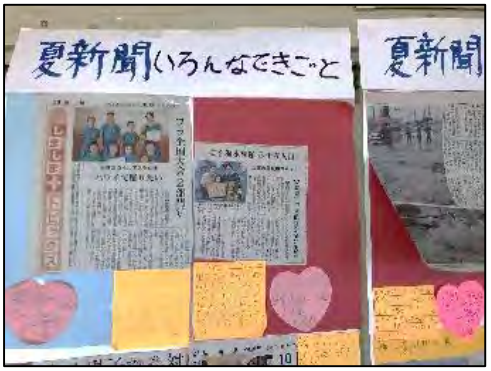
１学年

１　図工科　「やぶいた かたちから　うまれたよ」
①新聞を記事や写真は気にせず自由にやぶいていく。
②やぶいた新聞を使い、形を組み合わせていろいろ物を作る。

２　生活科　「あきをさがそう」
①飾り付けできそうな秋のものを探す。（落ち葉等）
②飾りを付けるものを新聞で作成する。(兜やかばん等)
③秋のものを使っていろんなものに飾り付けをする。

３　NIE タイム等（日常的に）
①写真から、「問いの文、答えの文」のセリフを考える。
②新聞記事の読み聞かせと、簡単な感想発表。
③新聞の写真掲示。

２学年

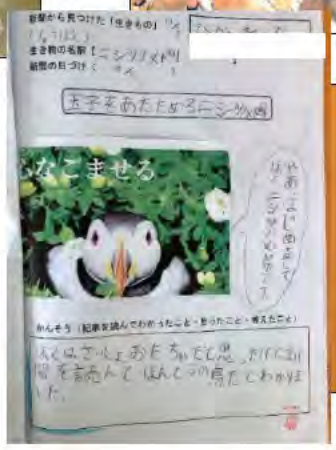


１　生活科　「〇〇を探そう」
①夏・秋・生き物などジャンルを決めて
新聞の写真から記事を集める活動。
記事は読めないので、写真をもとに選んだり、
教師が説明してあげる。

２　国語科　「グループ発表会をひらこう」
①グループで話し合い活動を通してクイズを作る。
②りゅうPON！・ワラビー等の特集記事より、グループで話し合いクイズ作りをする。
③クイズを発表し合う。
子ども新聞の読み取りが難しい子もいたので、
記事の読み聞かせ等を保護者に手伝ってもらった。（参観日など）

料

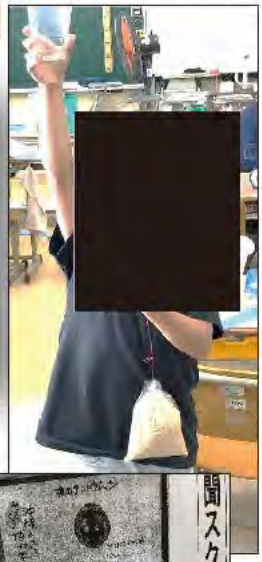
3　図工科　「新聞と仲良し」
①新聞をやぶいたり、丸めたり、
自由に作る活動。



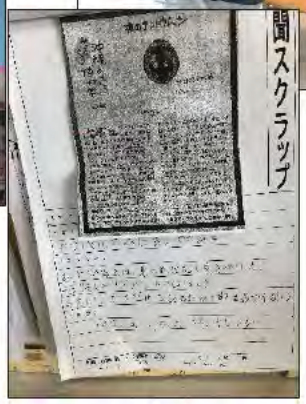
4　NIE タイム等（日常的に）
①新聞記事の読み聞かせ後、付箋紙に感想を記入。
その後、学年ＮＩＥコーナー等に掲示。
②ワークシート綴りを用意し、
NIE タイムで行ったワークシートを綴る。
③各学級の作品を学年掲示板で紹介。

中学年：新聞で学ぶ・考える

３学年



1　算数科　「重さ」
①1ｋｇを作る活動から実際の金メダルの重さを作る。
②量感を育てることと、新聞の話題から
算数の学習と生活の場面とをつなげる。
③円の単元では、金メダルの直径を取り上げた。



2　NIE タイム等（日常的に）
①ＮＩＥコーナーでの記事紹介
教師側で毎週選定
②ＮＩＥタイムでの新聞スクラップの活用。
記事は、教師側で選定。
内容によっては、読み聞かせをする。
読み取る際、５W１Ｈを入れる。
慣れることで、自分で５W１Ｈを探せる子が出てきた。

４学年

1　国語科　「学級新聞を作ろう」
「新聞の構成と取材の仕方」等を新聞記者の出前授業で
学習し、「１日分の新聞で一面作り」のレイアウト学習に
生かした。

2　社会科　「水はどこから」
国語科の学級新聞の内容を社会見学の内容に設定し、
新聞づくりをした。（合科的に扱った）

3　国語科　「写真をもとに話そう」

①新聞記事から写真を選ぶ。

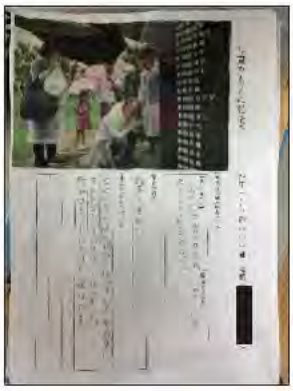
②「気づいたこと」「想像すること」を考える。

③写真の題名を決める。

④写真についての説明を書く。

写真の題名は見出し

説明は記事の内容に近いことに気づく子が増えた。



4　NIE タイム等（日常的に）

①ＮＩＥコーナーでの記事紹介

日替わりで子どもが選ぶ記事と

教師が選ぶ記事を紹介

②ワークシート活用

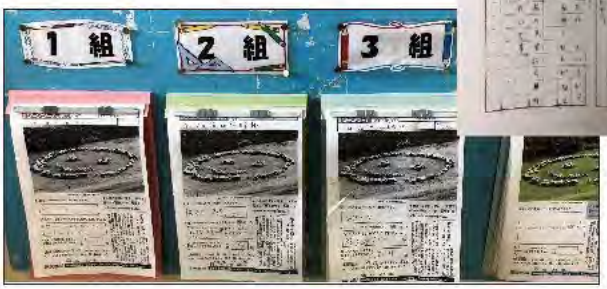
内容は教師側で選定し週末課題として持たせる。

保護者のサイン欄を作成。

慣れてきたら学年 NIE コーナーに掲示

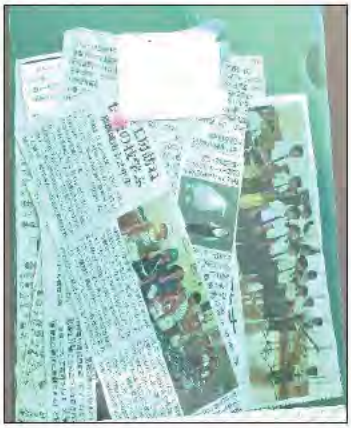
③NIE タイム

読み聞かせや感想の交流



高学年：新聞で学ぶ・広げる・深める

5学年



1　国語科の「和語・漢語・外来語」に関連

①　新聞記事貯金

気になった記事を取り貯めて、

言葉のストックを作る。

2　NIE タイム等（日常的に）

①　ＮＩＥコーナーでの記事・ワークシート紹介

いつでも触れやすい工夫。

過去の新聞も取り貯める。

②　ワークシート活用。

内容は教師側で選定しNIE タイムで取り組む。

５W１H の読み取りに慣れてきた。

6学年

1　国語科　「三字以上の熟語の構成」

①新聞記事から三字以上の熟語を選ぶ。

②構成で仲間分けをする。

2　学級活動　「つぶやき News っス」

（NIE 全国大会のワークショップで体験した活動を本校で実践）

【手　順】

①記事（写真・ことば等）をそれぞれ一つずつ持ち寄って選んだ理由を簡単に発表しあう。　（5分）

②模造紙に記事を貼る（好きな所に）

③記事を読んで、思ったことを付箋紙に書き込む。（２０分）

・最後まで色ペンは変えない（一人一色）

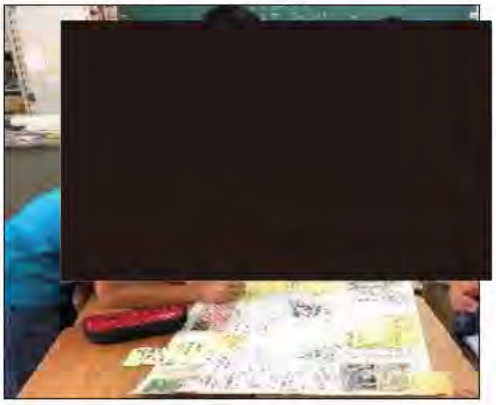
・他の人の記事にも感想を書く。（付箋紙）

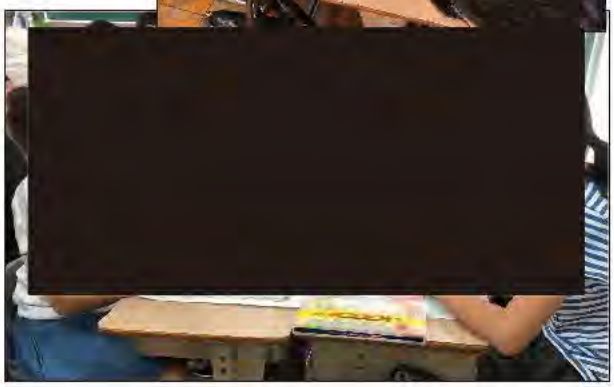
・友達の意見を読んで、自分の意見を書き込む。

④グループで話し合い活動（１５分）

・皆の意見を基に話し合う。

⑤まとめ　（5分）





「つぶやき News っス」

４人それぞれが、異なる色のペンを使うこと。「自分の色は逃げないという安心感と、自分のつぶやきに誰かがつぶやきをつないでくれたことで自分の存在感を確認でき、自己肯定感の育成につながる。違った価値観を、その場で知ることができる」・・・・・・考案者：白鴎大学非常勤講師　渡辺裕子さん

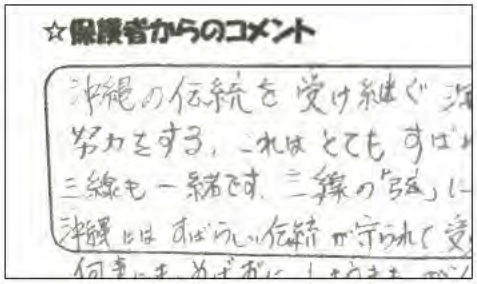
3　NIE タイム等（日常的に）

①　新聞スクラップを週末課題にし、保護者からのコメントをもらう。NIE タイム等で新聞スクラップの感想を付箋紙に貼る交流活動をすることで、新聞スクラップを仕上げてくるようになった。

②　新聞投稿（僕の意見・私の意見等）

③　新聞スクラップコンテストへの参加

④　戦争等の記事を収集し、平和学習の資料として活用。



☆保護者からのコメント

沖縄の伝統を受け継ぐ沖
努力をする。これはとても すば
三線も一緒です。三線の「弦」に
沖縄にはすばらしい伝統が守られて受
何事にも めげずに しっかりと

全体的な取り組み

①児童玄関前に、各学年のワークシート等を交互に掲示し活動の様子を紹介。

②図書館における、新聞コーナーの設置。

③特別支援学級では、担任が記事の読み聞かせをする。

④読み聞かせボランティア「ふうせんの会」の皆さんによる新聞記事の紹介

読み聞かせの様子
ボランティアの方による
新聞記事の紹介

学校図書館の
新聞コーナー

令和元年　沖縄県ＮＩＥフォーラム　11 月 12 日（公開授業の様子）

【2 学年】　生活科　「生きものと友だち」　～生きものはかせ～

ねらい・・・新聞から見つけた生き物について、気づいたことや感じたこと等を表現する。

世界最小の「エイ」の記事
「エイの体は色がきれい！」

1．自分の見つけた生き物の記事をグループに紹介。

2．みんなの記事を台紙に貼って新聞を作る。

3．各グループの記事をみんなに紹介【全体交流】

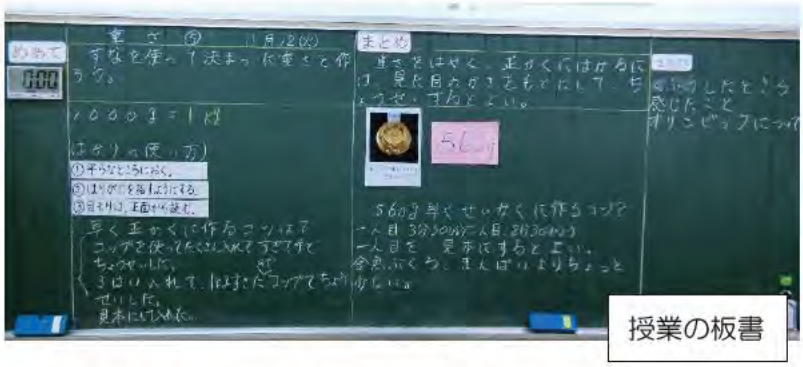
4．できた新聞を自由に読み合い、交流する。

【３学年】　算数科　「重さ」

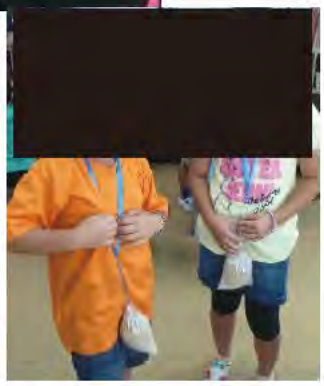
ねらい・・・①重さを予想して、正しく測定し量感をつかむことができる。
②目的に応じて、単位や計器を使って測定することができる。

新聞記事から金メダルの重さを知る。

重さを予想し、砂の重さを測る。



授業の板書



【５学年】　国語科　「和語・漢語・外来語」

ねらい・・・新聞記事から「和語・漢語・外来語」を探し、その言葉が使われている理由や語感から受ける印象の違いに気づくことができる。

①新聞から漢語を探し、線を引く。

②探した言葉の意味を辞書で調べる。

③グループで漢語を和語に言い換える。

④漢語と和語の印象の違いについて話し合う。

成果と課題

【児童の姿からの成果と課題】

○「ＮＩＥタイム」の活動で、新聞に興味を持つようになった。
○興味のある記事を集め、内容を読み取ることができるようになった。
○記事についての感想や意見を持ち、書くことができるようになってきた。
○情報を自分の生活と結びつけようとしている子もいた。
○高学年では、親子で新聞スクラップに取り組み、親子の対話につながっている。

●記事の漢字が難しく、低学年の児童が読めない。
●語彙力の差があり、記事の内容を読み取れない子もいる。
●互いの意見や考えを発表するが、対話までには至ってない。

【教師の成果と課題】

○週時程に「ＮＩＥタイム」を位置付けたことで、新聞活用が習慣化できた。
○単元と新聞を関連付け、授業を行った。
○授業に関連した内容の記事を探す視点がわかってきた。
○５Ｗ１Ｈを意識して取り組んだ。

●記事を教材化する時間の確保。
●記事を読んだ感想や意見の交流のさせ方の工夫。
●「本時のねらい」にせまるための効果的な新聞の選定と活用の仕方。
●学年の系統性を踏まえた年間活動計画の必要性。
●学習に使う新聞の調達が難しい。

[redacted]

令和元年度　名護市立久辺小学校NIE実践報告書

名護市立久辺小学校　校長　福本　利江子
NIE担当　教諭　東盛　麻里

1　はじめに

本校では、昨年度より日本新聞協会の指定を受け、新聞を活用した教育活動を行ってきた。低学年は新聞に親しむこと、そして高学年では新聞を活用することを目標に掲げて、全校体制でNIEを進めてきた。主な活動として、気になった記事を選んで感想を記述したり、記述をもとに意見を交流したりした。また、沖縄タイムスNIE出前講座を活用して新聞の構成について学んだり、学んだことをもとに壁新聞やはがき新聞を作成したりしてきた。各教科でも積極的に新聞を活用して、より主体的に新聞に関わることで深い学びに結び付けようと取り組んできた。今回は、その具体的実践について報告させていただく。

2　本校の取り組み

本校では以下のねらいのもと、NIE活動を実践してきた。

(1)児童の言語力を向上させる。
(2)社会的事象に対する興味関心を広げ、情報を取捨選択する力の基礎を養う。
(3)身近な地域の自然や生活の営みに対する情報を共有し、人と人とのつながりから成り立つ生活の在り方を考える力を伸ばす。
(4)教師集団の社会認識及び情報の共有化とコミュニケーション力を向上させる。
(5)複数の新聞を読むことにより、報道には様々な角度があることを理解していく。

学年の発達段階に応じた実践内容を定めることで、全校体制で取り組むことができるようにしてきた。また、児童の活動を可視化することで児童自身もそして、保護者や地域の方々にも見ていただくことができ、活動内容の周知につながった。

3　具体的実践

(1) NIEタイム(毎週木曜日の朝の活動)及びライティングタイム(毎週金曜日の朝の活動)

毎週木曜日の朝は15分間のNIEタイムが設けられている。教師による記事の読み聞かせや、各自で気になった記事を切り取り、ファイリングしたりする活動を行っている。

翌金曜日にはライティングタイムが用意されており、自分が選んだ記事に対する思いや考えを記述したり、それをもとに意見交流したりする活動を行っている。

学年の発達段階に応じて活動することになっており、6年間をかけて新聞に親しみ活用する力の育成を目指して行っている。

学年	具体的内容
1学年	○教師による記事の読み聞かせ　○好きな写真を選ぶ　○習った漢字を見つける
2学年	○教師による記事の読み聞かせ　○ペアで写真の紹介をする ○グループで写真や簡単な見出しの紹介をする
3学年 4学年	○教師による記事の読み聞かせ　○子ども新聞を読む　○気になった記事を切り取る ○記事に対する感想を書く　○感想をグループで交流する
5学年 6学年	○教師による記事の読み聞かせ　○気になった記事を読む ○記事に対する感想を書く　○記事を紹介し意見交換をする

NIE タイムの様子（気になった記事を選び、切り抜きしてファイルへ添付）

NIE ファイル・ノート

(2) 沖縄タイムス社によるNIE出前講座

沖縄タイムス社の記者を招き、NIE出前授業を行っていただいた。5、6年生を対象に、新聞がどのように構成されているのかを教えていただいたうえで、グループごとにテーマにあった記事を切り抜き、一枚に貼り集める作業を行った。新聞の構成について学んだ児童は、切り抜いた記事をより効果的にレイアウトしようと考えている様子がうかがえた。

(3) 学校壁新聞コンクールへの出品

学んだことをグループごとに壁新聞にまとめて発信する学習を、今年度は4年生が取り組んだ。社会科の学習で消防署を見学し、署内の施設や署員の勤務内容を調べてきた。見学を通して生まれて疑問については、図書資料やインターネット等を使って調べ学習を行い、わかったことを壁新聞にまとめ発信したのである。

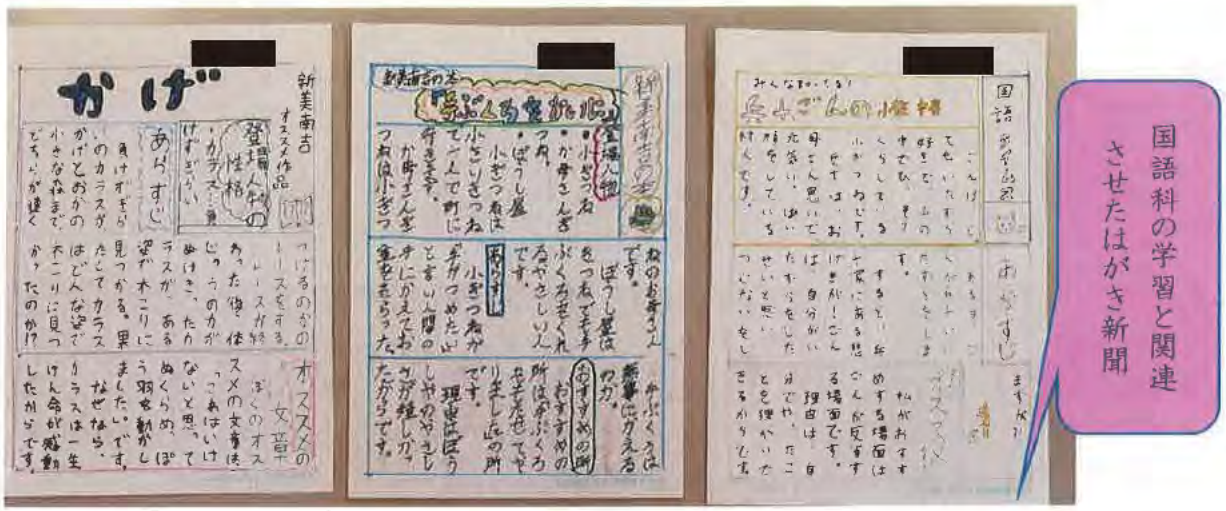
壁新聞を作るにあたって、文章の記述・構成や見出しの付け方、レイアウトの仕方など国語科や総合的な学習の時間と関連させながら行った。子ども達からは「一人では難しいけれど、友達と協力しながらだったので仕上げることができた。」「自分と友達との疑問点が違っていたのが驚きだった。」「他のグループの壁新聞を見て始めて知ったことがたくさんあった。」などの感想が聞こえた。

完成した壁新聞については、「学校壁新聞コンクール」に出品し、全作品金賞をいただくことができ、児童の達成感・成就感の醸成にもつなげることができた。

(4) はがき新聞の制作

今年度より新しく取り組んだことがこの「はがき新聞」である。短時間に制作できるにもかかわらず、新聞づくり特有の良さが発揮できるということで取り組みを始めた。

まずは、新年度スタートで自分の「自己紹介新聞」を制作させた。教師が制作したモデルを示すことで子ども達はどのように制作したらよいのかをつかみ、楽しんで制作している様子がうかがえた。学校行事と関連させながら、行事の内容や自分の感想を織り込んだ新聞や、おすすめ図書を紹介する新聞など、教科の学習とも関連させるなどして、積極的に取り組んだ。



(5) 新聞読者欄への積極的投稿

日頃の生活から感じた何気ない思いや気づき、特に印象に残ったことなどを原稿用紙1枚程度にまとめて、新聞社の読者欄へ投稿する活動を行っている。「400 字程度なら無理なく書ける」というのが魅力だと感じ、積極的に子ども達に書かせるようにしてきた。

掲載された記事については、全児童が見える場所に掲示している。自分の記事を見つけて喜ぶ児童、友達の記事を見て触発される児童、内容を読んで意見をかわす児童…。新聞を身近に感じることができる活動だと考えている。

4　成果と課題

児童が新聞と関わる機会を意図的にもつことで、児童にとって新聞が身近なものになり、楽しんで新聞と関わる様子がうかがえるようになってきた。昨今、家庭で新聞を読む習慣がない児童も少なくなく、新聞との関わりが学校のみという児童もいる。そういう状況だからこそ、学校において積極的に新聞に関わり、新聞を読んだり作ったり、そして活用したりする経験を積ませることが重要だと考える。本校の実践一つ一つが、児童と新聞との距離を縮め、新聞を親しむことから活用することへと繋げていくことができると考えている。

一方で、新聞を活用して他教科の学びや生活全般に生かせているのかどうかという点では、十分とは言えない。本校では、まだ新聞に親しむ段階であり、活用するという段階は課題と言える。教師側が提供した場のみの活動ではなく、身に付けた力を活かして、自主的に新聞を活用してほしいと思っているが、そこまで到達できていない。新聞を活用する段階へとステップアップするために、以下の点に重点を置いて次年度以降活動を続けていきたと考える。

・児童の発達段階に応じたNIE活動を、全校体制で確実に実践する。
・活動の成果を児童個々が実感できるように、自己評価できる機会を作る。
・活動の成果を保護者や地域の方々へ発表する機会を設け、その成果を児童・保護者・地域全体で共有できるようにする。

上記3点を念頭に置き、引き続きNIE活動を実践することで、児童の言語力の向上、社会的事象への関心、情報の取捨選択力、コミュニケーション力などの向上、といった本校のNIE活動のねらい達成を目指していきたいと考える。次年度以降も全校体制でNIE活動を推進し、活動の更なる充実を目指していきたい。

令和元年度　大浜小学校　ＮＩＥ実践報告書

石垣市立大浜小学校
教諭　具志堅美和
金城真紀乃

1　はじめに

本校は、今年度より日本新聞協会指定ＮＩＥ実践校となり、５学年を実践学年として新聞を活用した教育実践に取り組んだ。新聞を読む機会が少なく、新聞に慣れていない児童が数多くいる実態から、まずは、新聞に触れて親しむような活動を取り入れた。そして、朝の活動や国語科、社会科の学習を通して、日々の授業の中で新聞を活用するよう心掛けた。また、今年度は、本校の校内研究が国語科ということで、校内研究との関わりを持たせた取り組みを意識した。

2　ＮＩＥと校内研究との関わり

本校の校内研究主題は【「書く」力を育てる指導の工夫】である。本校児童は、県到達度調査や全国学力状況調査、標準学力調査の結果から、国語科において「書く能力」「読む能力」に落ち込みが見られた。「指定された長さで文章を書くこと」や「自分の考えを明確に書くこと」等に課題が見られる。そこで、日常的に新聞を活用することで、児童の「読む力」「書く力」を高めることができるような学習指導を校内研究と関連づけながら実践した。

3　本校の取り組み

毎週金曜日の朝の帯タイムや各教科の学習において、新聞記事を使った書く活動を設定。「新聞記事から読み取ったことや感じたこと」「見出しを考える」「新聞記事の内容を要約する」など、様々なワークシートを活用した。新聞に慣れ親しみ、興味関心の幅を広げるとともに、記事に対する意見をもつことを通して、読解力・思考力・表現力の向上を目指した。

新聞バイキングの様子

読む時間と書く時間の確保

各種コンクールへの挑戦

児童の作品紹介

≪実践者（教師）の感想≫

定期的に、新聞と触れ合う時間を設定することで、児童は色々な記事に関心を持ち、気に入った記事を意欲的に読むようになった。また、記事に対して、問題意識をもつようになり、多角的な視点から自分なりの答えをもつようになった。

令和元年度　ＮＩＥ実践報告書

浦添市立牧港小学校
教 諭　宮城 和人

1　はじめに

本校では，今年度ＮＩＥ実践指定校を申込み９月から配達がスタートした。実践にあたって，学校テーマとして「新聞に親しみ，主体的・対話的で深い学びの実現」を設定し，今年度は，６学年を実践学年として，平和学習の新聞づくりや，新聞記事の紹介，関連のコンクールに応募することを中心に新聞を活用してきた。

11 月に公開授業を６学年が行い授業後，校内研修を実施した。

2　本校の取り組み

(1) ＮＩＥ実践指定校の新聞配達は９月からだったので，６月から６学年は，朝日小学生新聞を各学級（３学級）１部ずつ購読した。

(2) ６学年ワークスペースに，ＮＩＥコーナーを設けた。

(3) ６学年は，新聞係があり，その日の新聞を配達し，各社の一面記事を入れ替えて掲示した。前日までの新聞は保管し，後日活用できるようにした。

NIE コーナー(一面記事を見比べる)

はがき新聞コーナー

掲示コーナー

ＮＩＥ(保管コーナー)

3　公開授業（令和元年 11 月 27 日）

・国語科　６年１組　指導者：宮城　和人

主題名　説得力のある文章を書こう　　教材名：意見文を書こう

ねらい　　本単元は，根拠をはっきりともち，相手を説得するための意見文を書く学習である。自分の意見を述べる文章を書く活動でもある。

意見文であるから，まず，自分なりの意見を確定し，次に，それをいかに説得力のある文章にするのかが問われることになる。

そのために，根拠をはっきり示せるようにすることが必要である。

新学習指導要領の，「B 書くこと」内容（1）イ，エ，カ，本時では，「C 書くこと」内容（2）ウ，にも関連する。

「見出しをつけよう」（iPad：ロイロノート）

「記事を黙読する」

「三段構成を意識して構成を考える」

「根拠の部分を確認する」

授業者の感想：　浦添市は，本年度から iPad が児童用 42 台導入され，１組では，調べ学習以外で，ロイロノートを活用することが多いので，本時も導入で，見出しを考えることから始めた。

また，意見文を書く時に，構成表があると子どもたちが，根拠を見つけて書ける子が多かった。

４　校内研修

研究授業後，校内研修を行った。ＮＩＥとは何か？という教師が多かったので，前任校で取り組んだ実践と，６学年の取り組みを紹介した，興味をもってくれた職員が多く，前向きな質問も多く出た。

最後に，無理なくできる取り組みから，スタートとすることを確認した。

５ コンクール

・日本新聞協会「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募。（６学年）
・沖縄タイムス社「スクラップ新聞コンクール」に応募。（６学年）

６ その他

・朝日小学生新聞の「よみとき新聞ワークシート」
・読売新聞の「ワークシート通信」
　以上２点が定期的に配布される。

７　アンケートから（６学年）

(1)「新聞の良いところ，興味をもったこと」

・いろんな情報がある。　・クイズがある。　・豆知識が増える。
・インターネットと違って，デマとかではなく，事実が書かれているところ。
・各新聞，同じニュースでも，違うことが書かれていたり，読みたくなる載せ方があっておもしろい。

(2)「新聞の難しいところ」

・たまに難しい（習ってない）漢字がある。　・文字が小さい。
・ページがたくさんあって，探したい記事が探しにくい。

(3)「新聞を使った学習の良いところ」

・今まで見なかった，記事を見るようになった。　・知識が増える。
・読むのが苦手だけど，読む力がついた。　・同じ記事を集めて貼ってわかること。
・記事の切り取りができ，ノート整理，スクラップ新聞が作りやすい。
・いつまでも残せるので，見ながら学習しやすい。

(4)「新聞を使った学習の難しいところ」

・まとめるのが難しい。　・読みやすいようにすること。
・たくさんの記事から，選ぶのが難しい。
・自分が集めたい記事を見つけるのに時間がかかる。

８　実践事例

関連教科とＮＩＥ

⑴　国語科（６学年）

・教科書『引用して話そう』『三字以上の熟語の構成』『複数の意味をもつ漢字』『熟語の意味』「新聞記事を書いて，言葉と事実について考えよう」

⑵　総合的な学習の時間（６学年）

・平和学習の取り組みとして，新聞記事の特別号で調べ新聞にまとめた。

・新聞記事スクラップ

⑶　体育科（６学年）

・オリンピック関連

⑷　図工科（６学年）

・鑑賞「遊んでアーティスト」（朝日小学生新聞）

⑸　家庭科（６学年）

・「おいしいおてつだい」（朝日小学生新聞）

⑹　特別活動（６学年）

・キャリア教育「みんなのお仕事」（朝日小学生新聞）

９　実践者の感想

本校は，ＮＩＥ実践指定校初年度なので，学校テーマの「新聞に親しみ，主体的・対話的で深い学びの実現」から，子どもたちに新聞に親しみをもつことからスタートした。学年集会で，新聞の見出しを見て，新聞社の伝えたい記事の紹介から始め，平和学習では，平和記念資料館で見学し調べたことと，沖縄戦特集号の新聞記事を組み合わせた平和新聞づくりができ，沖縄戦について深めることができた。

コンクールの取り組みとして，日本新聞協会「いっしょに読もう！新聞コンクール」は，夏休みの宿題として，多くの家庭で一緒に取り組んでもらえた。沖縄タイムス社「スクラップ新聞コンクール」は，子どもたちが自分のテーマに合った記事選びの中で，いろんな新聞各紙，記事に触れることができ，アンケートにあったように，新聞の良さに気づくことができた。

今年度は，図書室でも図書司書が新聞コーナーを設置しており，多くの児童が関わる機会が増えた。

次年度は，子どもたちがさらに，親しむことができる図書室環境にも取り組みたい。

令和元年度　石垣市立崎枝中学校　NIE 実践報告書

石垣市立崎枝中学校
教　諭　　平　哲也

１　はじめに

本校は、今年度より日本新聞協会指定 NIE 実践校となり、小学６年、中学全学年を実践学年として、新聞を活用した教育実践に取り組んだ。本校は５年前から新聞を活用して発表する取り組みを実践していた。今回、NIE 実践校に応募するにあたり、全国紙・県紙・地元紙を読み比べることで生徒の視野を広くし、発表する力を育成することでこれまでの実践をさらに充実させたいと考えた。今年度は、社会科や学級活動で取り組んだ実践を紹介する。

２　NIE と校内研修との関わり

本校の校内研修主題は、「確かな学力の定着を図り、自らの書く力、発表する力を高める指導の工夫～学力向上推進プロジェクト方策１及び方策４に焦点をあてた授業改善を通して～」である。本校は、5 年前から新聞記事を読んで、その記事の要約や感想を発表する集会の機会を設けている。この取り組みをさらに充実させることで、校内研修主題である「自らの書く力、発表する力」を高められると考え、実践を行った。

３　NIE コーナーの設置

平成 31 年４月より中学 1，2 年教室（社会科教室）と図書館を中心に全国紙・県紙 2 紙・地元紙 2 紙の新聞を閲覧できるコーナーを設置した。（図１）実は、今回の NIE 指定を受けて学校司書が近隣の学校や石垣市立図書館に声かけをし、新聞掛けを借用することできた。（図２）

新聞掛けのおかげで教室掲示のスペースがコンパクトなり、とても助かっている。

（図１）図書館に掲示されている新聞

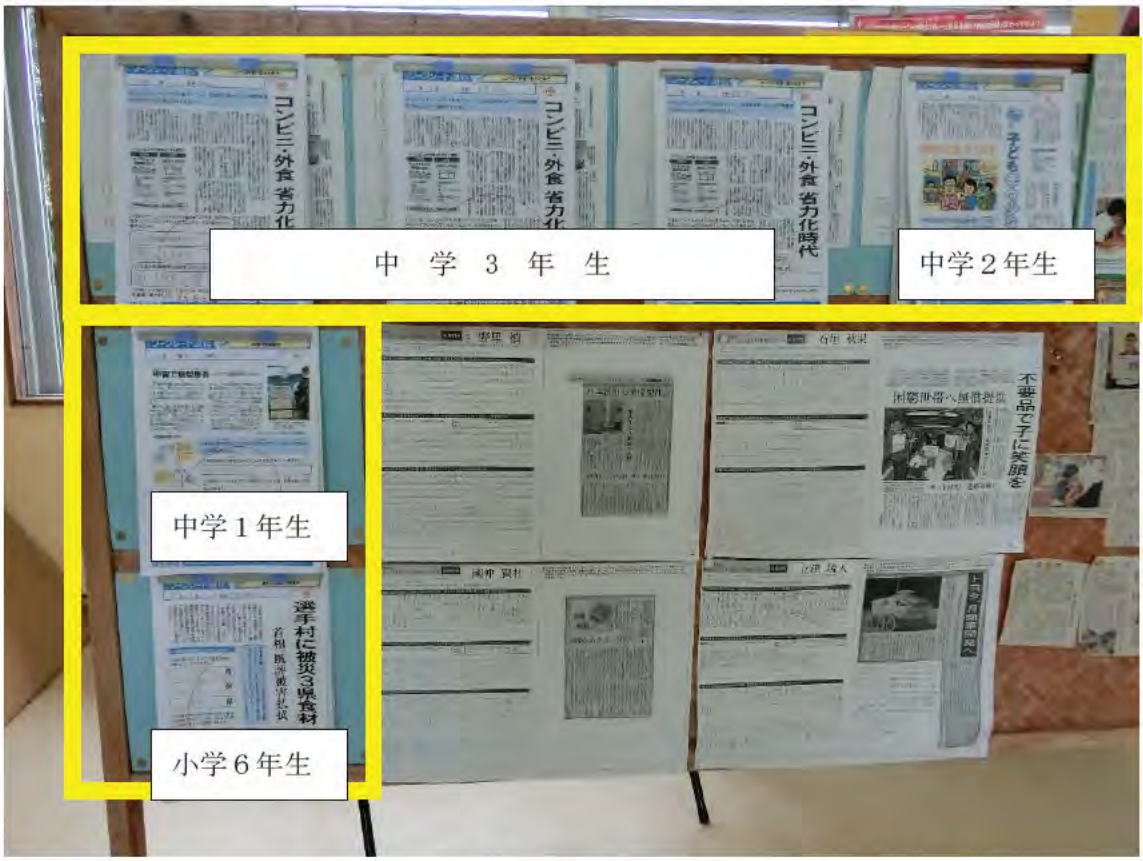
（図２）社会科教室の新聞掛け

4　実践の内容

（1）読売新聞ワークシート

読売新聞 HP で登録すると、毎週水曜日にメールで送られる読売新聞 NIE ワークシートを活用し、社会科の授業等で取り組んだ。対象は小学 6 年生から中学 3 年生の児童生徒である。最初は時間がかかったが、最近では、5～10 分以内で終えることができるようになった。ワークシートは授業後に教室後方の掲示板に貼り、思考の共有化を図った。（図 3）

また、最新ニュースを扱っていることもあり、児童生徒ともにワークシートの内容がテレビのニュース・インターネットニュースで見聞きした内容と同じだと話す回数が増えた。以上のように、ワークシート活用で少しずつだが効果が出ている。（図 4）



（図 3）教室後方の掲示板：小学 6 年生から中学 3 年生のワークシートを掲示

（図４）ワークシートに取り組んでいる様子

（２）発表集会

本校が５年前から実践している発表集会は、毎月１回、水曜日に行われる。中学生は、２カ月に１度のペースで発表場面が設定されている。生徒は自分が興味ある記事を切り抜き、内容を要約した後、その記事に対する自分の感想や意見を専用のワークシートにまとめる。この作業は、毎週金曜日の放課後 15 分を使って、各学級で実施した。内容をまとめたら、原稿を各担任と内容を確認し合い、集会で発表した。（図５）（図６）

（図５）中学１年生・中学２年生の発表

（図６）中学３年生の発表

（３）新聞スクラップ

発表集会の準備のために、新聞スクラップを社会科の授業や学級活動で行った。　夏季休業中の NIE 研修会で教わった「短時間で見出しのみをチェックする」作業を取り入れて記事探しをすると、生徒の集中力が高まった。研修会での学びは大きいと実感できた瞬間だった。（図７）

（図７）新聞スクラップの様子

（４）いっしょに読もう新聞コンクール応募

中学１年生の石垣秋果さんが、日本新聞協会主催「第 10 回いっしょに読もう新聞コンクール　」で県 NIE 推進協議会会長賞に受賞された。石垣さんが取り上げた記事は、フェイスブックを活用して、子どもが必要とする物資を生活貧困世帯に無償提供している団体を紹介する記事である。（図８）（図９）

（図８）県 NIE 推進協議会会長賞を受賞した作品

（図９）
「いっしょに読もう！新聞コンクール」掲載記事
（八重山毎日新聞　　R1.11.30 ）

石垣さん（崎枝中1年）が県1位

NIE推進協会長賞　新聞感想文コンクール

家族や友人と一緒に記事を読み、感想・意見を書いて記事とともに応募する新聞感想文コンクール、「第11回いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）の県内審査結果がこのほど発表され、崎枝中1年の[redacted]さん（12）の感想文が、中学校の部県1位の県NIE推進協会長賞に選ばれた。

崎枝中は毎月1回、全国紙、県紙、地元紙を読んで感じたことを発表するNIEを実践。生徒が1カ月に1回の割合で発表している。[redacted]さんはフェイスブックを活用して、子どもが必要とする物資を生活困窮世帯に無償提供している団体「ブックをしているんなら誰でも簡単にできる。この活動をもってお多くの人に知ってもらいたい」と感想文をまとめた。

「そして公共の場に不要品を入れる箱を作ってほしいです。フェイスブックなどは、お年寄りには難しいと感じたからです」などとつづっている。

同中の1学年は[redacted]さんのみ。「自分と同じ年代の考えや自分の考えに近い記事に惹きつけられる。同じ事実でも書き方や視点によって内容が違う。新聞を読み比べると新たな発見がある」と話した。

同コンには県内から小学校の部に108人、中学校の部に612人、高校の部に67人の応募があり、計110人が入賞した。表彰式は12月7日、那覇市の琉球新報社で行われる。

「第10回いっしょに読もう！新聞コンクール」の社説県NIE推進協会長賞に選ばれた[redacted]さん＝10日午前、崎枝中学校

（５）しんぶん感想コンクール応募

琉球新報社主催「第９回しんぶん感想文コンクール」に中学生が応募したところ、学校賞を受賞することができた。（図 10）（図 11）

（図 10）応募した生徒の作品

図 11）学校賞の盾

（6）八重山毎日新聞社取材

現在、石垣市では本校と小学校１校が日本新聞協会指定の「NIE」実践校である。10 月の新聞週間企画として、地元紙「八重山毎日新聞社」から NIE の取り組み状況の取材を受けた。取材では、中学３年生の授業を紹介し、NIE の効果を伝えることができた。（図 12、図 13）

新聞週間企画
教育現場に新聞を
（下）
崎枝中
新聞づくりに挑戦
情報収集力など鍛える

（図 12）→
「新聞週間企画　教育現場に新聞を
NIE 実践指定校の取り組み」掲載記事
（八重山毎日新聞　　R1. 10. 18 ）

←（図 13）
中学３年生３名が作成した
「まわし読み新聞」

4　成果と課題

（1）成果

○第 10 回いっしょに読もう新聞コンクール（主催：財団法人日本新聞協会）
　県 NIE 推進協議会　会長賞　石垣秋果（中学１年生）
　全国学校奨励賞　石垣市立崎枝中学校

○第９回しんぶん感想文コンクール（主催：琉球新報社）
　学校賞　　石垣市立崎枝中学校

○中学全学年で取り組むことで、どの生徒も新聞に関心を持つようになり、日常会話の中でニュースの話題が出るようになった。

○新聞を読むことの抵抗がなくなり、いろんな視点から自分なりの視点を持つことができた。

○第 10 回いっしょに読もう新聞コンクール」の応募の際、新聞記事に対して、家族や友達にインタビューしたことで、自分の考えが深まったとの感想があった。

（２）課題

●主要 5 教科（国語・社会・理科・数学・英語）での取り組みを目標として、研修会での事例紹介をしたが、達成できなかった。今後も、他校の実践事例や NIE の教育的効果を粘り強く紹介し、先生方の温度差をなくし、共通理解・共通実践を進めていきたい。その際、負担感のない取り組みから始める。

●次年度から小中連携での NIE 実践となるので、9 年間の学びをつなぐ NIE 活動を実践していく。具体的には、各学年の発達段階をとらえ、共通認識・共通実践を行うための連絡調整を密に行っていく。

令和元年度　NIE 実践報告

「自ら考え表現し伝える力を育成する授業の工夫」

―新聞の活用した主体的・対話的な活動を通して―

具志川高等学校
校長　上原　昇
教諭　澤岻良子

1. はじめに

「時代を拓く風となれ」今年度、令和に入り、本校が掲げたスローガンである。

本校は、「人間性豊かで、逞しい身体、優れた知性をそなえた新しい時代に対応できる創造性・国際性に富む人間の育成を目指す」ことを教育目標に掲げている。

２１世紀を生きていく子どもたちの教育改革が大きなうねりとなって現在進行形で進んでいる中、子どもたちが社会で生き抜く力をどう培うのか。また情報化社会の進展にともない、SNS を活用する子どもたちが増えモラルの低下や人間関係の希薄化が問題視される中で、自分の考えを表現し伝える力を身につけるためには何が必要かを考えた。この力を意識し、子どもたちの周りで起きている地域、日本、世界情勢に興味・関心を持ち社会との繋がりを認識させ、主体的・対話的な深い学びによる授業を実施することで、自身の考えを表現し相手へ伝える力が身につけられるのではないかと考え、NIE の手法を取り入れ、新聞を活用した授業展開の工夫に取り組んだ。

2. 生徒の実態

１　実態調査

(1)　アンケート実施（５月:3 学年文系 120 名）

①　「あなたは、社会情勢や気になるニュースをどのように情報を得ますか。」
スマホ活用・テレビ 89%、新聞 2%、その他というアンケート結果になった。日頃からスマホを使用し情報はスマホから取り入れていることがアンケートからわかった（図１）。

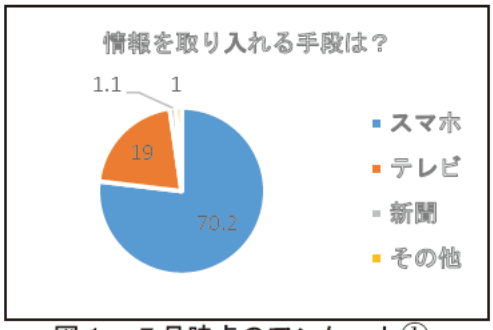


図１　５月時点のアンケート①

②　「どのような情報を得ることが多いですか。」
世界情勢 2%、日本や地域の政治・経済 14%
スポーツ・音楽など芸能分野 84%と８割が生徒の興味ある身近な分野であった（図２）。
自分の興味のある情報は手に入れるが、世界情勢や社会情勢については目にしない、考えないという傾向がある。

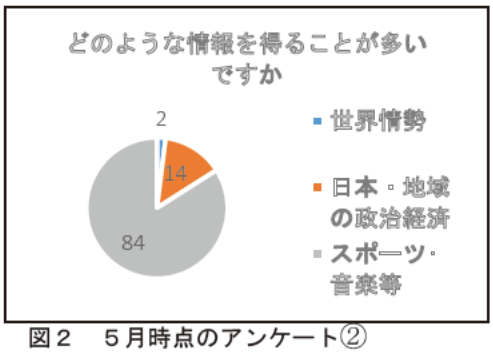


図２　５月時点のアンケート②

③「あたなは新聞を読む環境はありますか」という質問に、「新聞を家でとってないので、日頃から新聞を見る機会がない。」「スマホでも情報を得ることができる。」「家に新聞はあるが、読む時間がない。」という回答であった。新聞を毎日読む、ときどき読む 14%、ほとんど読まない、読まないが 80%であった。アンケート結果から、新聞を読む機会がない現状があり、情報化の進展によち自分が気になる社会情勢を選び情報を得ているが、偏りがあり活字を読み考えるという機会が薄れてきているのがわかった。

3. NIE コーナーの設置

全校生徒が新聞を読めるよう、生徒会室前へ新聞コーナーを設置しイスに座り自由に読み話し合いのできるスペースを設置(図３)

全国版の新聞、県内版の新聞を分け、今日の新聞の紹介をし、誰でも手に取り、読める新聞コーナーの設置は、３年生をはじめ、全学年の生徒たちの新聞活用の場となった。

図３　新聞コーナー

4.　実践内容

（１）　新聞を活用した授業

（「読む・要約する・考える・意見を記入する・伝え合う（聴く・話す）の授業展開」）

新聞に目を通し、気になる記事をじっくり読み、切り取り、要約しまとめ、意見を述べる（図４）

グループで、各自が選んだ新聞の「要約」、「意見･感想」を一人ずつ発表する。発表を聞いて、一つの記事についてグループでそれぞれが意見を伝え合う。

最後に「クラスの皆にも伝えたいニュースランキング」をグループごとに付け、１位に選ばれた生徒は、全体でその記事を発表し、それぞれが意見を述べ合う(図５)。

また、SDGs を取り入れ、新聞の内容と関連する項目を抜き出し、意見を述べる授業展開の工夫（図６）

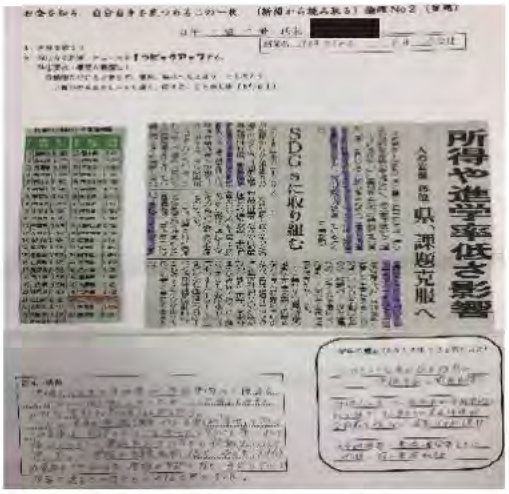


図４　新聞ワークシート

図５　新聞活用した授業

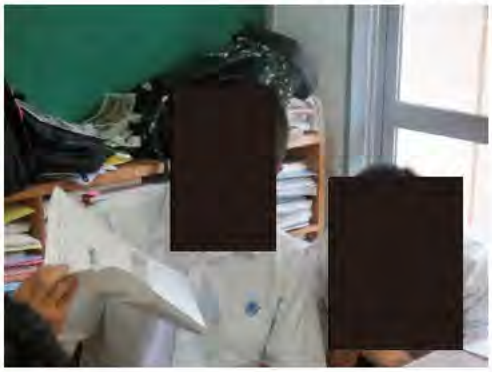


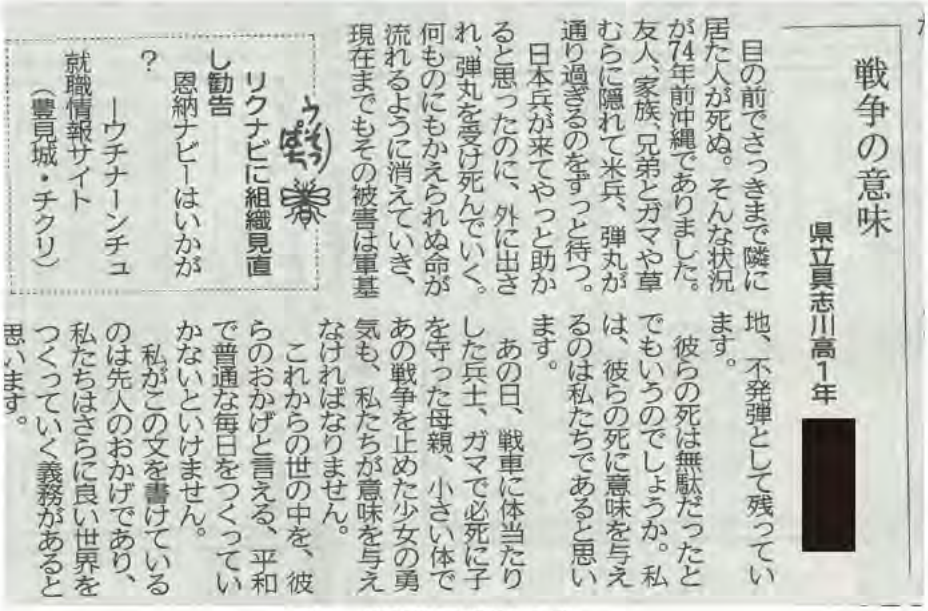
図５　新聞記事を紹介し意見を述べ合う

図６　SDGｓと新聞活用した授業

（2）　「慰霊の日」に向けた平和学習「沖縄戦と平和メッセージ」作成（考える・想いを伝える）

6.23 統一 LHR「慰霊の日について」は学校全クラスで子ども新聞「慰霊の日特集」ワラビーとりゅう PON！を活用し、沖縄戦について学び、その後に、「沖縄戦といまある私たちの平和」という題で平和メッセージ作成し新聞社へ寄稿した。（図 7、図 8）

自分の考えを文章にし、その想いを全体へと呼びかける文章作成は、生徒たちにとって、「想いをどう伝えたらいいのか、わからない」等、改めて「平和」を考え、何度も対話を重ねた主体的に活動する授業となった。



戦争の意味

県立具志川高1年 [redacted]

目の前でさっきまで隣に居た人が死ぬ。そんな状況が74年前沖縄でありました。友人、家族、兄弟とガマや草むらに隠れて米兵、弾丸が通り過ぎるのをずっと待つ。日本兵が来てやっと助かると思ったのに、外に出され、弾丸を受け死んでいく。何ものにもかえられぬ命が流れるように消えていき、現在までもその被害は軍基地、不発弾として残っています。

彼らの死は無駄だったとでもいうのでしょうか。私は、彼らの死に意味を与えるのは私たちであると思います。

あの日、戦車に体当たりした兵士、ガマで必死に子を守った母親、小さい体であの戦争を止めた少女の勇気も、私たちが意味を与えなければなりません。

これからの世の中を、彼らのおかげと言える、平和で普通な毎日をつくっていかないといけません。

私がこの文を書けているのは先人のおかげであり、私たちはさらに良い世界をつくっていく義務があると思います。

うるぱぴ

リクナビに組織見直し勧告

恩納ナビーはいかが？

―ウチナーンチュ就職情報サイト（豊見城・チクリ）

図７　琉球新報 (2019. 9. 2)

(元年) 7月21日 日曜日　オピニオン 4

医療経営の必要性知った

[redacted]高3

先日の講演、「医療経営学」いのちと向き合う経営学のお話を聞いて、2017年で日本の人口は、1億2700万人だったのが、58年には、約8700万人になり、40年間で約4千万人減るということが分かり、また、15～64歳が減少して、高齢者が増えていくことが分かりました。高齢者が増えると、もちろん、医療と介護を必要にするけど、医療は介護よりも4倍必要になってきて、医療費がとても大切になります。

でも少子高齢化が進むにつれて、お金を支えている働く人たちが減っていく。加いて、医療経営とは何か。あまり分からなかったけど、医師や看護師以上に、医療経営は求められると知り、どんどん高齢者が増えていく中で、医療費のことなど考えないといけないことが多くてびっくりしました。そして、今回の講演で、やっぱり勉強は大切で、基礎をしっかりできるようにしておきたいと思いました。

（与那原町・知念高）

沖縄の歴史 現状知るべきだ

[redacted]高1

「平和な日常がずっと続けばいいのに」と人々は言うけれど、そもそも今は「平和」なのだろうか。

この島でおこった惨劇を知る上で、戦争と平和というワードは欠かせない。平和のための戦いと称し、日本は連合軍と戦った。何の意味もないこの戦争は終わったが、日本は、沖縄は平和なのだろうか。人々が笑い、楽しく過ごすこの島の空には、今でも米軍のヘリがとぶ。友達と一緒に歩き、ふみしめているこの地には不発弾が残っているかもしれない。これが今の沖縄なのだ。

平和のために、これらを解決すべきだと言いたいわけではない。これらが何故あってしまったのかを私たちは知るべきだと思うのだ。この地で何があったのか、何故こうなってしまったのか、自分で調べ、考え、自分なりの意見をもってほしいと思う。そうすれば「平和」がどういう姿をしているのか、見えてくるのではないだろうか。

（うるま市・具志川高）

図８　沖縄タイムス (2019. 7. 19)

５．　実践の中間報告（１年目実施報告）

今年度NIE実践校として1年目を終えて、次年度へ向けて新聞を活用した授業展開の工夫改善をし、読む、考える、意見を持つ、述べるといった主体的・対話的な授業の工夫をしていきたい。

2019 年度　NIE 実践報告書

学校法人佐藤学園：ヒューマンキャンパス高等学校（全国広域通信制普通科：３９００人）
名護市三原区 263 番地　　担当：友利　奈央

1.はじめに

本校では、2019 年度から NIE 実践指定校に認定され、通信制高校初の実践校となる。スクーリングで全国の生徒と関わる中で、全国紙と地方紙を通して沖縄についての興味関心に繋げるとともに、新聞を活用した授業で新聞を身近に感じ、それぞれの地元でも新聞の活用ができるよう実践を進めた。インターネットが普及し、生徒が情報収集するには、専らスマートフォンやパソコンを使用し、自分の興味関心のある分野だけという限定的な現状だが、この NIE を通して新聞から広い視野を養っていけるよう取り組んでいる。

2.成果と課題

(1)成果

①校内研修を行ったことで、各教科で新聞を活用した授業を模索するようになった。
②生徒が活字に触る機会で国紙と地方紙の違いから伝達される情報の違いや面白さに気付くことができた。
③県内外の生徒と授業を行う中で、地元紙との違いを自然に話しはじめ、交流のきっかけになった。

(2)課題

①通信制高校で単発での授業展開となり、特定の教科だけでなく、多くの教科で活用できるように検討する。
②新聞コーナーを作成し、より新聞にふれる場所を設ける。

3.本校の取り組み（①NIE アドバイザー宮城通就教諭の校内研修　②新聞記事の掲示　③授業実践）

①NIE アドバイザー宮城通就教諭（辺土名高校）による職員対象 NIE 校内研修

１：新聞の構成や特長について
２：学習指導要領との関係について（大学共通テストとの関連含む）
３：全国紙と地方紙の違い　～ワークその１　「違いを発見しよう」（15 分程度）～
　・読み比べればできる、5 種類の学びの紹介
　（『これならできる！新聞活用　NIE 入門ガイド』（日本新聞協会）より）
４：第 34 回全国 NIE 大会（宇都宮大会）　報告（高校編）
５：新聞活用授業事例の紹介（『新聞授業 ガイドブック』（朝日新聞）
６：～　ワークその２　「沖縄のよさをアピール」（35 分程度）～
７：まとめ

②家庭科室での新聞記事の掲示

③授業実践（英語・国語）

（1）英語　学習指導案

ヒューマンキャンパス高等学校
英語教諭　石川　倫

1．日時

令和元年 11 月 18 日（月）50 分

2．実施クラス

那覇・名護学習センター2 年次（28 名）

3．生徒観

本校は通信制高等学校であり、本授業は那覇学習センターと名護学習センターの合同クラスである。普段は共に学ぶことはないが、年数回のスクーリング授業において顔を合わせている。英語に対する苦手意識が高い生徒が多い様子である。

4．教材

・県内新聞（2 社）

・ワークシート

5．単元設定の理由

日常的に使っている日本語の中にも英語で通じる言葉があるということを理解してもらいたいため、新聞を活用し、英語に苦手意識をもつ生徒に、少しでも英語に興味をもってほしい。新聞を見て、日本語であるカタカナ語を探し、英語圏で意味が通じる語と通じない語があることを知ってほしい。

6．本時の目標及び評価基準

（1）本時の目標

ア．テーマである和製英語に興味をもち、積極的に活動に参加する。新聞の中からカタカナ語を探し、英語圏で伝わる語と伝わらない語を知る。

イ．ビンゴ活動を通して、新たな英単語を知る。

（2）評価基準

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

②外国語表現の能力

③外国語理解の能力

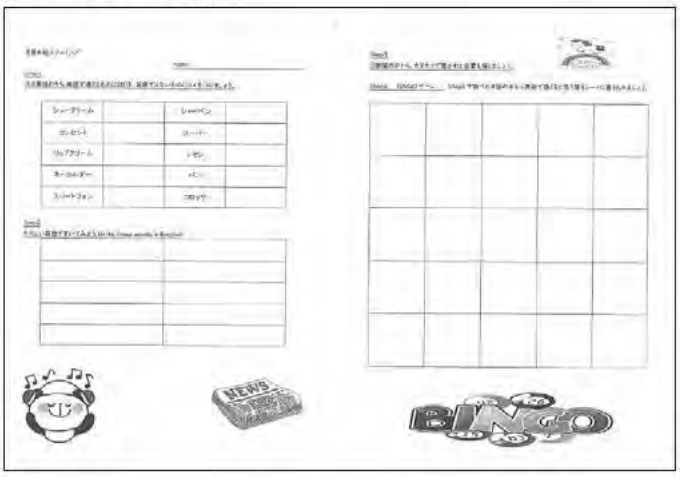
④言語や文化についての知識・見解

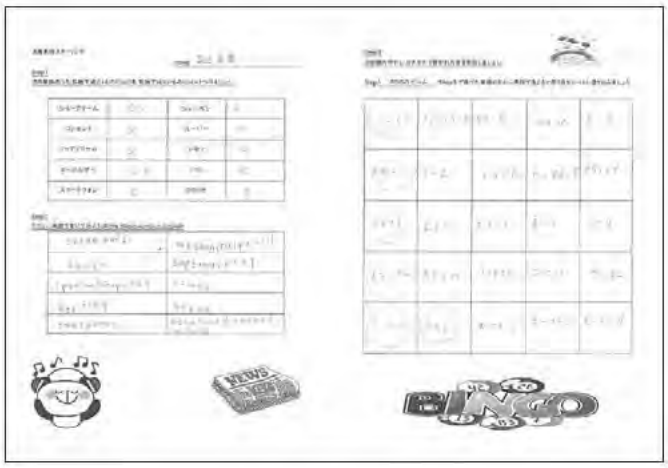
7．本時の展開

時間	指導過程	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5 分	warm-up 担当教員の自己紹介	担当教員の自己紹介を英語で聞いて理解する。	英語の授業に入りやすい雰囲気づくりに努める。	

7 分	和製英語クイズ	①ワークシートに書かれた語について、英語で通じるか通じないかを考える。通じる語には〇を、通じない語には×を書く。 ②答え合わせ ③それぞれの和製英語について正しい英語を書きとる。	机間巡視をし、手が止まっている生徒への声掛けを行う。	
15 分	新聞からカタカナ語を探す。	①普段新聞を読むかの問いに答える。 ②新聞に目を通し、カタカナで書かれた語に〇をつける。 （10 分）	①新聞を読む生徒の実態調査。 Do you often read newspaper? ②新聞から見つけた語は、次のビンゴ活動で使用することを伝え、英語で伝わると思うカタカナ語を 25 個以上探させる。	
20 分	アクティビティ 【ビンゴ】	①見つけた語をビンゴシートへ記入し埋める。 ②一人ずつ、単語を言っていき、英語で通じる語であれば×を書いて、消していく。 ③ビンゴになった生徒はビンゴ！と大きな声で言う。	②英語で通じるか通じないかを答えていく。 生徒の興味を持続させるように声かけを行う。明るくテンポよく行う。 ・生徒からあがった語について英語を提示していく。	
3 分	まとめ	本時の感想を書く。	机間巡視	

①ワークシート添付





②生徒の感想

・新聞の中にもカタカナ英語が使われていることが分かった。

・思ったよりも新聞の中に多くのカタカナが使われていて、全てが英語で通じるわけでなないことが調べて分かった。

・新聞の種類を少なく（２～３種）にするとより早くビンゴができると思った。

・新聞にたくさんの単語があってビンゴが楽しかった。

（1）国語

ヒューマンキャンパス高等学校
国語教諭　當山　由佳

○　全国の新聞を見比べよう

新聞離れが進んでいるといわれており、今回授業を受けた 20 名の生徒の家で新聞を取っているは 3 人と、新聞になじみがない生徒がほとんどであった。新聞に興味をもってもらうために、まずは地方紙と全国紙の違い、新聞の見出しの特徴や重要性を知ってもらう。

○　新聞スクラップを作ろう

まとめる題材のテーマをくじで引き、そのテーマの中から気になる記事をスクラップし、各項目を書いていきます。

イチャリバチョーデー

感動した。ここには、素朴で、新鮮で、希望に満ちた高校生がいた。

学校創立５周年記念式典・*踊り弾けた記念祝賀会*

学校創立五周年式典
生徒の司会とあいさつに
会場が感動に包まれた。

学校法人佐藤学園
ヒューマンキャンパス高等学校
名護本校
校長　仲地暁

学校法人佐藤学園ヒューマンキャンパス高等学校創立記念式典が八月三日、名護市役所久志支所ホールであった。

名護市三原（旧三原小学校跡地）に二〇一四年に開校した。

式典では、歯切れよく、心地よく聞かせる司会は一年生の玉城詩織さん、いつも自分を支える学校を切々語る在校生代表あいさつは三年生の仲村優李さん、将来希望する道を後押しされたと、しみじみと語る卒業生の清水美佳さん、三人の素朴で、新鮮で、希望に満ちた姿に、会場は感動に包まれていた。祝賀会では約二百人の関係者らが踊り弾けた。

令和元年度　NIE 実践報告書

沖縄市立高原小学校
教諭　座喜味　美夏

1 はじめに

本校は、２年間の日本新聞協会指定の NIE 実践校としての実践経験を経て、昨年度より沖縄県 NIE 推進協議会指定実践校として NIE の実践に取り組んでいる。前年度は、全校での取り組みを行ってきたが、今年度は高学年を中心に NIE の実践を行ってきた。

また月に一度、朝の活動の時間に NIE の時間を設け、各学年で新聞の読み聞かせ、レッツ NIE を活用した取り組みを行った。また各教科と関連させた新聞を活用した授業、新聞制作やはがき新聞作成にも取り組んでいる。

2 本校での取り組み

・各学年で県紙２紙を年間４ヶ月、購読の月を設け活用
・各学年で NIE コーナーや新聞コーナーを設けた
・NIE 担当が各学年に新聞を配布
・新聞関連のコンクールへの応募、県紙への作文・日記の投稿
・図書館に子ども新聞「りゅう PON」「ワラビー」の掲示
・朝日新聞読み解きワークシートの活用
・新聞を活用した授業の実施
・教科と関連させたはがき新聞の作成

3 実践事例

（１） 月に一度の朝の活動（ＮＩＥの時間）【全学年】

学年	具体的内容
１年	・教師による新聞の読み聞かせ
２年	・教師による新聞の読み聞かせ ・はがき新聞を活用して図工の作品のまとめ
３年	・教師による新聞の読み聞かせ
４年	・教師による新聞の読み聞かせ　・記事に関する意見の交換 ・記事に関する意見や感想を書く
５年	・教師による新聞の読み聞かせ　・児童が気になった記事を切り抜く ・記事に関する意見や感想を書く　・新聞ツイッター
６年	・教師による新聞の読み聞かせ　・児童が気になった記事を読む ・はがき新聞の作成　・記事に関する意見や感想を書く

（1）ＮＩＥコーナーの設置【５年】

○いつでも新聞を手に取れる環境の整備

○調べ学習での新聞の活用

（2） 参観日に親子で新聞に親しむ【4 年】

○日曜参観を利用して保護者にＮＩＥについての理解してもらう

○保護者に読み聞かせをしてもらい、新聞を切り抜き、感想を書く作業

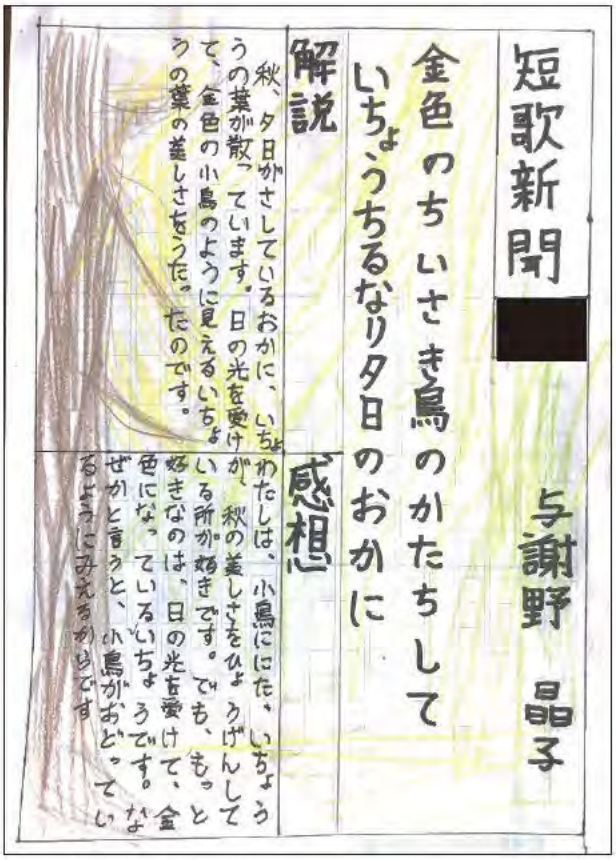
（3） 新聞パズルからオノマトペを考える【4 年】

○夏休み期間中に琉球新報さんの紙面に載っていた「ぼくのわたしの夏日記２０１９」の見出しの一部のオノマトペを、記事や写真から考える活動。グループのチームワーク、記事を読む、見出しを考える作業で子どもたちも大盛り上がり。

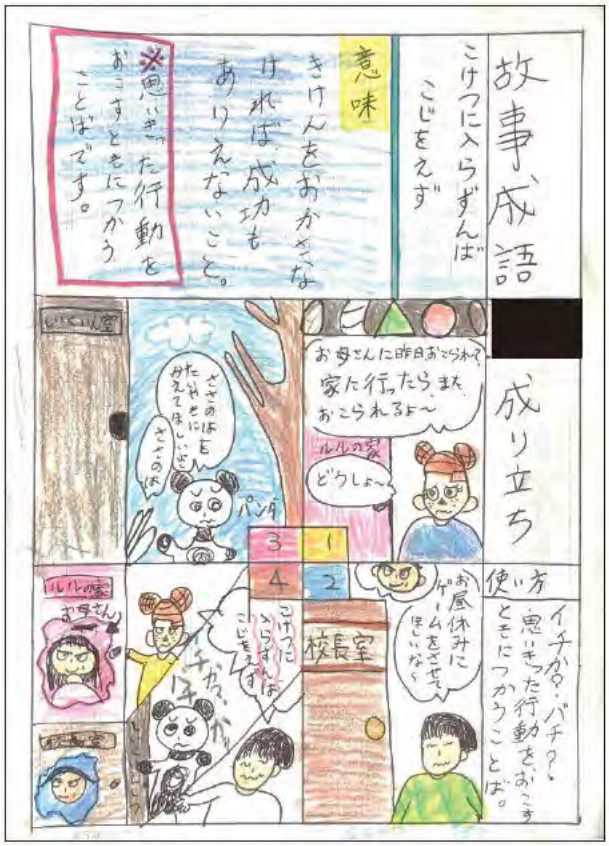
（4） はがき新聞にまとめる【2年・4年・6年】

【図工】水に関するポスターのまとめ

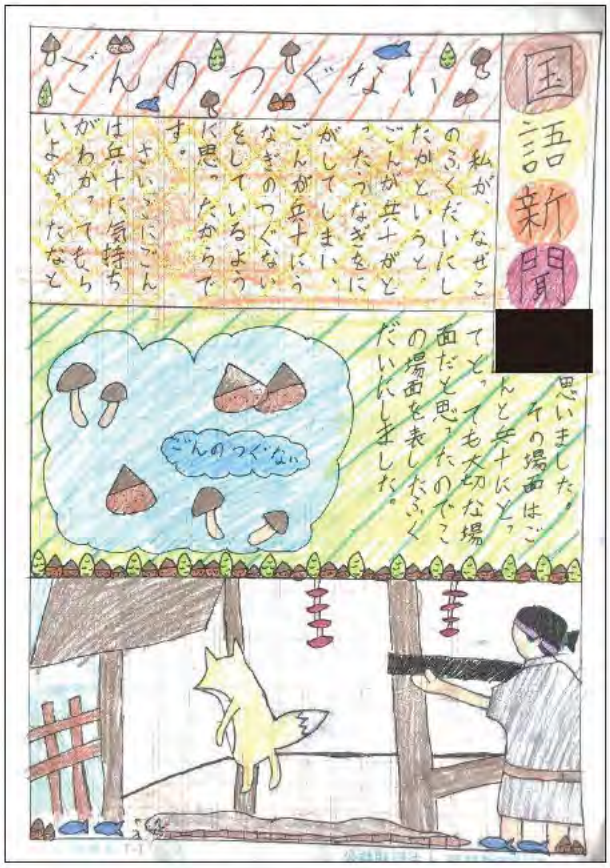
【図工】歯のポスターのまとめ



【国語】短歌の鑑賞

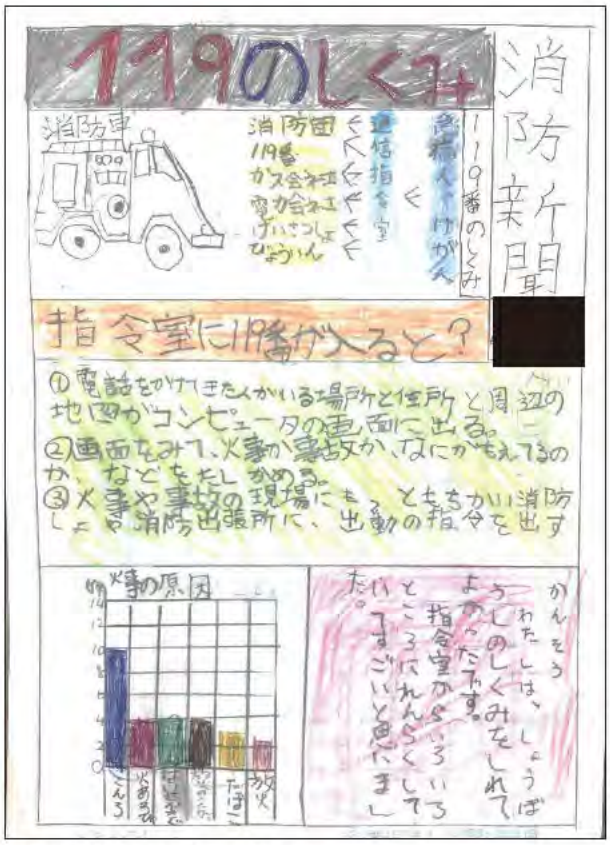


【国語】故事成語の成り立ちを調べまとめる



【国語】「ごんぎつね」副題を考える

【社会】「読谷村のむらおこし」について



【社会】消防署見学後のまとめ

【夏休み】夏休みの出来事を新聞にまとめる

成果

○はがきサイズの新聞は児童にとって手軽で、楽しみながら取り組める

○各教科のまとめで手軽に作成できる。１枚の紙に児童のアイディアが盛り込める。

（5） 新聞投稿【全学年】

○児童の日記を中心に新聞に投稿。初めは生活の中の出来事を中心に書いていたが、書くことに慣れてくると、新聞を読んでの自分の意見や感想も書けるようになってきた。

僕の主張 ■ 私の意見

紅型の色差し

沖縄市立高原小4年 ■

1月26日に日曜参観があり、その中で紅型の色差しという作業をしました。

私は色あざやかに塗ることを意識しました。それだと色差しとは、のり付けをした布に筆をつかって染料をグリグリ塗ることです。

いにできると思いました。

私はこの2時間で沖縄の染め物の体験ができたし、カラフルに色を塗ることもできたのでとてもよかったです。あとは、のりをとったら完成です。出来上がりが楽しみです。

沖縄らしさがでるし、きれ

令和2年 2月13日 琉球新報

委員長になって

沖縄市立高原小4年 ■

私は、4年生になって学級リーダーに立候補しました。その時にみんなの前でどんなクラスにしたいのかを伝えました。

一つ目は、一人ひとりが思いやりをもって、楽しいクラスにしたいこと。二つ目は、わからないことがあったりした時に、すぐに助け合えること。

その二つをみんなに伝えて、学級リーダーになることができました。学級リーダーになって頑張りたいことは、みんなをまとめてグラスが一丸となるようにしたいです。

私が見本となってお礼や、あいさつを進んでできるようにしたいです。そうすると、みんなに思いやりの気持ちが広がって、楽しいクラスになると思います。

また困ったことがあったら学級会を開いて、みんなで解決していきたいです。

令和元年 6月3日 琉球新報

頑張るお父さんに感謝

沖縄市立高原小4年 ■

6月16日は「父の日」です。お父さんには、お仕事を頑張ってもらったり、洗濯をしてもらったりして、すごく感謝しています。

私は、学校での勉強が午後3～4時には終わって帰れるけど、お父さんの仕事は6時半ぐらいに終わるので、私より頑張っていると思います。

子どもや家のためにお仕事をしてくれているんだなと思うと、「私もいっぱいお手伝いを頑張らないといけないな」と思いました。

お仕事や家のことをしてくれているお父さんはとてもすごいです。「父の日」は、楽にしてあげたいなと思います。

令和元年 6月16日 琉球新報

（6） 各種コンクールへ挑戦

「いっしょに読もう新聞コンクール」（日本新聞協会主催）

4年 宮里 綾理 【奨励賞】

新聞協コン 奨励賞4人

日本新聞協会は25日、「いっしょに読もう！新聞コンクール」の受賞者を発表した。県内からは■■■■の4人が奨励賞（118編）に選ばれた。県NIE推進協議会は、全国表彰とは別に県内作品を対象とした同協議会選定の2賞6人と合わせた計10人を顕彰する地域表彰式を、12月7日午前11時から那覇市の琉球新報社で開く。

コンテストは、新聞記事を友人や家族に読んでもらい、その意見を踏まえて自分の意見を書くもの。全国で5万7561編の応募があった。学校単位の取り組みを評価する学校奨励賞（182校）には豊見城南、嘉数中、具志頭中、興南中、宜野座高が選ばれた。

全国奨励賞の■さんは、学校で学んだSDGs（持続可能な開発目標）と辺野古の埋め立てに関する記事を関連付けて考え「埋め立ては『海の戦かさをすろう』の項目に反しているので中止すべき」と意見を書いた。しかし、姉との意見交換を経て基地で働き生計を立てている人たちがいることを知り、「今ある基地を減らし、基地で働いている人たちが生計を立てられる別の土地利用の方法を話し合っていきたい」と考えを深めた。

■さんが読んだのは、ユニクロがレジ袋を紙製に切り替える記事。友人と記事について話し、身近な生活に関わる問題と実感。「法律の規制では追いつかない部分がある。一人一人が考えて対策を取る必要がある」と考えた。今は買い物にマイバッグを持って行っているという。

■さんは、沖縄国際大の米軍ヘリ墜落事故から15年の節目に開催された集会の記事を選んだ。いつもニュースを教えてくれる祖父の「風化させてはいけない」という言葉が印象に残った。「沖縄の人としてやはりこわい。事故が二度と起きないように祈っていきたい」と話した。

■さんは、財布をなくして困っていた高校生に6万円を貸した医師の記事を選んだ。母からは「優しさのリレーみたいだね」とのコメントを受け、「リレーが広がってみんなが幸せに暮らせる世界になったらいい」と自身の感想をつづった。

県NIE推進協議会選定の2賞は次の通り。（敬称略）

来月7日地域表彰式 県NIE推進協2賞は6人

【県NIE推進協議会選定】■

■さん（高原小4年）

これからも地域とともに 沖縄タイムス 高原中央販売店

沖縄タイムス 2019年11月26日

【2019 11月26日沖縄タイムス】

「第９回りゅうＰＯＮ題字コンテスト」（琉球新報主催）

４年　桑江　小町　【優良賞】

【2020　１月５日りゅうＰＯＮ】

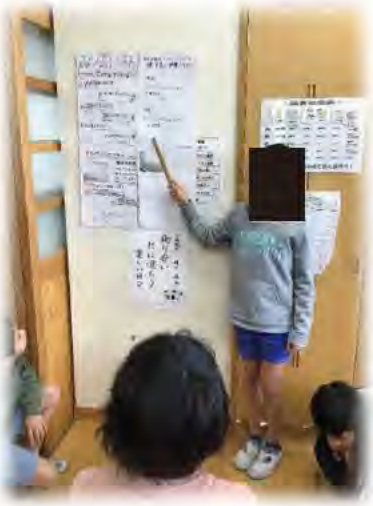
「第９回県新聞スクラップコンテスト」（沖縄タイムス主催）

４年　安里　里旺　【優秀賞】　　４年　宮里　綾理　【佳作】

４年　嘉陽田　椿　【佳作】　　４年　島袋　和花　【佳作】

（７）　各教科で新聞作成を行いポスターセッション【４年・５年・６年】

○「沖縄戦について」「便利なものについて」調べたことを壁新聞にまとめ、ポスターセッションをすることでより、理解を深めることができる



４成果と課題（成果○　課題●）お礼

○読み聞かせを行うことで記事に対して様々な視点で自分の考えを持つようになり、意見を持ち、それらを表現できるようになってきた。

○はがきサイズの新聞枠を使用することで児童にとって手軽で，楽しみながら見出しを工夫し,日常の出来事を簡単な記事にすることで５Ｗ１Ｈを意識して書くことができた。

○沖縄戦について調べたことを壁新聞にまとめ，グループでポスターセッションを行うことでより調べたことを表現したり，伝えたりする方法を学ばせることができた。

●振り返りを付箋紙で貼るだけでなく、アドバイスを活かして別の記事で取り組ませたい。

●地域に関する記事や世界で起きている事実について触れる機会を多くもつよう意識させていきたい。

●ＮＩＥ活動を学校全体に広げていく方法を考えたい。

※地域の販売店さんには、日ごろのＮＩＥ活動に協力してもらい、児童が新聞に親しめるようにと必要部数の確保を快く受けてくださいました。感謝いたします。

テーマ「社会に関心をもち、課題に対して多角的視野から考え，発信する力を育てる」
～学校、家庭での新聞活用を通して～

沖縄市立比屋根小学校　教諭　仲村　拓磨
川上　涼子

１．比屋根小学校では、Ｈ２６年度より NIE の指定校として認定され高学年を中心に授業や日常的な活動に NIE を取り入れてきた。今年度もテーマを継続し、活用に関しては、職員や児童が気軽に活用できる NIE を目指して、全学年で月に一回朝の新聞読み聞かせを実施した。本校の課題として挙げられるのが、「学習意欲はあるが, 学習の中で課題に対して問題意識を持ち, 自分なりの考えをもつことを苦手としている児童が多い」ということが挙げられる。この現状をうけて、今年度はこれまでの活動も引き続き行い、さらに、各学年の実態に応じた新聞活動を通して「社会に関心をもち, 課題に対して多角的視点から考え, 発信する児童を育てる」ことを NIE 活動の大きなねらいとした。特に高学年では、昨年度以上に授業での新聞活用やはがき新聞の実践に力をいれてきた、

２．児童の実態と活動を方針

（１）児童の実態

学級アンケートなどから新聞の閲覧頻度が低いことがわかった。この背景には、インターネット、スマートフォンの普及により、新聞購読率が低下、活字離れが影響していると考えられる。そのため、児童自身、社会への関心が低く、社会性に乏しいという実態がある。また，全ての教科において、課題意識が低く、自分の考えをもたない児童が多い。また、自分の考えを相手に分かりやすく伝えることが苦手な児童が多い。

（２）活動方針

実態を踏まえたうえで、学習活動だけで新聞活動をしても効果が低いと考え、まずは日常的に新聞に触れさせ、新聞に親しませること活動を行った。また、学年で年間を通して NIE 活動を実践していくために「無理なく、楽しく，継続できる活動」を教師のテーマにかかげ、活動を行ってきた。さらに、今年度も、書く力をつけるために、はがき新聞や記事を読んでの感想などで書く活動を計画した。以上の方針を踏まえて、以下の活動を行った。

①新聞に触れる
②新聞に慣れ親しむ
③記事を読み、自分の考えを発信する。
④記事を学習活動で活用する。
⑤キャリア教育で活用する。
⑥はがき新聞

３．学校、学年としての取り組み

＜学校＞

・新聞読み聞かせ
・図書館で新聞閲覧コーナーを設置
・学校の掲示板に NIE コーナーを設置
・新聞の読み方を学ぶ授業の実施（NIE アドバイザーの活用）

＜学年＞

・各教科での活用　　・朝の読み聞かせ
・はがき新聞　　・理科新聞の作成

４．新聞活動にあたっての工夫

・新聞購読の年間計画を立てる際に、各教科の単元配列を意識した。また両新聞社から提供された新聞を６学年各学級に配布した。

・家庭へ協力依頼をし、新聞を提供してもらった。

・教師が授業で使えそうな記事を収集し，授業で活用した。

・販売店から子供新聞を提供してもらった。

学級保管

５．実践について

（１）新聞活動を通して身につけたい力

①課題に対して問いを持ち，多角的な視点から考えを持つ。そして分かりやすく表現する力

・記事から読み取ったことを５Ｗ１Ｈに意識しながらまとめる。（表現力）

・感想や意見を相手に伝わりやすくまとめる。（表現力）

・記事に対して問いを持つ。（思考力）

・社会に関心を持ち、自分の考えや意見を持つ（思考力）

・自分の意見と比べながら相手の意見を聞き、さらに自分の考えを深める

（思考力、判断力、表現力）

②広い視野に立って考える力

・記事について話し合い活動を通して、社会的事象を多面的にとらえる力（思考力、判断力）

（２）実践の概要

単　元	実　践　内　容
国　語	・単元での活用、読み聞かせ　はがき新聞
社　会	・政治・国際関係　・環境　・事件・事故　・新聞作り、教育
理　科	・理科新聞
道　徳	・記事を読んで感想（ワークシートを作成）・記事をもとに話し合い活動
総合的な学習の時間	・キャリア教育での活用（努力、協力、挑戦　職業観） ・記事についての感想、意見の交流、・国際理解教育 ・新聞作り　・平和学習
日常的活動	・読み聞かせ　・記事を読んでの意見交換　・新聞投稿

（3）実践するにあたっての工夫

①教師間の工夫

・教師間で新聞活用方法、効果を情報交換（資料提供）

・校内研 OJT でのワークショップ

・NIE アドバイザーを活用しての授業実践（新聞の読み方や見出しの付け方など）

②新聞に関心を持たせる工夫

・読み聞かせをし、感想交流（教師）

・児童が関心ある記事、写真をグループ、全体に紹介

・新聞を教室に置き、いつでも読める環境を設定

・NIE 専用掲示板を設置し、児童がいつでも新聞に親しむ工夫をした。

・写真や記事、児童のコメント等を掲示

・図書館前、職員室前での記事やクイズの紹介

・はがき新聞を活用しての単元のまとめ

・行事や自分の出来事のはがき新聞を作成する。

③言語活動を充実させるための工夫

・読み聞かせや児童のスピーチをする際に話し手・聞き手に感想、意見を持たせる。
※教師が１つ発問をする。

・日頃から記事に対してペア、グループで少し話し合いをさせる。

・見本となる意見、活発なグループを具体的に褒める。

・日々の授業から常に自分の考えを持つように指導する。

・行事や思い出をはがき新聞に書くことで要点をまとめる力を養う。

（4）実践例

＜日常的な活動＞

全学年共通　朝の新聞読み聞かせ

・毎月第一月曜日に全学年共通で朝の新聞読み聞かせを実施している。

お互いに気になる記事を紹介し意見交換

・朝の読書の時間を利用して自分の関心をある記事を読み、ペア・グループで記事を紹介し合う。
その時①選んだ理由、②内容　③感想④相手の感想　の順で進めていく。

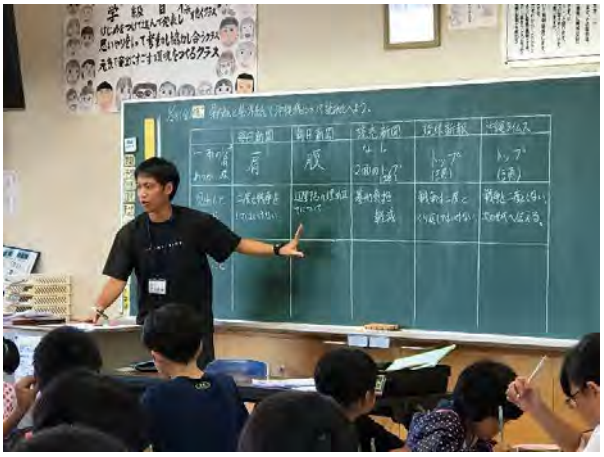
＜学習での活用＞

総合的な学習における平和教育～沖縄戦について学ぼう～

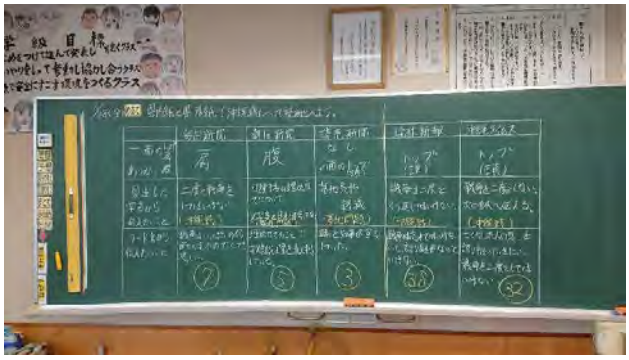
６月２４日付けの県内紙・県外紙を取り寄せ，沖縄戦の記事ついて比べ読みを行った。

新聞社別に沖縄戦の記事の数や内容を比べた。

県外紙と県内紙で沖縄戦や慰霊の日についての記事を切り抜いて、記事の数や見出しを比べる。



６月２４日の記事を県外紙と県内紙で比べ読み、記事内容の違いや扱いの違いについて考える。

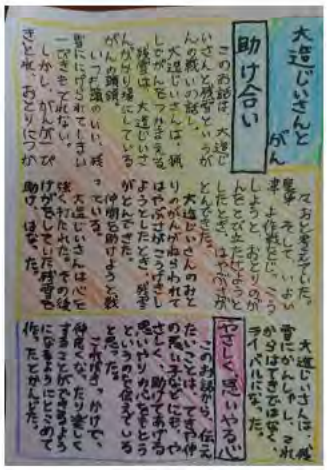


板書と切り抜いた記事をまとめた掲示物

「はがき新聞」実践

国語科　物語の紹介新聞をつくろう

授業のまとめとして、大事な場面や作者の伝えたいことなどを自分なりの言葉や絵でまとめることができた。作成時間は２時間程



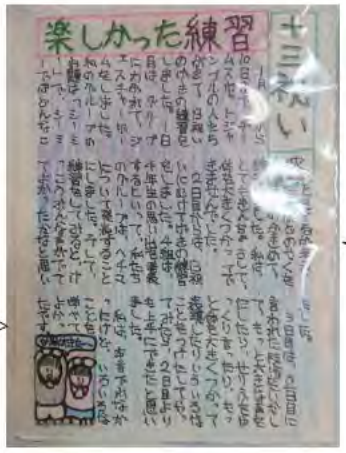
国語科の単元「大造じいさんとがん」

教　室　掲　示

特別活動

GW、宿泊学習などの感想、意見をはがき新聞にまとめ、紹介し合う実践

自分が感じたことを自由に書かせた。



回数を重ねるごとに文章をまとめる力がついてきた。

絵や見出しも好きに入れさせることで自分なりの工夫を考える児童が増えてきた。

理科　単元のまとめ

これまでに学習してきた単元のまとめとして、学んだ事を新聞にまとめて発表を行った。要点をまとめる力や文章構成力、伝える力を育むことができた。

新聞のしくみ、書き方の指導

本校 NIE アドバイザーの佐久間教諭による新聞の読み方講座を行い、新聞に親しみを持つ児童が増えた。

その他の活動例

NIE 掲示版

図書室での活用

3．実践後の成果と課題

（1）児童の変容

学校としての変容

・学校全体で取り組むことで、どの児童も新聞に関心を持つようになった。

・NIE の掲示板を見る児童が増え、新聞に関心をもつ児童が増えた。

学年での変容

・日常会話の中にニュースの話題がでるようになり、子供達に社会性が身についてきた。

・記事対して問題意識を持つようになり，多角的な視点から自分なりの答えをもつようになった。
・教科においての思考力、判断力、表現力が身についた。特に分かりやすく表現できる力が身についてきた。
・はがき新聞を作成することで、文章をまとめる力がついてきた。

（２）ＮＩＥについての児童の感想

・見出しだけで何を書いている記事なのか考えるようになった。
・スポーツしか見てなかったけど、地元の事が書かれていたりしておもしろい。
・同じ記事なのに、友達と意見が違ったりして楽しかった。
・新聞社によって伝え方や内容が違うことに驚いた。
・自分の伝えたいことを短くまとめることができるようになってきた。

（３）実践者（教師）の感想

・子ども達に社会性が身についてきた。
・学校・学年全体で行うことで、活動の雰囲気が作られ、効果がとても高かった。
・ＮＩＥ活動を通して、思考力、判断力、表現力がついてきた。
・セミナーに参加することで、学年全体に周知し、取り組むことができた。
・はがき新聞を活用することで、コンパクトに書く力が身についた。
・新聞記事について話す事で社会の出来事に関心を持つ児童が増えた。

（４）課題

・ＮＩＥ活動をさらに学校全体へ広げていく方法。また、保護者、地域への広げ方
・部数が少ないので、どのように新聞を収集していくか。
・職員の異動により、実践者が変わるので、学校内での今後の継続方法
・ＮＩＥ実践者の広げ方
・教師が負担なく継続して、学校全体として取り組める方法

日常的な新聞活用を目指して
～うるま市立川崎小学校のNIEの取り組み～

うるま市立川崎小学校
教　頭　　甲斐　崇

１　はじめに

うるま市立川崎小学校（校長 伊波みどり）は、本島中部に位置する在籍３９７名の中規模校である。２０１７年度から２年間、ＮＩＥ（Newspaper in Education）の協会指定校として認定を受けて日常的な新聞活用に取り組んできた。

２０１９年度は、沖縄県独自指定校となり、ＮＩＥタイムを中心として活動を行った。

２　ＮＩＥタイムの実施

昨年度より毎週月曜日、朝のドリルタイムの時間を「ＮＩＥタイム」と位置づけ、全学年で（１年生は２学期からの実践）新聞を使った日常活動を行っている。今年度は、週時程の変更に伴い、実施時間が短くなってしまったため、十分に時間を取ることができないクラスもあったが、昼のドリルタイムと合わせて行ってよいことも確認して継続することができた。

①　ワークシートの活用

今年度も主に、各新聞社等が提供しているワークシート（読売新聞ワークシート、よみとき新聞ワークシート）や琉球新報小中学生新聞「りゅうPON!」のレッツチャレンジ！ＮＩＥの活用を中心に各学級で実践した。あまり新聞を読んだことがない児童の新聞に対する抵抗感をできるだけ無くすこと、また新聞を活用した実践経験がない職員にもすぐに取り組みやすいという利点があるためである。

活用に当たっては、発達の段階に考慮し、すぐにワークシートを解かせるだけではなく、読み聞かせ風に教師が記事を読んで紹介したり、紙面そのものや記事にある写真を書画カメラで提示して興味関心を起こさせたり、一緒に記事を読んだりしてから問題を解かせるなど、工夫を行った。

ワークシート実施後には、教室の背面掲示板や広場の掲示板に掲示する等、実施したことが足跡として残るようにした。

②　スクラップ等

今年度は時間が十分確保できないこともあり、どうしてもワークシートが中心となった実践が多くなりがちになるという課題も出てきた。そこで、学期途中からは昼のドリルタイムも活用して続きを行うことも可能にし、実践しやすい状況を作った。

３学期には、実際の紙面を用いて、自分で新聞を開いて読んだりすることも取り入れてもらい、特定の記事を

配布しての学習や、新聞から好きな記事を選んで要約する新聞スクラップ等を行う実践も行った。

ワークシートも活用しつつ、低学年ではカタカナ探しや習った漢字を探す取り組みや、中学年では総合的な学習の時間との連動で、沖縄に関する記事を集めたり、スクラップしたりする活動、高学年では新聞スクラップをする等、発達の段階に応じてＮＩＥタイムを充実させていくことができた。

③　視写タイム

ＮＩＥタイムと関連した取組として、毎週金曜日の昼ドリルの時間を活用して、今年度は朝日小学生新聞の「天声こども語」の視写を４年生から６年生までの高学年で実施した。新聞自体は、学校予算で調達し、ワークシートは本校の伊波みどり校長が毎回自作してくださり（右図)、実現することができている。

具体的な実施方法は、あらかじめ黒板に難しい漢字を板書しておき、読み方を確認する。次に、全員でその日のワークシートに記載された「天声こども語」を読む。そして残りの時間でワークシート内に視写を行うという流れであった。限られた１０分間の昼のドリルタイム内であり、開始当初は慣れないこともあり、数行しか書き写せない子も多く見られたら、毎週繰り返すうちに、徐々に書き写す量が増え、全部書くことができる児童も多くなった。「読んで写す」という作業を通して、お手本となる文章を学び、読解力の向上にもつながった。

３　成果と課題

（１）成果

①　これまでのＮＩＥの取組の成果もあり、職員のＮＩＥへの理解が得られた。

②　昨年度から取り組んだこともあり、学校全体でのＮＩＥタイムもスムーズに実施できた

③　ワークシート等の活用から新聞に親しませることで、子どもたちにとって新聞が身近になり、興味関心の範囲が広がり、身近な事象をより知ろうとする態度が見られるようになった。

（２）課題

①　ＮＩＥタイム自体の時間が短くなったこともあり、朝だけでは十分な実践ができない学級も見られ、年度途中に改善が必要となった。

②　新聞紙面そのものの活用をさらに広げる工夫が必要だった。

（３）次年度に向けて

①　次年度もＮＩＥタイムは継続することになった。また週時程も見直し、一昨年と同じ程度の時間も確保できることになった。今後も、新聞に慣れ親しみ、日常的に新聞を読む機会を設けるようにする。

緑風学園 NIE 実践報告

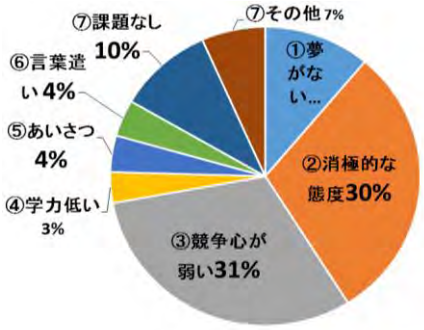
テーマ「思いや考えを伝え合う子どもの育成～ＮＩＥの日常化を通して～」

１．　はじめに

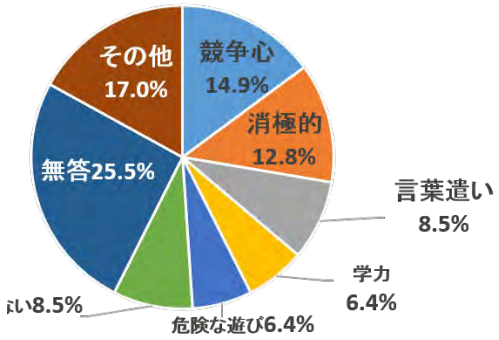
緑風学園は、H28 年度よりＮＩＥの実践指定校に認定され、１～９学年で日常的なＮＩＥの実践を進めてきた。取り組みとしては、親子でつながる新聞スクラップノート、新聞遊びや新聞読み聞かせ、伝え合う力を高めるＮＩＥフリートークなど、朝の時間や宿題を通して「思いや考えを伝え合う力」の育成を図ってきた。CS（コミュニティスクール）アンケートの結果からも「積極性に課題がある」との回答が多く、本校の児童は、積極的に思いや考えを伝え合う力に苦手意識を持っていることが分かった。また、新聞購読率も低く、普段から新聞に親しむ経験が少ないことも分かった。まず、「新聞に慣れ親しむ」ことの必要性を実感し、「ＮＩＥの日常化」をテーマに、楽しく取り組むＮＩＥがスタートした。

Ｑ地域の子どもの課題は何ですか

保護者



地域



H28 年度　ＣＳアンケート結果より

２．　ＮＩＥを通してつけたい力

児童生徒の実態から設定した育てたい３つの力

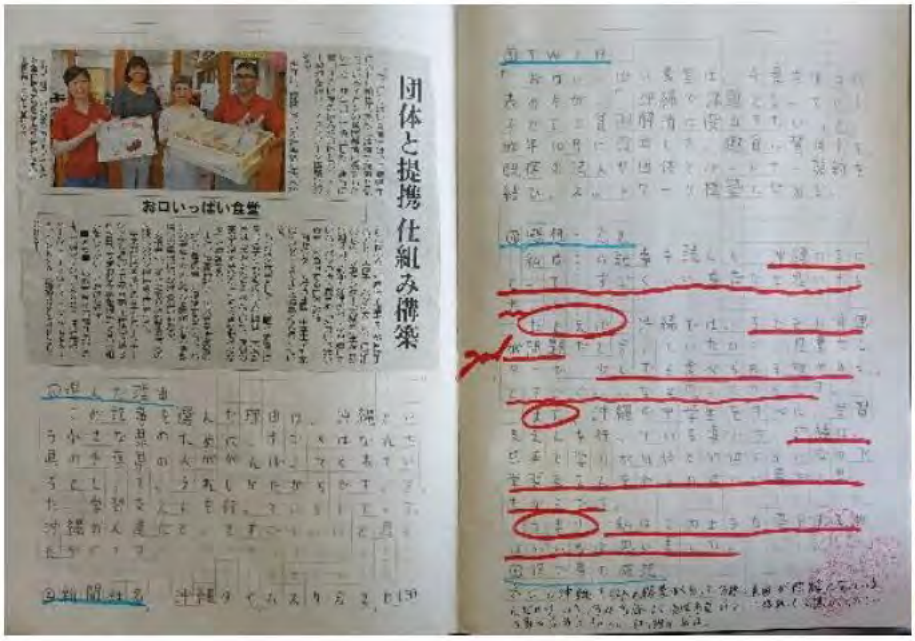
① 自分の思いや考えを伝え合う力　　（思考力・判断力・表現力）
② 自分の思いや考えを書きまとめる力　　（書く力）
③ 社会の出来事に関心を持ち、調べる力　　（つながる力）

３．　「ＮＩＥの日常化」にあたって

・保護者に NIE について知ってもらうために、4 月の授業参観日などに NIE の説明資料を配付した。
・新聞購読の年間計画を立てる際にはどの月にも新聞に触れられるようにした。また、学習や行事との関連性も意識し、重点的に多くの新聞を注文する月を設定した。
・NIE コーナーをすべてのブロック掲示板に設定し、新聞活動の足跡を見る場、親しむ場をつくった。
・ブロック掲示板に、新聞コーナーをつくり、沖縄県紙、全国紙がいつでも手に取れるようにした。
・緑風学園の NIE についてまとめ、地域や保護者に配布し、学びや成長を発信した。
・校内研修で NIE の日常化を目指し、理論・実践研修に努めた。

NIE コーナー

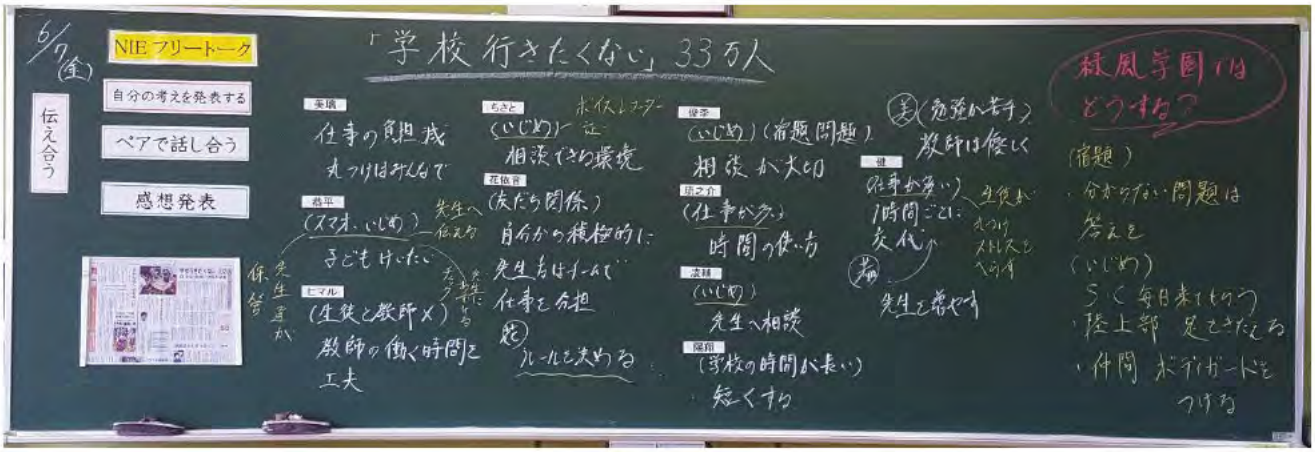
ファミリーフォーカス



ＮＩＥの日常化に関わる校内研修

NIE を取り入れた授業　音楽６年

実践の足跡　板書　NIE フリートーク



NIE の環境づくり（図書室）

NIE の作品展示

授業参観日　親子で新聞読み聞かせ

4.　「ＮＩＥの日常化」を目指す実践について

(1)主な取り組み

① NIE フリートーク　② 新聞スクラップノート　③ 新聞遊び　④ 新聞感想文
⑤ 新聞読み聞かせ　⑥ 新聞製作　等

(2) NIE の共通実践について

NIE フリートーク

時間のとり方

・3～9 年　（隔週水曜）　※1 年生は新聞遊びの中で伝え合う活動を進める。

ＮＩＥフリートークの時間

12 分

ＮＩＥフリートークでやること

児童・生徒

・自分の考えを発表する　(5 分)
・ペアで話し合う　(1 分)
・感想を交流する　(4 分)

教師

・導入での趣旨説明　(1 分)
・フリートーク後の価値付け　(1 分)

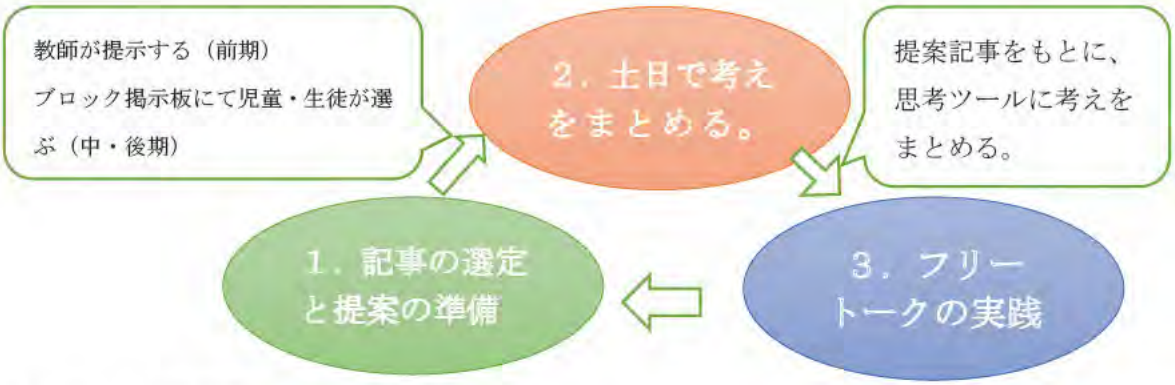
実際の流れ

・導入での趣旨説明　(1 分)
・自分の考えを発表する　(5 分)
・ペアで話し合う　(1 分)
・感想を交流する　(4 分)
・フリートーク後の価値付け　(1 分)

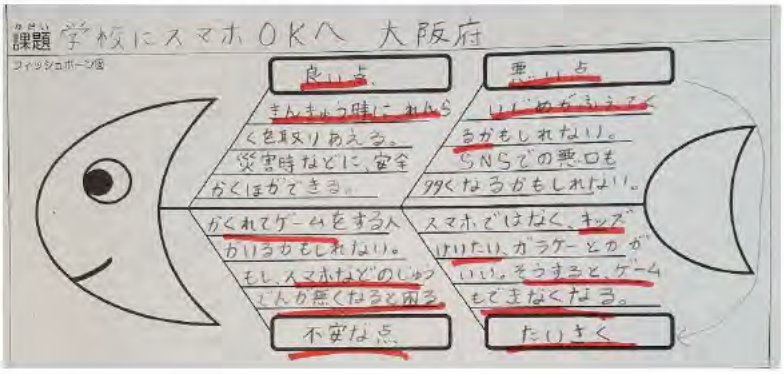
考えをまとめる

「思考ツール」を活用する。

ＮＩＥフリートークを実施するまでの流れ



思考ツールに自分の思いや考えをまとめる



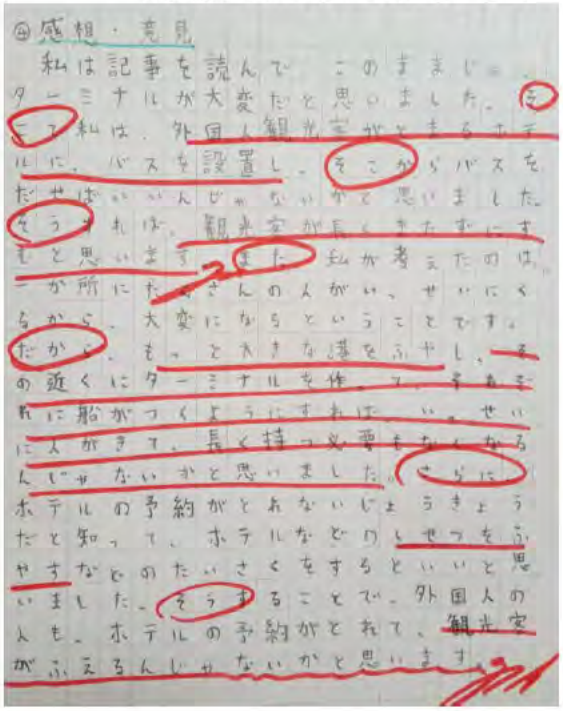
フリートークの様子

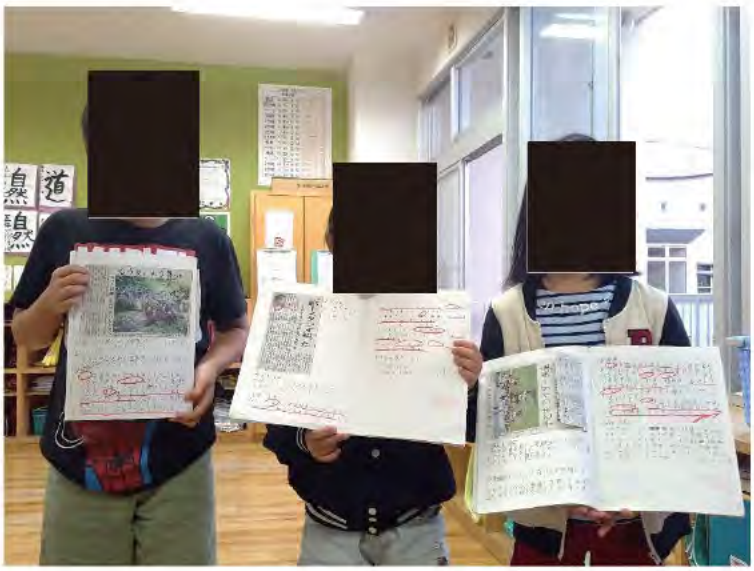
親子で取り組むスクラップノート

実践学年　3～6 年

学習内容　好きな新聞記事 OR 学級で同じ記事を選び、親子で記事に対しての感想を書く。
（週末に持ち帰り、週の始めに提出）

チェック　コメントではなく、「書く力」に関わるところに、○をつけ、アンダーラインを引く。
※接続語や心情が表れている文等に引く。





新聞遊び

実践学年　1～2 年

学習内容　新聞記事のスクラップ学習や記事の発表会、記事の読み聞かせ等

その他の日常的な取り組み

日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」
令和元年一緒に読もう新聞コンクール　奨励賞

[redacted]

新聞スクラップコンテスト

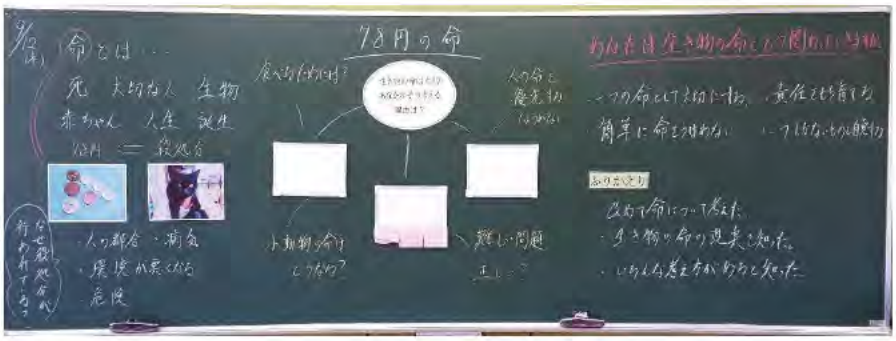
新聞投稿

[redacted]

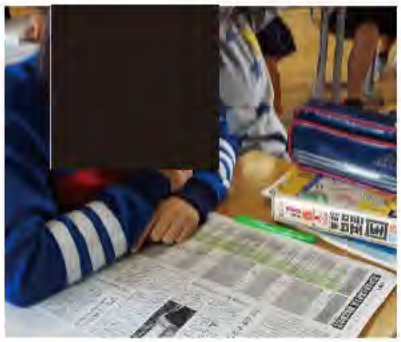
新聞製作制作学習　はがき新聞づくり

新聞を活用した授業の様子

5年道徳「78円の命～小学6年生の新聞投稿から～」

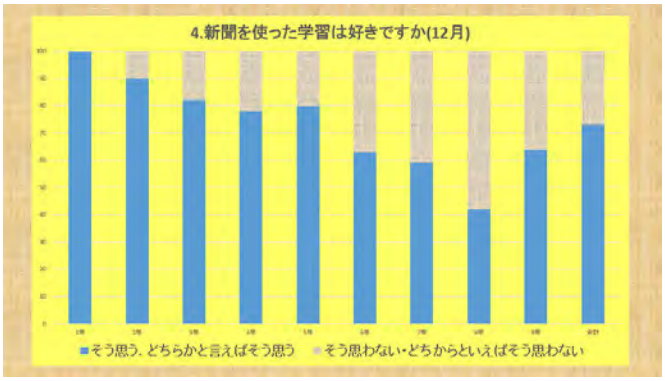


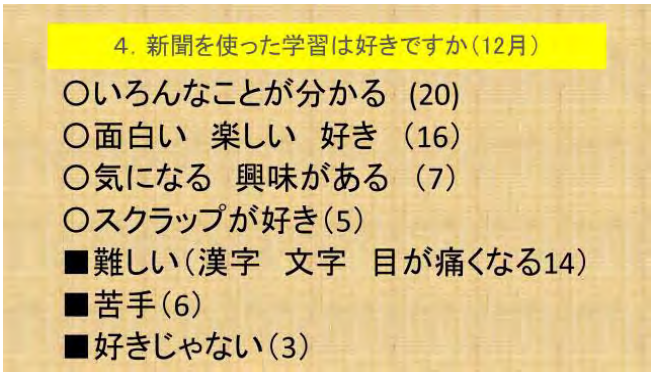
算数「割合～高校受験倍率を読み取ろう～」

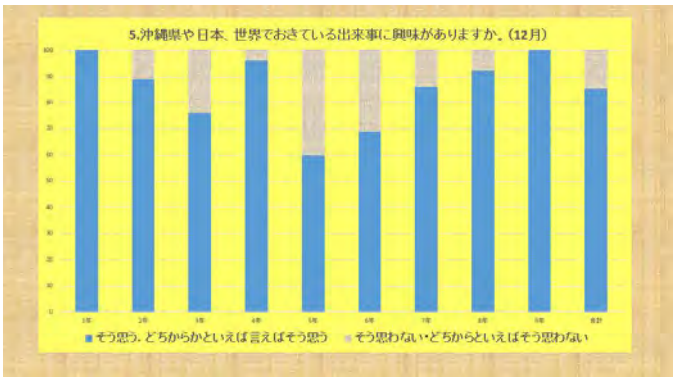


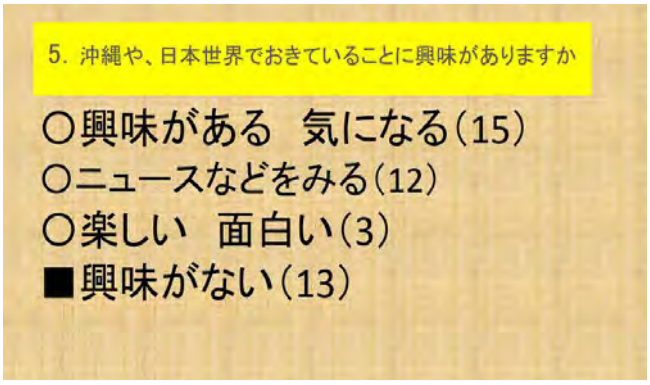
成果と課題

【成果】

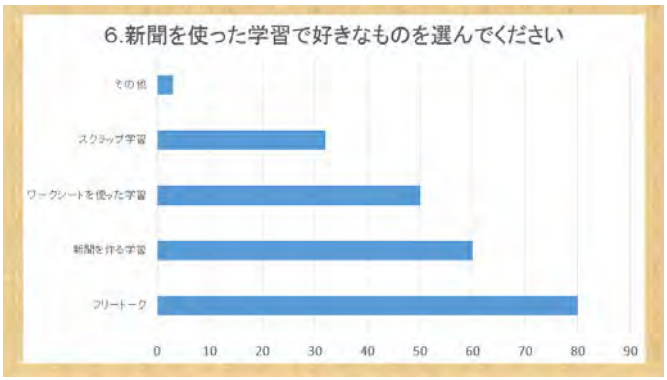


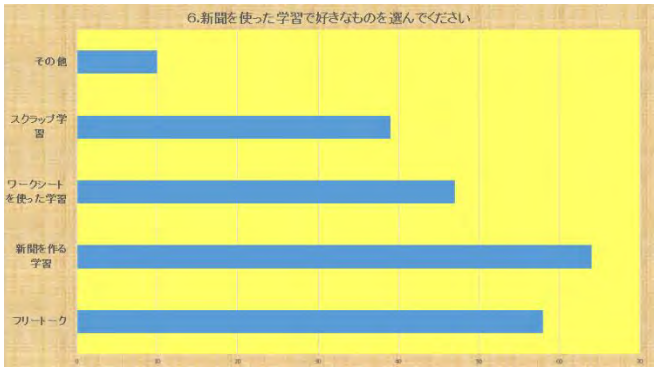






【6 月】　　【12 月】





アンケートや各調査の結果、授業、思考ツールやスクラップノート等からみえた成果

1．「伝え合う力」の向上・・【関心・意欲・態度】の面で変容がみられた。
伝え合う力がついてきた。

2．「書く力」の向上・・・・考えを広げ、深め、文章化する力がついてきた。
各調査等において「書く力」に関する問題での向上がみられた。
「新聞製作学習」が一番人気で、書く学習に意欲的に取り組んでいた。

3．「つながる力」・・・・・・学習にしっかりと向き合い、粘り強くやりとげる児童・生徒が多くなってきた。
親子と共に NIE に取り組み、主体的に社会に目をむけ、そこで得た学びを発信するようになってきた。

【課題】

・9 年間の学びをつなぐ NIE 活動の一層の充実（各学年の発達段階をとらえ、共通確認・共通実践を行う）

令和元年度　与那国小学校　NIE 実践報告書

与那国町立与那国小学校
教諭　知念　誠

1　はじめに

本校は、今年度より沖縄県 NIE 推進協議会指定実践校となり、５学年を実践学年として新聞を活用した教育実践に取り組んだ。本校にとって初めての実践指定校で試行錯誤しながらの取り組みではあったが、新聞に触れ、親しむことを重視し、国語や道徳、総合的な学習の時間、朝の会等日々の授業の中で新聞を活用するように心がけた。また、関連のコンクールに応募し意欲を高めるように努めた。

2　具体的な実践例

（1）新聞スクラップ＆１分間スピーチ

自分が興味のある記事を切り抜き、その記事に対する自分の感想や意見をまとめていった。スクラップにまとめた後は、１分間スピーチや友達同士で意見交流を行った。

【１分間スピーチ】

【友達同士での意見交流】

(2) 記事の読み比べ

同じ出来事を扱った３社の新聞記事を読み比べることで、それぞれの書き方【見出しや、リード文】の違いから書き手の意図を読み取り交流した。

【与那国５０年に１度の大雨】
沖縄タイムス・琉球新報・八重山毎日新聞の３社の記事を読み比べた。
（２０１９年５月１４日）

（3）読売新聞ワークシート通信

週末の家庭学習として読売新聞ワークシート通信を活用した。最新のニュースが多く扱われていて、児童も意欲的に取り組んだ。ワークシートの解答は、全体で意見交流を交えて行い、いろんな視点で考え深めることができた。また、英語のワークシート通信も楽しんで取り組んでいた。

気になるニュースが多く扱われて、児童も意欲的に取り組んだ。

ワークシートの英語表現を外国語活動でも使うようになってきた。

（4）学校新聞コンクールへの出品

新聞を「読む」ことから「つくる」ことへもつなげていった。離島宿泊学習のでの体験活動や学んだことを新聞にまとめて制作に取り組んだ。NIE 関連の学習から、見出しの工夫の必要性や、記事の内容のわかりやすさ、誰もが楽しんで読めることを意識させた。コンクールでは、たくさんの児童が賞を受賞することができ、意欲が高まった。

3　成果と課題

（1）成果

①日常的に新聞に触れることで、新聞を読むことに抵抗がなくなり、進んで記事を選びあらゆる視点から自分なりの考えを持てるようになった。また、友達との意見交流を通して、自分の考えを深めることができた。

②新聞を書く際には、逆三角形の構造で書いたり、レイアウトの仕方や見出しを工夫したりする等、新聞の基本的な書き方を身につけることができた。

③NIE 関連のコンクールにおいて多くの賞を受賞したことで意欲向上にも繋がった。

【沖縄タイムス主催】

・沖縄県新聞スクラップコンテスト【新聞感想文部門】★PTA 連合会長賞受賞

【琉球新報主催】

・琉球新報学校新聞コンクール　★銀賞　★銅賞受賞

・しんぶん感想文コンクール　★優秀賞　★奨励賞　★佳作賞　★学校賞受賞

・りゅう PON！題字コンテスト　★優秀賞　★特別賞受賞

（2）課題

①学校全体で新聞を身近に触れるための環境作りや新聞の確保。

②日々の授業や教材科に向けて、効果的に NIE を取り入れるための工夫。

③新聞を購読していない家庭がほとんどで、新聞に親しむ機会が少ない。

【NIE に取り組む児童の様子】

『確かな学力を身に付け、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』
～新聞を活用した授業実践を通して～

糸満市立糸満中学校
校長　與那覇正樹
教諭　新垣　孝子

１　はじめに

糸満市立糸満中学校は，本島南部に位置し，在籍数４７３名の創立７２年目を迎える歴史ある伝統校である。平成２９・３０年度は、NIE 全国実践指定校として取り組み、今年度は，新たに「持続可能な開発のための教育（ESD）」「海洋教育パイオニアスクール」の実践校を加え，沖縄県 NIE 推進協議会指定実践校として，前年度同様、各教科で NIE の手法や新聞を活用しながら授業改善を推進している。ここでは，本校の校内研究の主題である『確かな学力を身に付け、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』を目指した授業改善の中から新聞を活用した NIE の取り組み実践を紹介する。

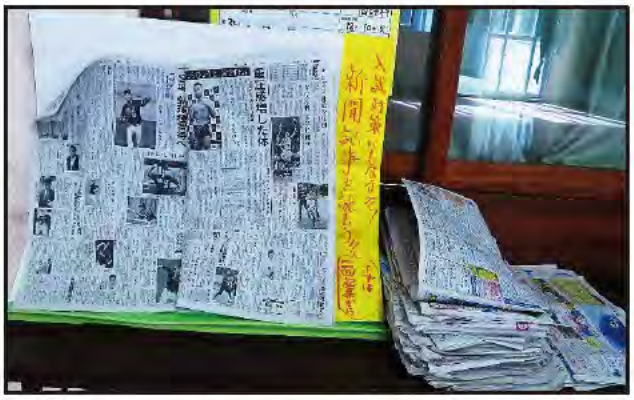
２　NIE コーナーの設置

平成２９年度より各学年のフロアーで、県内２社の新聞を閲覧できるコーナーを作り，身近に新聞を読む環境を作り活字に慣れ親しむ工夫をしている。また，今年度から特別に SDGｓに関連するコーナーも設置し，新聞で紹介される SDGｓについての記事を閲覧できるようにした。

その結果、生徒が新聞の記事の内容を理解し、話題になることが多くなった。

【NIE コーナー】

【SDGｓコーナー】



【新聞閲覧コーナー】

【新聞閲覧の様子】

３　実践の内容

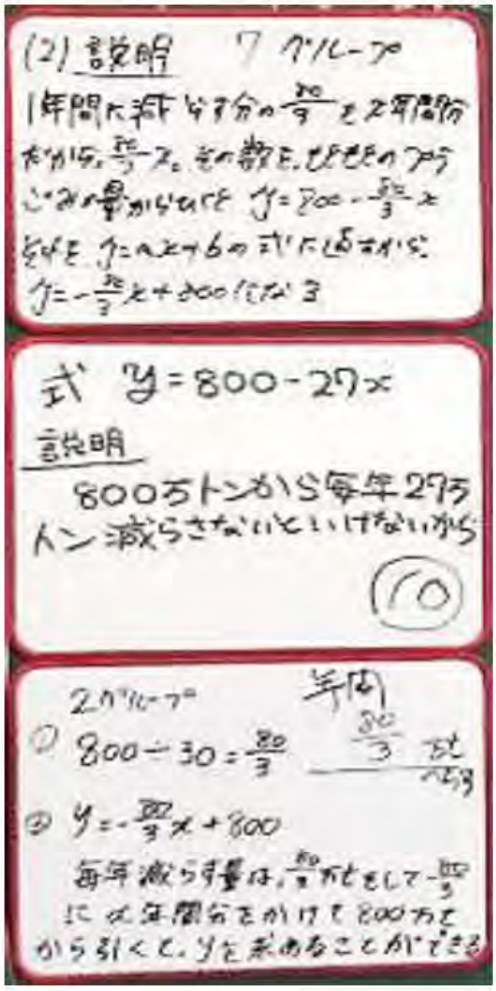
（１）新聞を活用した特設授業の実施

教科の特性に合わせて新聞の記事を活用し，授業に取り組んだ。今年度は本校の授業だけではなく，糸満中学校区の２小学校の教諭が参観する「小中連携の公開授業」を実施し、「特別な教科道徳」について新聞記事や投稿記事を活用し、教材をより生徒の身近にある内容に近づける工夫を行った。夏休みの研修において教師が今年度４月からの新聞を読み内容項目に合う記事を探し，教材として導入やまとめなどに活用した。

以下、実際に教科で取り組み実践した授業を紹介する。

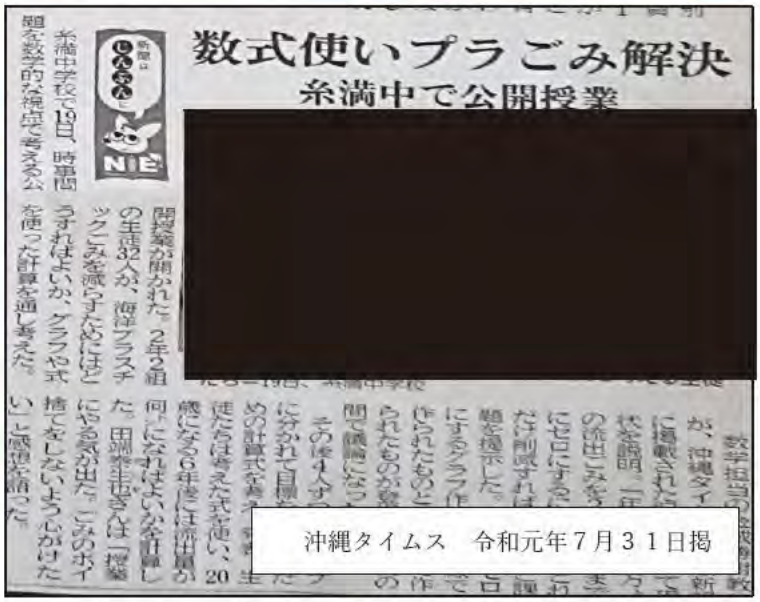
①　数学　金城勝樹　教諭　【中学２年　一次関数『海洋プラスチックゴミ　海洋環境学習』】

授業は新聞の記事から問題を提示し，生徒は既知の知識であるグラフや式・表を使い思い思いに解決方法を探していた。関連問題では，自分ごとにするために２０３０年や自分達が２０歳になるときの海洋プラゴミの内容を計算すると同時に、海の環境をどう守るべきかを考え、全国各地の取り組みについても知識を広げた。



★生徒の導き出した答えの一例★

琉球新報　令和元年８月２日掲載



沖縄タイムス　令和元年７月３１日掲

② 国語　前田佐綾香　教諭　【中学１年　故事成語　（中国の名言）】

教育

bunka@ryukyushimpo.co.jp

教育に新聞を NIE

NIE月間

授業などで新聞の活用を進める「NIE月間」の11月、県内各地の小中学校で新聞を使い、工夫を凝らした授業が実施された。糸満中学校では、はがきサイズの紙を使った「はがき新聞」を応用して故事成語を学び、名護市の緑風学園は音楽の授業に新聞記事を取り入れた。牧港小は記事を読んで意見文の書き方を学んだ。各教諭の工夫が現れるNIEの取り組みを紹介する。

授業で工夫、活用広がる

はがき新聞にまとめる

糸満中 故事成語テーマに挑戦

糸満中学校の前田佐綾香教諭は11月21日、1年4組の国語で「はがき新聞」を活用した授業を実施した。

はがきサイズの用紙を使い、記事やイラストを交えて新聞スタイルにまとめる「はがき新聞」。生徒たちはこれまでの授業で学んだ「矛盾」や「漁夫の利」などの故事成語を生かして、はがき新聞作りに挑戦した。

前田教諭は「従来は言葉の意味や短文を考えるだけだったが、はがき新聞で学びをもって定着させたい」と狙いを話す。事前に準備した見本を見せ、下書きをグループで発表して互いの良い部分を参考にするなど、主体性や対話にも工夫を重ねた。

授業を見学した家庭科の與那嶺紀子教諭は「生徒たちの雰囲気も良かった。学びを深める活用法は、家庭科でも使えそうだ」と述べた。

故事成語を交えた「はがき新聞」の作り方を説明する糸満中学校の佐綾香教諭＝11月21日、糸満市

琉球新報　令和元年 12 月 6 日掲載

はがき新聞を活用した授業を展開。故事成語に関するエピソードを使って相手にわかりやすく新聞記事を、5W1H を意識しながら書く。また，生徒ははがき新聞を作成する中で，どのような工夫をすれば、短い文章で相手に考えを伝える事が出来るのかという「伝える力」「書く力」を高める事が出来た。また，色鉛筆などで工夫を凝らし色彩豊かに仕上げていた。

授業で作成したはがき新聞作品

③特別の教科「道徳」【中学３年　「一冊のノート」家族愛　『あすを生きる』】

ねらいは，「主人公が一冊のノートに書かれた祖母の苦悩や不安、家族への思いに気づく姿を通して、家族を大切にする心情を育てる。」内容である。

間違えてもOK
高齢者生き生き

1面から続く

認知症の人働く喫茶店 県内巡回

地域で支え 認め合う社会へ

道徳の読みもの資料として使用（一部）

令和元年７月２４日沖縄タイムス

本校は、糸満中学校校区内の小学校２校と連携を通して学力向上や授業改善を推進している。今年度から教科化された「特別な教科道徳」での公開授業に新聞記事を活用した。内容項目は家族愛で、現代社会でも課題に挙げられている認知症のへ理解（写真左）、家族に対する思いなどをはぐくむ内容になっている。教師は資料の内容をより生徒に近づけようと、８月の校内研修で、４月からの新聞記事を読み、授業の狙いに沿った記事を探し、それをもとに授業作りを行った。より内容を「自分事として考えてもらう」ために公開授業の導入や教材理解のための補助資料として活用した。

小中連携公開授業を伝える記事　令和元年９月２５日沖縄タイムス

授業改善へ小中連携

糸満 小学教諭、中学道徳見学

糸満小と糸満南小の教師が19日、糸満中（與那覇正樹校長）の道徳の授業を見学した。小学校と中学校が連携し、学力向上や授業の改善につなげる取り組みの一環。

参加した小学校の教師は3～5人のグループに分かれて、全学年で同時に行われた道徳の授業を見学した。

授業では、学年ごとに違う教材を使い、読んだ感想を個人やグループで発表。教材の中で取り上げた話を理解するために、沖縄タイムス、琉球新報の両紙に掲載された記事を活用した。

・授業後は、クラスごとの分科会で設問設定や時間配分などについて意見を交わした。3年生の授業を見学した糸満南小の古屋雅代教諭は「設問を絞っていて分かりやすかった。生徒が自分ごととして考えられるようにしたい」と語った。

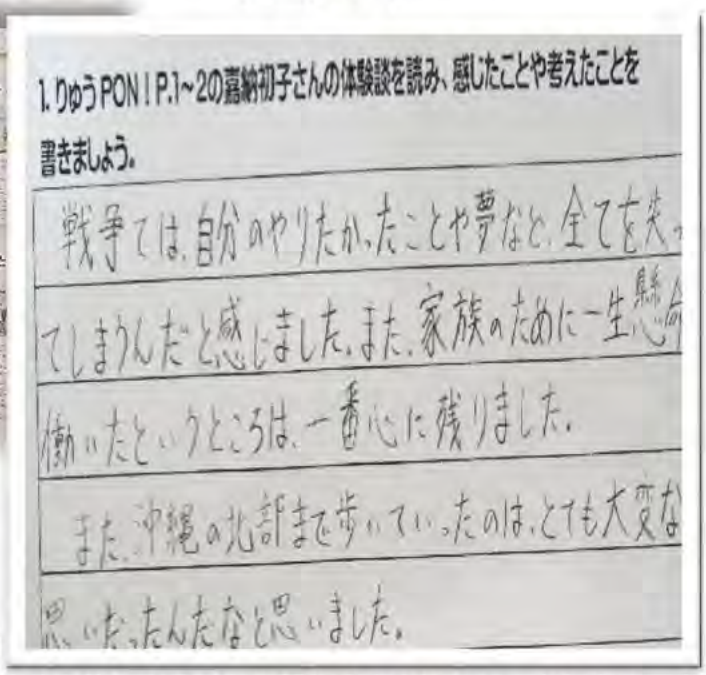
道徳の授業を見学する小学校の教師（奥）ら＝19日、糸満市・糸満中学校

（２）　平和学習で情報発信・子ども新聞（りゅうPON・ワラビー）の活用

①　６月の人権の日において，慰霊の日に向けた特集号で発刊された『りゅうPON！』を活用し集団読書を実施した。生徒は戦争体験者の話を読み戦争の悲惨さ戦後の沖縄について考える機会になった。今後の平和学習が、体験者の高齢化により、沖縄戦について「記憶や体験から聞き，学ぶ」から、沖縄戦の「記録から学び、平和を語り継ぐ」という学びになる事を強く意識していた。

【琉球新報「りゅうＰＯＮ！」慰霊の日特集号】

【生徒の感想】



1. りゅうPON！P.1~2の嘉納初子さんの体験談を読み、感じたことや考えたことを書きましょう。

戦争では、自分のやりたかったことや夢など、全てを失ってしまうんだと感じました。また、家族のために一生懸命働いたというところは、一番心に残りました。

また、沖縄の北部まで歩いていったのは、とても大変な思いをしたんだなと思いました。

②　生徒による平和学習の取り組み

糸満市は沖縄戦の激戦地として平和について学ぶ機会が多くあることから、ＳＤＧｓと関連付けた平和教育の取り組みを行った。前述①の集団読書のあと、生徒主体による平和学習集会を実施した。今年度は、生徒が講師（平和ガイド修了者）となり、校区内の戦争遺構や遺跡　慰霊の塔などについて生徒同士での学びを深めていた。「記憶や体験から学ぶ」学習から、「記録から学ぶ」学習に方向転換し、生徒自身が「平和の語り継ぎべ」となっていくことの大切さについて意識を高めました。

また、図書委員会では、地域の読み聞かせボランティアの方の協力を得て、絵本「ひめゆり」の読み聞かせを行いました。語り手だけでなく、三線演奏も生徒が担当しました

【令和元年６月２３日　沖縄タイムス（ワラビー）】

生徒が説明 学び合い　糸満中

糸満中学校で14日あった平和学習会で、470人の全校生徒と沖縄戦を語り合った。4人は3年生の[redacted]さん、2年生の[redacted]さんです。今の中高生に当たる年齢の男女が戦場に動員されて4～5割が亡くなったことなどを説明しました。

[redacted]

沖縄戦の説明をした糸満中の[redacted]さん、[redacted]さん＝14日、糸満中学校

74年前の出来事を身近に感じてもらう工夫を考えました。学校の近くにある山城という場所に、飛行機を監視する施設があり、砲弾の跡が残っていることも説明しました。

説明が終わると、10人が手を挙げて感想を発表しました。「3年生から戦場に行かされるのは危ないと思った」「死ぬのは怖いはずなのに軍国主義で判断力が低下していたのが恐ろしい」「どんどん戦争が遠くなる。次の世代につえなければいけない」活発に発言が続くことに先生たちも驚いていました。同じ中学生が説明することで、自分たちのこととして考えようという4人のメッセージが伝わったようでした。

[redacted]さんは「みんなが聞いてくれているのが分かって、やってよかったと思った」と充実した表情でした。

【琉球新報　令和元年７月１日　】

「ひめゆり」で平和学習

糸満中 生徒らが読み聞かせ

[redacted]

朝の読み聞かせを無事に終えた生徒とボランティア、教員ら＝６月20日、糸満中学校体育館

③「未来に伝える沖縄戦」～失われた青春時代～　※生徒による聞き取り

本校の１年生２名が、ひめゆり平和祈念資料館で元ひめゆり学徒隊であり、前ひめゆり平和祈念資料館館長の島袋淑子さんから聞き取りを行った。沖縄戦の経緯やひめゆり学徒隊が激戦の中をどう移動したのか、どんな惨劇があったのかを戦争の記憶や体験談を聞き、改めて平和の尊さと生徒自身が「平和の語り継ぎべ」となっていくことの大切さについて意識を高めた。

令和元年９月８日ひめゆり平和祈念館での取

未来に伝える沖縄戦　～失われた青春時代～

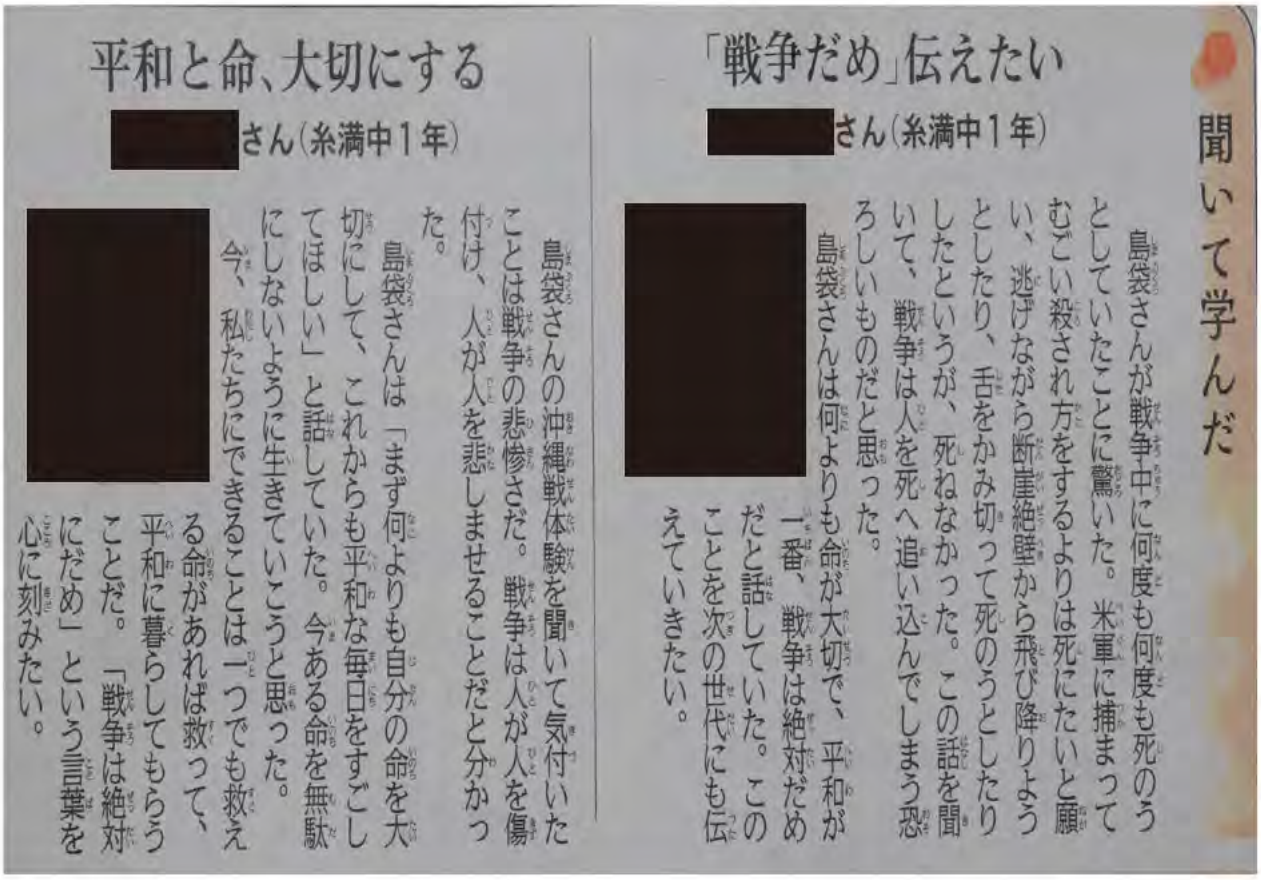
沖縄戦

島袋淑子さん(81)

ひめゆり学徒、多くの友失う

無念さ、語り継ぐのが使命

令和元年１０月９日　琉球新



聞いて学んだ

「戦争だめ」伝えたい

[redacted]さん(糸満中1年)

島袋さんが戦争中に何度も何度も死のうとしていたことに驚いた。米軍に捕まってむごい殺され方をするよりは死にたいと願い、逃げながら断崖絶壁から飛び降りようとしたり、舌をかみ切って死のうとしたりしたというが、死ねなかった。この話を聞いて、戦争は人を死へ追い込んでしまう恐ろしいものだと思った。

島袋さんは何よりも命が大切で、平和が一番、戦争は絶対だめだと話していた。このことを次の世代にも伝えていきたい。

[redacted]

平和と命、大切にする

[redacted]さん(糸満中1年)

島袋さんの沖縄戦体験を聞いて気付いたことは戦争の悲惨さだ。戦争は人が人を傷付け、人が人を悲しませることだと分かった。

島袋さんは「まず何よりも自分の命を大切にして、これからも平和な毎日をすごしてほしい」と話していた。今ある命を無駄にしないように生きていこうと思った。

今、私たちにできることは一つでも救える命があれば救って、平和に暮らしてもらうことだ。「戦争は絶対にだめ」という言葉を心に刻みたい。

[redacted]

（３）　社会科新聞作成

本校では、７月に社会科新聞に取り組んでいる。この新聞は、夏休みの課題で「中学校社会科新聞コンクール」に出展している。生徒は、新聞作成に必要な条件やみだしの決め方を学び、自分の興味関心のある内容や事象から個人で決めたテーマをもとに作品作りを行った。

その結果，金賞６１、銀賞３８、銅賞４０、という多数の生徒の受賞があった。生徒は新聞で、自分が調べたりしたことを、限られた字数の中でどう伝えるかを工夫して作成していた。

【金賞作品】

（４）まわし読み新聞への挑戦

沖縄県教育センター夏季研修でNIE研修「まわし読み新聞」を授業で実践した。海洋教育パイオニアスクールプログラムを実践していることから、海洋に関連しそうな題材を新聞から見つけ選んだ理由などを書き、他のグループから付箋にて感想をもらった。生徒は「新聞に直接関連しているように見えないが、よく考えるとすべてが、繋がっていく持続能な開発のため社会の在り方に気づいた。」などの感想を書いていた。

（５）中学生が新聞記者に挑戦

① 第２５回沖縄県中学校総合文化祭「中文連新聞速報」

授業のまわし読み新聞

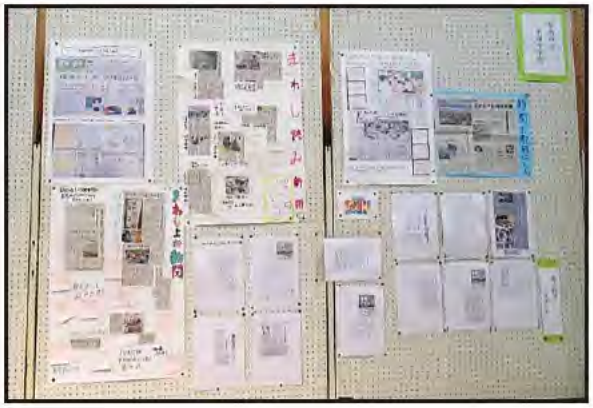
12 月 8 日（日）に浦添市てだこホールで開催された第２５回沖縄県中学校総合文化祭に NIE 速報記者として参加した。文化祭では、県内中学校及び特別支援中等部の生徒による舞台や展示の発表が行われた。本校の生徒 10 名は 2 日目の NIE 速報員として活動し、午前と午後の２回速報を出した。事前に記者から取材の仕方や撮影方法を学び、舞台部門や展示部門の取材を緊張しながら取り組んだ。舞台における合唱や舞踊などに出演している生徒の真剣な表情や展示などで活躍している生徒の姿、そして見学者に取材をして感想などを聞き文化祭の様子を伝えた。また，NIE コーナーでは今年度の取り組みの一部も紹介した。

【令和元年 12 月 13 日　琉球新報】

【中文連を取材した生徒】

【速報配布の様子】

〖本校の NIE の活動を沖縄県中学校文化祭で紹介した展示の一部〗



② 学校紹介新聞作成に挑戦

９月から本校の生徒７名が、糸満中学校の取り組みを情報発信しようと琉球新報社の協力で『糸満中学校新聞』制作に取り組んだ。生徒は、リード文や写真の選び方、記事の書き方などを学び実際に記事を書いた。自分達の取材した内容が新聞記事になったことで、取材への充実感を得たと共に限りのある紙面の中で、５W1H を利用して簡潔に伝える方法や文章のまとめ方を学ぶ機会になった。

【令和元年１２月２９日琉球新報『りゅうPON！』】

ジュニア通信員 vol.210

糸満中学校新聞

私たちが通う糸満市立糸満中学校は、今年創立72周年を迎える。我が校の「文武両道」「不撓不屈」の精神と共に、與那覇正樹校長のお話から「一緒に、糸中の黄金期をつくっていこう」という目標を持って学習や部活動に取り組んでいる。目標を実現させるため、私達は地域活動やESD（持続可能な開発のための教育）学習、海洋教育体験など、さまざまな活動を行っている。糸中の活動の一部を、皆さんに紹介する。

糸満市 糸満中学校
生徒数／473人
校長／與那覇正樹

こだわり
①人なつっこい
②伝統行事が盛んで、地域の行事に多くの生徒が参加する
③九州大会や全国大会などに出場する生徒や部活動がある

地域と協力し大綱作り

伝統行事への参加 誇りに

糸満中学校では毎年、総合学習の一環で旧暦8月15日（今年は9月13日）に糸満の白銀堂付近で行われる伝統行事「糸満大綱引」の大綱作りの手伝いをする。大綱は総重量約10㌧、全長約180㍍に上る。今年は島尻地区中学校陸上競技大会と重なったため、1、2年生が参加した。平日にもかかわらず、糸満市民の方々は大綱作りに協力的で私たちと一緒に北と南に分かれ、小綱から大綱を作っていった。

小綱から大綱にするために、綱を所々2、3人で縛っていくが、太く重い綱を束ねるのは大変で、友達や地域の方々、先生たちとも協力しながら、大綱へと形成していった。

綱引きの実行委員である上原清徳さん(65)に糸満大綱引への思いを質問したところ「綱を作ることは、幸せと健康を自分に運ぶ伝統行事だと思う。それが家族や地域、そして世界へと伝わってほしい」と、熱い思いを語ってくれた。

また、中学生が綱作りの手伝いをしていることについて「小さいころから『ちんく隊』や綱作りに関わってくれることはいいことだ」と笑顔で答えてくれた。

生徒たちからは「かゆかった」「大変だったけど参加できてよかった」などの感想があった。私たちが作った大綱は祭りで使われるのを見て、綱作りの時よりも、本番では綱が大きく見え、格好良かった。

一方、南北両陣営で重要な役割を担う「支度」と呼ばれる歴史上の人物（イチマンマギーとマカビチャーン）は、糸中の3年生から選出される。これも糸中ならではの伝統である。

大綱引き本番では、吹奏楽部が、夏休みから練習した演奏やマーチングを披露した。

午後5時から始まった大綱引で、本部の放送席から「糸中生徒が綱作りに協力した」という感謝の言葉があった。私たちは伝統ある行事に参加できることを誇りに思っている。

伝統行事「糸満大綱引」の綱作りに協力する糸満中の生徒ら＝9月13日、糸満市糸満

「ちんく隊」として糸満大綱引に参加する糸満中の生徒ら＝9月13日、糸満市

海を知り、未来に貢献

1学年は本年度、ESD教育研究指定校になったので海洋教育の一環として、糸満市の美々ビーチいとまんでビーチクリーンを行った。活動を通して糸満の海の現状を知ることができた。現状を学び「糸満ふるさと100年計画」という大きなテーマのもと、地域の方々の協力を得て、商工会や海人の資料を集めた海人工房・資料館などを訪問し講師を招いて体験学習をした。そこで学んだ知識を生かし、クラスごとにテーマを決めた。

糸満が100年後も豊かであるように、というコンセプトで、各クラステーマを持ち、CMやポスターを作成したり、海洋ごみで作品を作ったりした。

その中でも4組は「食」をテーマに、かまぼことスムージーを手作りし、スムージーは12月8日にファーマーズマーケットいとまんで実際に販売した。微力ながら、糸満の未来に貢献できたと思うと、とても誇らしい気持ちになった。

[redacted]

「美らナチュラルスムージー」を開発し、販売する糸満中の生徒ら＝8日、糸満市のファーマーズマーケットいとまん

[redacted]

糸満中の魅力 再発見

取材

新聞記事作成を通して、糸満中学校の良さの情報発信ができたと思います。他の学年の活動についても、調べることができ、来年も学校生活や学習活動で生かしていけると思いました。記事を書くのは大変だったけど文章が完成してうれしかったし、活動中は楽しかったです。

魚調理し、豊かさ実感

豊見城市の美らSUNビーチで4月にごみ拾いをした2年生は、その後、5月30日に糸満青少年の家で沖縄で取れる海産物の調理体験をした。

いずれもESD学習の一環で、海の豊かさに目を向ける機会にするためだ。魚料理体験では班に分かれ、材料からメニューを考え料理を作った。コンテスト形式で料理の見た目、味などを先生らが審査し、一番おいしい料理を作った班に賞が贈られた。

一方、7月3日に浦添市のJICA沖縄国際センターを訪ね、外国人研修生と交流を深めた。ねらいは、さまざまな文化圏に触れることだ。糸満中学校や地域の紹介を実演で行い、三線や舞踊、空手など沖縄の伝統文化を披露した。

研修員たちから質問を受け、職員や先生方の力も借りて懸命に答えた。初めは緊張していたが、海外の習慣や文化に触れ楽しい時間を過ごすことができた。

[redacted]

魚のウロコを取り、さばくところから始めた魚料理体験＝5月30日、糸満市の糸満青少年の家

救命技術など学ぶ

3年生は7月9日、身近な海に親しみを持つことを目的に美々ビーチいとまんで沖縄水産高校の先輩方とビーチのスタッフから、ロープワークと救命講座、手旗信号の三つを学んだ。生徒たちにとって初めての体験で、声を出しながらも先輩たちと楽しみながら真剣に取り組んだ。

ロープワークでは、ほどけない結び方などをゲーム感覚で楽しみ、手旗信号は1から10の数字を学んだ。救命講座でも実際に海に入り、人を運ぶにも危険と上手に助け方を思い、大変さを実感した。

最後には海に感謝の気持ちを込めてビーチクリーンを行い、袋いっぱいのごみを集めた。

[redacted]

海洋実習で救命講座を受ける生徒ら＝7月9日、糸満市の美々ビーチいとまん

（６）体験学習の投稿で情報発信

今年度、本校は「持続可能な開発のための教育（ESD)」の指定校となり、授業を通して様々な体験活動を取り組んでいる。その活動の状況や実践を、新聞を通して県内に発信した。また，１月10日の「糸満教育の日」では市内学校を代表して発表した。そのなかで「ＳＤＧｓは２０３０年にゴールを目指しているが、その時私たちは２４歳になる。それまでにゴミを減らし、糸満、世界の美しい海を守れるように、みんなでつないで持続可能な社会を達成したい」というメッセージを伝えた。

【令和元年７月19日琉球新報】

高校生による環境講話

海の環境分かりやすく

沖水生徒、糸満中で講演

【令和元年６月14日琉球新報】

海の職業と文化学ぶ

糸満中、ロープや手旗体験

【糸満】糸満市立糸満中学校の生徒149人が、海に関わる歴史や文化、職業などに触れる「海洋教育体験活動」が5月30日、糸満市の美々ビーチいとまんで開かれた。糸満帆掛サバニ振興会、沖縄県立沖縄水産高校海洋技術科3年生39人が参加し、帆掛けサバニ体験、ロープワーク、手旗信号の体験、ビーチクリーン活動を4クラスに分かれローテーションで体験した。

「海洋教育体験活動」は昨年度から行われている。伝統文化への興味関心を育て、海に関わる職業に触れ、自己の生き方や進路選択能力などの向上のほか、本年度から持続可能な開発目標（SDGs）にある豊かさを守ろう」に考える機会としてれている。

体験活動をした3人さん（3年）は「んでいるがサバニは初めて。漕ぎ方とができてよかっ想を話した。

ロープワークを原昂太さん（沖縄3年）は「教える かった。でも皆のられて教えたかい た」とうれしそう

（川寄叙

沖縄水産高校の生徒らからロープワークを学ぶ糸満中学校の生徒ら＝5月30日、糸満市の美々ビーチいとまん

高校生による海洋キャリア教育体験

沖縄からSDGs

持続可能な社会

海との共生学ぶ

糸満中、教育の日実践発表

【糸満】糸満市教育の日実践発表・講演会が10日、市農村環境改善センターで開かれた。高嶺小、高嶺中、糸満中の児童生徒たちが実践発表をした。また、文化やスポーツで活躍した児童生徒への市長賞（5人）と市教育長賞（49人、8団体）の表彰や、市人材育成事業に20万円以上を寄付した個人・企業へ感謝状が贈られた。

糸満中2年生は「海洋パイオニアプログラム『海との共生』を考える体験を通して」と題して発表した。写真。ビーチクリーンや魚料理体験を通して「国連のSDGsは2030年がゴールだが、私たちは24歳になっている。それまでにごみを減らし、糸満、世界の美しい海を守れるよう、みんなでつないで持続可能な社会を達成したい」と発表した。

「糸満教育の日」の活動報

【令和２年１月１７日琉球新報】

（７）　新聞投稿に挑戦

学習の感想や学期はじめの抱負など、新聞投稿にも挑戦している。新聞投稿では、自分の考えを持ち表現する事がねらいである。生徒は限られた文字数に自分が伝えたい内容をどのように書き、相手に伝えるかを考えながら「書く力・表現する力」を高めていた。投稿した記事の中には、地域の読者で感銘を受けた方からの激励のはがきが、学校に届くなど多くの反響があった。

【令和元年１２月２日　琉球新報】

地域との交流を通して

糸満市立糸満中3年 [redacted]

先日、私は「いといと街会議」という話し合いに参加しました。話し合いでは、私たちの糸満市の未来について、中学生から年配の方、また移住者や外国人の方まで、幅広い市民の方と意見を交わすことができました。普段は同級生と話す機会の多い私にとって、大きな刺激となりました。

「ポイ捨てが多い」という問題について話し合った際、私は音芋校で沿道を歩くことが多い中学生の視点で話をしていましたが、移住者の方の「ごみ箱が少ない」という本土と比べた時の見方で意見を聞くことができ、さまざまな角度から市の問題を見つめることで、問題解決に近づいていくことができたと思います。また、みんなで一緒に解決策を探っていくことで、新しい意見が出てきたり、その意見から違う問題へつながっていったりと、大人数で話し合うことで可能性が広がると感じました。

糸満市が今まで以上に住み良い街になるよう、地域の一員として多くの方との交流を通し、市の将来を担う一人としての意識を高めていきたいと思います。

香港民主派が圧勝
民意を尊重しないと
〝香港かぜ〟が日本でもはやる
―政治評論家
安倍首相殿
（小泉・ミーガンチョー）

【令和元年６月２０日　琉球新報】

僕の主張・私の意見

初めての魚料理体験

糸満市立糸満中2年 [redacted]

僕は、糸満青少年の家で魚料理体験をしました。各班で自分たちが調理する魚を事前に選び、魚や食材を決められた金額で考えて買い、それを班の仲間たちと協力して調理するというものでした。

僕の班は、女子が魚をさばき、男子は野菜を切り、火起こしをしました。この魚を焼く時の火加減です。薪なので弱火にする時の調整が難しく、焦がしてしまいました。

僕たちの班は、グルクンのホイル焼きとイラブチャーの味噌汁、サラダを完成させました。班のみんなで協力してつくることができて、本当に良かったです。料理コンテストでは、1位にはなれませんでしたが、班の団結やコミュニケーションもとれたし、楽しい行事になりました。

【令和元年１０月７日琉球新報】

NIE 次世代から

糸満大綱引きに参加して

糸満市立糸満中1年 [redacted]

私は、9月13日に糸満大綱引に参加しました。午前中は綱作りをして、午後は友だちと道ジュネーを見て綱引きをしました。大綱引に参加したことはあったけど、綱作りは初めてでした。最初はやり方が分からなかったので大人がやっているのをまねて、指示されたことをしました。まず、綱を道路脇に並べて次にドラム管を中心に綱をまいて最後に綱を細い綱で束ねて完成です。手や足がかゆくなったり腕が痛くなったりしたけど、楽しかったし、地域行事に貢献することができ、いい経験になりました。

糸満市の地域行事は、地域のたち、私たち中学生や小学生などの力で守られているのだと思いました。糸満市の行事を守るためにも、これから参加して地域貢献していきたいです。

４．成果・課題

【成果】

・新聞の購読コーナーを設置したことで、生徒が日常的に親しむ環境を作ることが出来た。
・教科の授業や道徳などで新聞を活用することで生徒が自分なりに内容を読み取り表現することができた。
・生徒が新聞投稿や学校新聞つくりに挑戦したことで、読み手を意識した文章を書くことが出来るようになった。

【課題】

・学校の活動にどのようにＮＩＥを効果的に活用していくのか工夫改善が必要であると感じた。
・教科等で積極的に新聞を活用する為の、教材化と教職員の研修を深めていくことが必要である。

2019年度　コザ中学校　ＮＩＥ実践報告書

沖縄市立　コザ中学校
校　長　　島村　一司
主幹教諭　松田美奈子

１．はじめに

ＮＩＥアドバイザーが本校に赴任したことに伴い、今年度から沖縄県ＮＩＥ実践指定校の指定を受け、ＮＩＥ実践校指定１年目となった。ＮＩＥを授業改善や校内研修手立てのひとつとして、相互に連動させながら各教科や領域などの教育活動に取り入れていった。１年目なので、ＮＩＥの理論と担当教科ではどのような形で実践できるかを意識しながら進めていった。

２．ＮＩＥ推進テーマ

「思考力・判断力・表現力を育むＮＩＥの実践」

～主体的に学び合い自己肯定感や自他理解を高める授業づくりを通して～

３．学力向上推進テーマ

「夢や希望の実現に向かって歩み続ける生徒の育成」

～キャリア教育の視点で取り組む学習活動を通して～

４．校内研修テーマ

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

～主体的な学びを育む授業づくりの実践を通して～

５．おもな取組

（１）新聞の設置

・ＮＩＥ用新聞は各新聞社ごとに職員室にある専用箱に入れ、１か月が過ぎたら図書館に移動し、授業や生徒の検索・閲覧ができるように仕分けした。

・本校独自で購読している県内紙（琉球新報・沖縄タイムス　@Ⅱ紙）は最初は職員室に閲覧できるようにしている。その３日後に図書館に移動させ、ＮＩＥと区別して誰でも閲覧・コピー・貸し出しができるように共通確認をこまめに行いながら、新聞が身近な存在となるよう設置場所や新聞を開きたくなるような仕組みや環境を構築してきた。

5．おもな取組

（2）学力向上推進〔おもに沖縄県立高校学力検査　時事問題・資料読み取り問題対策〕

・２０１９年に節目の年を迎える歴史上の出来事について、新聞記事を活用して授業実践を進めた。

○２０１９年：組踊上演３００年

：第一次世界大戦終結１００年

：ベルサイユ条約締結１００年

：中華人民共和国建国７０年

：ベルリンの壁崩壊３０年

：米ソ冷戦終結３０年

：子どもの権利条約採択３０年

（3）校内研修

①オリエンテーション「ＮＩＥ入門～ＮＩＥで身に着く力・教育的効果～」

（４月　講師：松田美奈子主幹教諭　ＮＩＥアドバイザー）

②ＮＩＥ研修会「ＮＩＥ講座　～新聞のしくみ・ＮＩＥ理論・ワークショップ～」

（１２月　講師：知花　亜美記者　琉球新報社ＮＩＥ推進室室長）

（4）実践教科・領域と項目

①国語：記事から和語・漢語・外来語を探そう

②社会：自由権、ゆるキャラ、地域おこし

：ワーク・ライフ・バランスと育児休暇

：株式会社のしくみ、公正取引委員会と独占禁止法

：チラシから正しい情報や誇大広告を探し、分析しよう

：食料自給率、ＩＮＦ廃棄条約失効

：特集「緒方貞子さん」（ＵＮＨＣＲ・人間の安全保障・国連のしくみ）

：社会保障と国債、消費税８％から１０％へ

：2020オリンピック・パラリンピック（1964年東海道新幹線開通と関連）

：世界の動きを読み取ろう

（新聞記事を活用→グループで時事問題を作成し、皆に質問して答えよう）

③道徳：平和のためにできること（平和宣言づくり）

：沖縄戦について考えよう（全学年・全学級）

④学活：職業しらべ（１・２年）

⑤総合的な学習の時間：高校新聞作成

（高校生の国家資格免許取得・各ｺﾝｸｰﾙ等での上位入賞記事を読み参考にした）

（４）実践教科・領域と項目

⑥「第２５回沖縄県中学校総合文化祭　ＮＩＥ部門　速報新聞係」として、３年生８名が沖縄タイムス社　安里努記者、又吉朝香記者の指導やアドバイスを受け、取材・編集・写真撮影・速報新聞配付を行った。

⑦「琉球新報子ども新聞りゅうＰＯＮ！」ジュニア通信員として３年生９名が地域生徒会・エイサー・学校紹介などの取材・校正・写真撮影を行い、「琉球新報子ども新聞りゅうＰＯＮ！ジュニア通信員欄　第１２０８号」に掲載された。

（５）その他

①「学推だより」

・職員向けに発行

・内容は、学力向上や授業改善に関する記事を掲載し、記事の要約や記事から読み取れること、記事のキーワードなどをいれ、授業づくりのヒントになるよう心がけて作成した。

・例：全国学テ分析・教育講演会・小学校道徳評価特集など

②「進路だより」

・生徒、職員向けに発行

・内容は、進路や受検、上級学校（おもに高等学校）に関する記事を掲載し、「中学校３年間を見据えたキャリア教育」を意識しながら、生徒や職員に新聞の特性を活かして最新情報を提供し、共有化を図った。

・例：Ｎ高校特集・高校生のロボット競技大会紹介「高校生　ロボ技術競う」・教育講演会「夢実現　常に準備を」・教育連載「未来へ　いっぽ　にほ」（執筆者：島村一司コザ中学校　校長）など記事の要約や記事から読み取れること、記事のキーワードなどを入れ、生徒が読みたくなるよう工夫した。

③「夢サポートだより」

・生徒、保護者向けに発行

・内容は、学力向上や進路・キャリア教育などに関する記事を掲載し、学校と家庭が連携・連動して学力向上や進路学習を進めていく目的で作成した。
家庭での親子間のコミュニケーションを深め、学校生活や家庭での生活でもも日頃から「卒業後の進路」「夢を持つこと」「具体的な目標を立てて実行・継続すること」を意識して、皆で生徒をサポートし、「自立」「自律」した生徒を育成する風土づくりと意識高揚をめざした。

6．生徒の変容・成果・課題

（1）生徒の変容①最初の頃は新聞のしくみが分からず、興味がある面（スポーツ）や写真ばかりを見る生徒が多かったが、見出しの特徴・リード文の役割など新聞の特性や特徴を教師が説明した後は、他の面をじっくりめくって読む生徒が徐々に増えた。

②今まではテレビ欄とスポーツ面だけを読んでいた男子生徒がＮＩＥを進めていくにつれて、１面から順序良く読むようになった。

③落ち着きのない生徒が少しずつ落ち着いてきて注意が減った。

④自分で考える前に友人や教師にすぐ質問し早急に答えを知りたがる生徒が、まず自分で考える、日頃の日常会話の言葉で置き換えることができるようになった。

⑤ペア学習やグループ学習を苦手にしていた生徒が小さい声ではあるがグループでの意見交換に参加することができるようになった。

⑥生徒からの質問が増え、質問内容のレベルが上がった。

（例）当初は「全部分からない」という質問から「○○は分かるけど、□□のこの部分が分からない」という具体的な質問になった。

（2）成果　①集中力・時間管理能力が格段に向上した。

②思考力・判断力・表現力が高まり、ＮＩＥを１年を通して、授業実践していた学級は、全ての社会科定期テストで学年平均点を６～１２点上回っていた。

③各コンクール・コンテストへの応募が増え、入賞者さらに上位入賞者が出て、生徒から生徒への称賛のようすが多数見られた。特に「第１０回いっしょに読もう！新聞コンクール」全国奨励賞受賞では、本人や家族・親族が大喜びし、県内新聞社から取材を受け、大きな自信につながった。また、「第９回しんぶん感想文コンクール」優秀賞・奨励賞では本人や保護者から取組応募への感謝の言葉があった。

④物静かな生徒が「第９回新聞スクラップコンテスト」ノート部門優良賞を受賞し、その後の授業では分からない所をグループのメンバーに質問したり、グループの班長を立候補し努めたりと積極的になった。

⑤新聞記事のアンダーライン（気になった箇所・印象に残った所など）の作業を継続することで、問題文をしっかり読み、問題文が求めている解答を選択したり、記述するようになり、ケアレスミスが減った。

⑥理由や根拠を書くことを苦手にしている生徒が減った。

⑦コミュニケーション力、分析力、問題発見・解決力が身についた。

７．写真資料

○１年　道徳（ＴＴ授業）

○１年　道徳（ＴＴ授業）

○１年　道徳（ＴＴ授業）

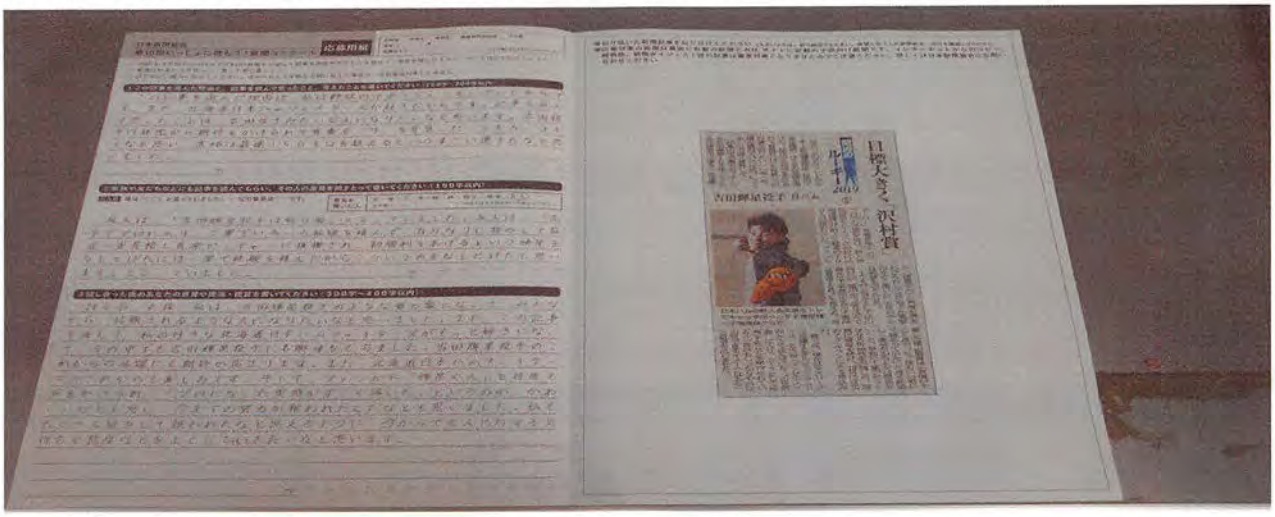
○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（自分で選んだ記事を友人に取材中）

○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（自分で選んだ記事を糊で貼り付け中）

○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（記事を選んだ理由・感想を書出し中）

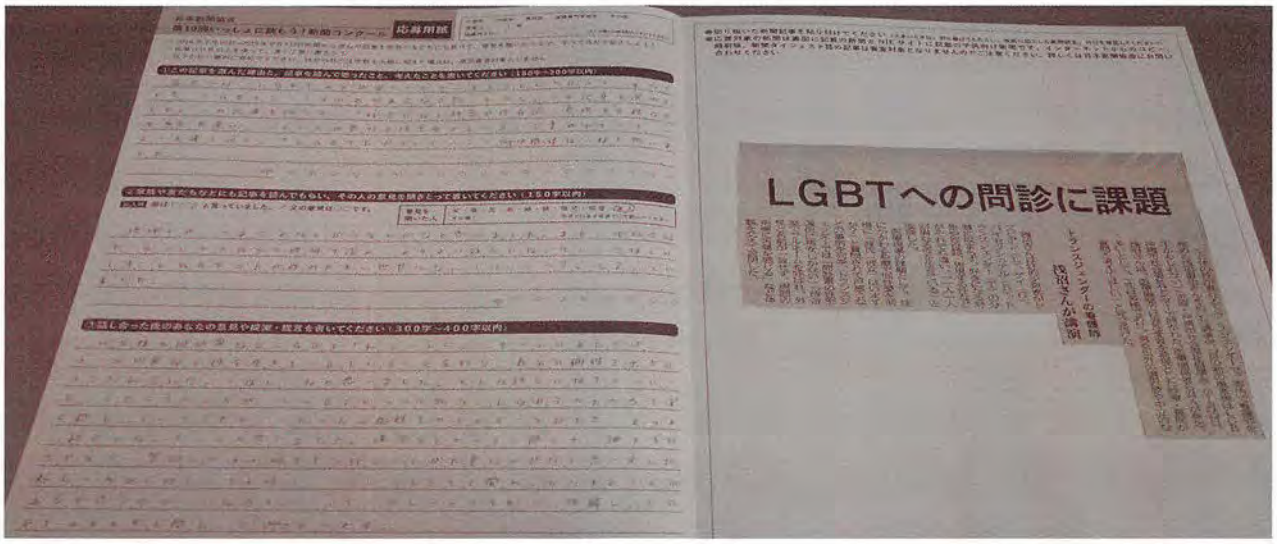
7．写真資料

○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（生徒の作品）



○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（生徒の作品）

○「第 10 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（生徒の作品）



7．写真資料

○授業：地域おこしＰＲ商品を考えよう

「ポーク卵おにぎり」進化中

専門店や高級品も

手早く提供、観光客に人気

2019年4月10日

金口木舌

○３年社会定期テスト問題用紙：毎回、県内２紙の記事写真から時事問題を出題

紙幣刷新 24年度発行

1万円札に渋沢栄一

○第 16 回おきなわの観光意見発表コンクール取組用の記事資料

入域観光999万９千人

外国客11.5％増300万

県、来年度1030万目標

世界情勢、入域数を左右

県民満足度は反比例

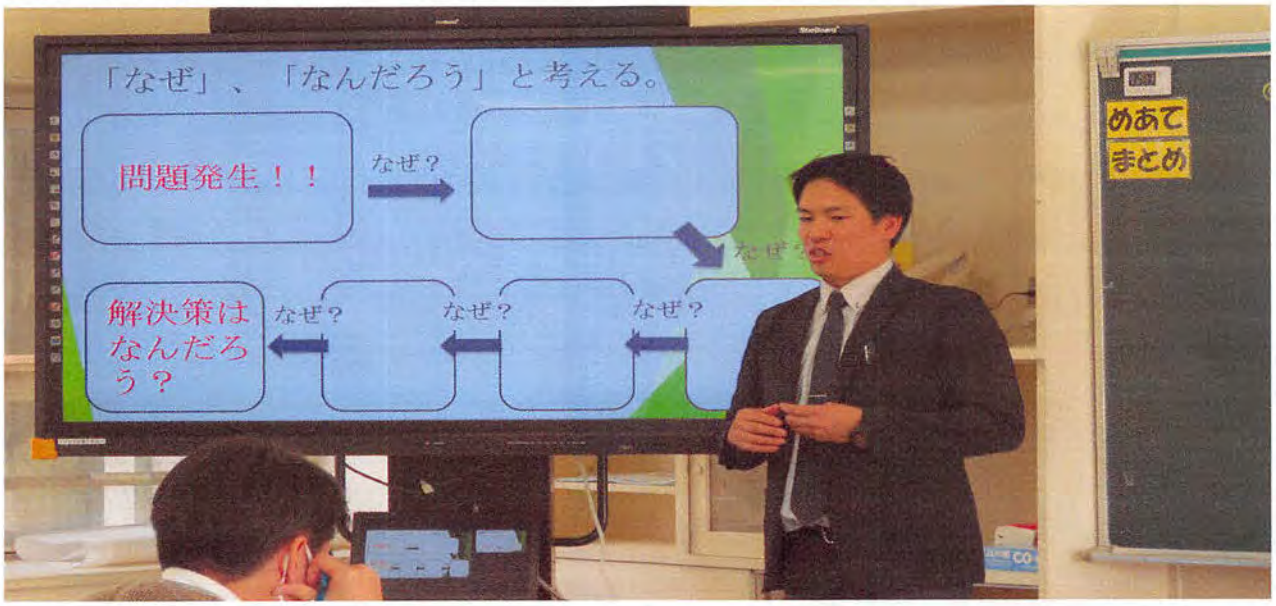
○校内研修（ＮＩＥ講座　１２月２３日）

講師：琉球新報社　知花亜美記者

○キャリア教育講演会（講師：琉球新報の取材を受け、記事写真掲載された久我秀徳先生）

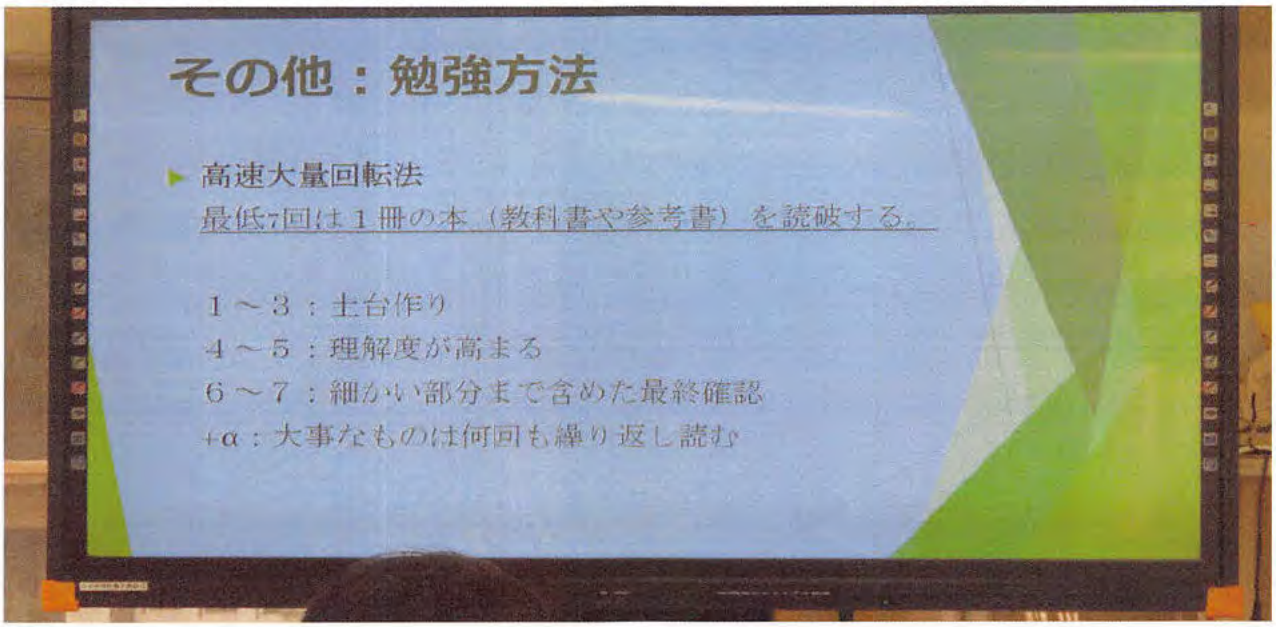
○校内研修（講師：浦添中学校教諭　久我秀徳氏　キャリア教育講演会から引続き快諾）

○校内研修（講師：浦添中学校教諭　久我秀徳氏　「教育相談の手法」）

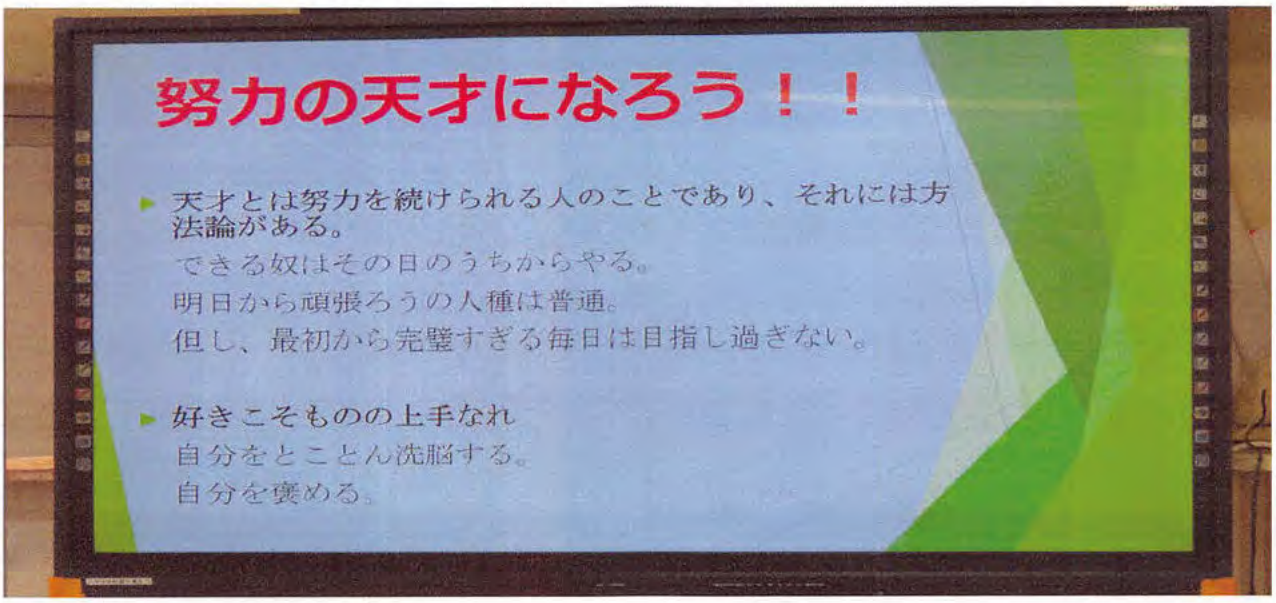


○校内研修（講師：久我秀徳先生　２月４日 15:30 ～ 16:40「ワークショップ：教育相談手法」）

○校内研修（講師：久我秀徳先生 ２月４日 15:30 ～ 16:40「久我先生が実践した勉強法」）



○校内研修（講師：久我秀徳先生 ２月４日 「夢を計画に変えることが実現への第一歩」）



平成３１年度
NIE 実践校　実践報告書

沖縄県立宜野座高等学校
公民科　教諭　比嘉　啓信
地歴科　教諭　齊藤　　憲

1　はじめに

本校は、平成２９年度から２年間、日本新聞協会より、県内の高校として初めて NIE 実践研究指定校認定を受け、試行錯誤を繰り返しながら様々な実践に取り組んできた。１年目の取り組みでは、県の推進協議会の支援・ご協力を頂きながら、生徒が県内外の新聞を閲覧する機会を得ることができると同時に、その新聞を教材化し、記事の内容を読み比べさせるなどの実践に取り組むことで、「生徒の社会問題への興味・関心」を喚起することができた。それを受け、２年目の実践では、「主体的・対話で深い学び」が NIE 教育を通して実践することがどのようにできるのかということを目標にしながら実践を進めた。主権者教育など、おおくの場面で上記の目標を意識しながら実践することで、「主体的・対話的で深い学び」の実践に対して、NIE という教育手法のもつ可能性に関して、多くの手応えを感じることができた。

そうした２年間の実践を踏まえ、今年度は、県 NIE 協会の実践指定校として、新しい NIE 教育の可能性について検討、実践を進めてきた。特に、本校が２０１８年度より２０２０年度までの３年間、指定を受ける「キャリア教育推進事業研究協力校」との絡みの中で、昨年度までの取り組みに合わせて、「生徒のキャリア発達に対して NIE 教育がいかに効果を持つか」という点に着目し実践を進めてきた。今回は、その１年間の取り組みの様子を概観してみたい。

2　本校の取り組み（主なもの）

３年生･･･①「新聞記事の読み取り～お互いの読み取り視点の交流と自己肯定感の醸成に向けて～」
②「いっしょに読もう新聞コンクール」（夏季休業中の課題として）
③「新聞感想文」（夏季休業中の課題として）

２年生･･･①「いっしょに読もう新聞コンクール」（夏季休業中の課題として）
②「新聞感想文」（夏季休業中の課題として）

１年生･･･①「SDG s の視点から沖縄の問題・課題を考えよう」
②「いっしょに読もう新聞コンクール」（夏季休業中の課題として）
③「新聞感想文」（夏季休業中の課題として）

3　成果（主なもの）

（１）いっしょに読もう新聞コンクール（主催：財団法人日本新聞協会）
①全国学校奨励賞　宜野座高等学校
②沖縄県 NIE 推進協議会長賞　　東（あずま）　幸久乃（ゆきの）（２年）
③沖縄県 NIE 推進協議会奨励賞　山内（やまうち）　玲亜（れあ）（３年）
（２）第９回　沖縄タイム社主催　沖縄県新聞スクラップコンテスト

①学校賞　宜野座高等学校

②高校新聞感想文部門

優良賞　玉那覇　聖海（２年）　優良賞　我如古　蒼夏（１年）

優良賞　根間　さくら（３年）　優良賞　比屋根　叶紗（１年）

③高校新聞感想文部門

佳作　城間　強太（３年）　佳作　與那城　壮真（３年）

佳作　勢理客　佑（３年）　佳作　比嘉　航也（３年）

佳作　佐竹　彩音（３年）　佳作　與儀　盛琉（１年）

佳作　塚原　李里香（１年）

佳作　伊波　莉羅（３年）

佳作　大城　拓麻（２年）

佳作　島袋　芽衣鈴（３年）

佳作　上地　菫加（３年）

佳作　島袋　李（３年）

（３）警察庁主催　大切な命を守る作文コンクール

沖縄県　高校生の部　最優秀賞　佐竹　彩音（３年）　佳作　比嘉　梨乃（３年）

全国　警察庁犯罪被害者支援室長賞　佐竹　彩音（３年）

（４）平成３１年度　沖縄県高校生議会

仲本　妃那　仲地　彩葉　島田　ひまり　全体代表あいさつ　仲本　妃那

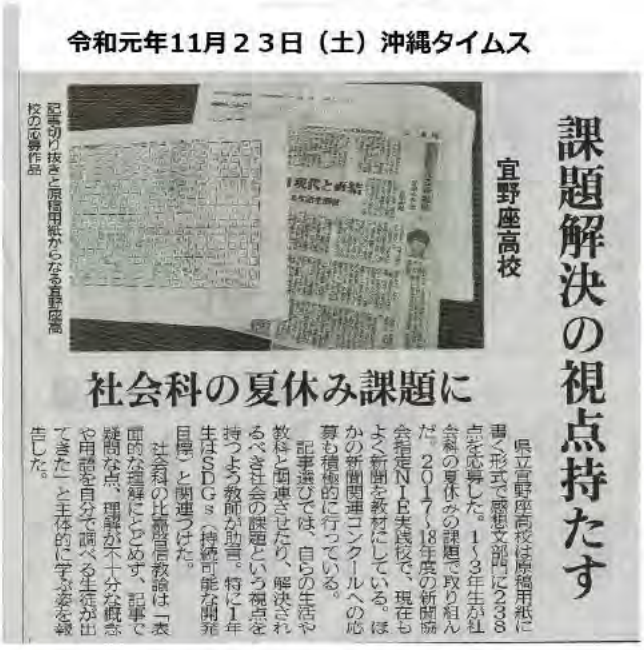
【いっしょに読もう新聞コンクール】

沖縄タイムス　2019年（令和元年）11月26日火曜日　1版　社会　30

新聞協コン 奨励賞4人

来月7日地域表彰式 県NIE推進協2賞は6人

【新聞スクラップコンテスト】



令和元年11月２３日（土）沖縄タイムス

課題解決の視点持たす

宜野座高校

社会科の夏休み課題に

記事切り抜きと原稿用紙からなる宜野座高校の応募作品

【平３１年度　沖縄県高校生議会】

2019年11月15日（金）琉球新報

子どもの貧困／交通政策／基地問題…

18校56人 県と論戦

県内の高校生が知事や県の部局長に政策を問う高校生議会が7日開催された。開催は2009年以来10年ぶり2回目。18校56人の高校生議員が子どもの貧困対策や交通政策、基地問題、環境問題など多彩な質問をぶつけ、本家の県議会さながらの論戦を展開した。

県議会本会議で開かれた高校生議会で玉城デニー知事ら県執行部に質問する生徒ら。議長役も高校生が務めた11月7日、県議会

10年ぶり高校生議会 暮らしの「なぜ」ただす

宜野座高校の生徒は高卒、大卒の無業者比率が全国で最も高くなっている現状を指摘し、無業者へのサポート体制について質問した。高教委総務工労働部長から教育庁と連携してインターンシップなどに取り組んでいるとの説明を受けたが「インターンシップは希望先に行けず、意義を見いだせなかったと話す高校生もいる。ミスマッチの改善策はどう考えているのか」と再質問で追及。平敷昭人教育長から「受け入れ先の開拓に努めたい」との答弁を引き出した。

に利用するバスの本数が少なく、ルートも学校前を通らない」と訴え、公共交通を充実させるために県が実施している交通政策を質問。宮城力企画部長は「国、市町村と連携して補助することで路線の確保に努めている」と説明した。

5　実践事例報告

（１）「１年生現代社会　SDGｓの視点から沖縄の問題・課題を考えよう」
（２）「３年生の新聞読み取りと意見交流～自己肯定感の醸成にむけて～」
（３）「１年生現代社会　労働法との関連から～ハラスメント防止に関連して～」

（１）SDGｓの視点から沖縄の問題・課題を考えよう

地歴公民科学習指導案

令和元年１０月２８日（水）～１１月１２日（火）実施
沖縄県立宜野座高校
授業者：比嘉啓信

１　**単元名**　足下から考え、地球規模の課題について考えることのできる地球市民となるために
～地域の課題を掘り起こし、その課題の解決に向け、自分なりの意見や考えを持ち、仲間と協働し解決に向かう主権者になろう～

２　**単元の目標**
（１）新聞をもとに地域（沖縄県、宜野座村等）の課題を見つけ、その課題解決に向け主体的に考えることができる。（課題発見力）
（２）自身の身近な問題意識や日々の学びと地球規模の課題との関連を考察することができる。（課題の関連性・関係性を発見する力と多角的・多元的視点で課題を把握する力～ＳＤＧｓとの関連で）

（３）課題発見、課題解決に向けた自己の見解等を効果的な言葉を用い、他者に自身の言葉で伝えることができる。（表現力、他者との関係性）

（４）他者の意見に耳を傾け、様々な課題に目を向けると同時に、多角的に問題を分析し、その解決に向けて創造的・主体的に取り組むことができる。（他者の考えから学ぶ力、多角的視点からの分析力）

（５）（１）～（４）の学習を通しての自身の変容を言語化することができる。（主体変容の理解～メタ認知）

（６）自らの地域や日々の生活・暮らしを見つめ直すと同時に、それとの関連も含めて、自らがどのような将来を選ぶのか（進路選択）、選びたいのか（進路希望）について考える力を身につけることができる。（キャリア教育との関連から）

３　SDGｓとの関連から単元を通して獲得させたいちから

（１）課題・問題発見力（自らの生活に寄り添って地域の問題・課題を発見する）

（２）批判的に考える力（自らの課題意識と他者の課題意識を踏まえ、解決案・代替案を共に摸索する）

（３）地域、世界の未来像を予測して計画を立てる力（歴史と現在を踏まえ、自己の想像力・創造力の有意味性を理解する）

（４）多面的、総合的に考える力（複眼的・多面的思考力）

（５）コミュニケーション力（「対話」を創る力～対等・平等・傾聴・尊重・肯定的で建設的意見～）

（６）他者と協力する態度（協働・共感・共鳴・共振だけではなく、違和感・反感・嫌悪感をも受容する）

（７）他者とのつながり（Knot）を尊重する態度（ノットワーキング〔Knot working〕～創造性・想像性ある人々は、即興的に関係（結び目）を作ったり、壊したり、作り直したりできる～）

（８）問題解決の場・空間・つながりに進んで参加する態度　（積極性、主体性、リスクテイカー～リスクを取りながらも問題・課題解決に向け果敢にチャレンジする意思の力）

４　単元について

（１）教材観

現在、我々をとりまく課題・問題は、以前にも増して専門的、複雑化・多様化している。あわせて、情報化、グローバル化の進展にともない、私たちを取り巻く様々な課題・問題の解決にあたっては、国境を越えての協力・協調が不可欠となっている。（ボーダレス社会、地球市民）さらに、地球規模で起きている環境問題の中には、今ここに生きる我々の生命はもちろんのこと、地球環境または地球の自然環境の存続自体を脅かし、未来を生きる私たちの子孫の生命をも脅かしているとも言われる。

新学習指導要領においても指摘されているように、このような地球規模の課題・問題が年々深刻化していく厳しい世界に生きている子供たちに対し、従来の知識・理解を中心とした教え込みの教育をそのまま続けていても課題解決に対応するちからは育成できない。「持続可能な社会の担い手」と子ども達がなるためには、どのような資質・能力が求められているのか、その育成に、どのような教育の在り方が必要なのかを共に考え、実践を通して共有していく教育改革、授業改革がいま求められている。

【新学習指導要領　前文】高等学校学習指導要領（平成30年告示）p17 より
…これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。…
…教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してより良い社会を創るという理念を学校と社会が共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

さて、こうした観点から地球規模の課題・問題を解決するとともに、「持続可能な社会」を構築する重要性をどのように子供たちが学ぶか、その際に必要な教師の指導・支援はどうあるべきかという点については、国や地域の状況、子ども達の発達段階によっても異なるため、その目的・方法等に関し工夫が必要となる。この点に関して、「我が国における『国連持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画」（平成 18 年３月 30 日決定、平成 23 年６月３日改訂「国連持続可能な開発のための 10 年」関係省庁連絡会議）では、「現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動」の重要性が指摘されている。つまり、地球規模の持続可能性に関わる問題は地域社会の問題にもつながっていることを、いかに子ども達が意識化し、その解決に向けて行動・実践へとつなげていくことが大切であることが改めて指摘されている。

だからこそ、今回の単元においては、ことさら、新聞記事をもとに、個々の生徒自身が自分たちの日常に切り込みながら、課題・問題を発見し、その解決に向け、身近なところから行動を開始し、最終的に自分たちの学びの世界・成果を実生活や社会の変容へとつなげること～つなげていく意思・行動力を持つこと～を重要と考える。併せて、これらの課題・問題の解決に対しては、個別的な取り組みのみでは解決が不可能であり、協働的な関係・つながり合いを構築する力、つねにネットワークを張り巡らし、時には効果的に関係を取り結ぶなど、関係を変化させていく力が必要となるということを子ども達に掴ませたい。さらには、この視点をもとに、従来の一斉授業ではなく、授業の中でグループ活動などの協働的な活動や体験的な活動の場面を意識的に用意し、体験させ、その効用を実感させ、掴み取らせることを意識していきたいと思う。

（２）生徒観

本校では、一昨年度から２年間、日本新聞協会指定の NIE 実践指定校として、いくつかの実践を積み重ねてきた。例えば、日常的に地歴公民科では、どの教科においても、NIE 教育の推進と関わって、新聞を活用し社会的問題やニュースに関心を持たせようと時事ネタを授業の導入での活用、新聞の見出し入れクイズや読み取り問題、新聞の読み比べなどを通したメディアリテラシー教育を行ってきた。しかしながら、その過程から見えるのは、日頃から新聞やその他のマスメディアへ意欲的・主体的にアプローチし、そこから得た情報を取捨選択し、分析し判断するのではなく、一面的な情報や過度に偏った情報に安易に流される生徒たちが少なくないという事実である。あわせて、その活動が教師か

ら提起された課題に対して受動的に反応するという域を出るものではなく、自らを取り巻く社会的課題・問題へ主体的・意欲的に目を向け、反応し、主権者として、市民（シティズン）としてその解決に向け意欲的に想像・創造的に行動する意欲・意思を育成するという観点から見るとかなり弱さを持っていると言える。

今回、実践を行う１年１組は、比較的学習に対する意欲は高く、教科書レベルでの基礎的基本的事項の習得という観点からは能力の高い生徒が多い。反面、上記の受動性という観点から見ると、その域を脱していない。併せて、一斉授業に対しては比較的良好に対応する力は持っているが、グループワークや確定した解答のない課題へのアプローチに対しては困惑し、活動が消極的になる生徒も少なくない。

(3) 指導観

本単元は、１学年の現代社会の分野で実施していく。上記のような教材観、生徒観を踏まえ、まず、問題・課題の選択を生徒に任せ、それぞれが主体的に課題・問題解決に向けアプローチさせていきたい。その上で、これまでのNIE実践で培ってきた力を基礎として、新聞記事から課題・問題の柱を掴ませると同時に、その課題・問題の根幹の部分に関して、自ら情報にアクセスすると同時に、そこで得た情報を取捨選択しながら、解決方法を模索するよう指導・支援していきたい。さらにはその過程と結果をグループワークで共有することによって、情報発信力、コミュニケーション力、表現力、分析力、自己の考え・見方を相対化する力、協働する力などへと結びつけていきたい。そして、これらの活動の結果として、生徒自身が主権者として、地域の一員として、地球市民としての自覚を持ち、社会参加を意識する主体へとなるようにするために指導・支援していきたい。

5　評価規準

（ア） 関心・意欲・態度	（イ） 思考・判断・表現	（ウ） 資料活用の技能	（エ） 知識・理解
①新聞を中心とした情報収集を通して、自己の周辺にある社会的課題・問題に関する関心が高まっている。 ②主権者として、社会的課題・問題の解決に対してどう取り組むべきか、主体的・意欲的に追求している。 ③地球市民としての意識を持ち、地域的課題が地球的課題へと結び	①新聞を中心とした情報やその他のマスメディアなどを通した情報収集から、何が社会的課題・問題となっているかを掴み取ろうとしている。 ②収集したあらゆる情報を多面的・多角的に考察し、様々な立場や考え方、価値観などを踏まえながら、公正に判断し適切に表現している。 ③他者の考え、意見、見	①現在、自らの周りにある社会的課題・問題に関して、その解決に向け焦点化して、新聞を中心としたメディアを通して情報を収集している。 ②収集した資料の中から社会に生きる主権者、地球市民として、どう考え、分析し、判断し行動するべきかに関して必要な情報を適切に選択して、	①民主主義の根幹である国民主権を実現していくために、主権者としての具体的な社会参加を構想し、その実現にどのように取り組んでいけば良いのかということを分析し、理解している。 ②民主主義社会に生きる主権者として、沖縄や地域の課題・問題の解決に向か

ついていることを意識し、その解決に向け、どのような協働の世界を築けば良いかについて模索し考えている。	解をもとに、自己の考えや見解を相対化すると同時に分析し直し、新たな視点や考え方を導き出そうとしている。	効果的に活用している。 ③他者と協働的な活動を作り出していくために、自己の考え・意見・視点を他者にわかりやすく伝えようと意識し努力している。	い実践的に考えている。

6　指導と評価の計画（５時間）

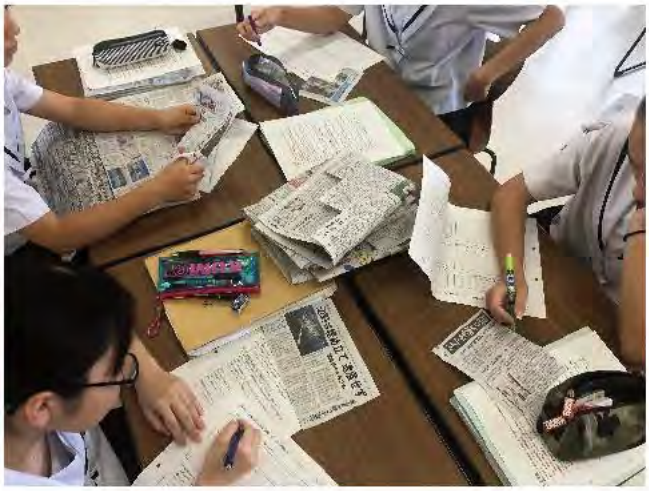
時間	学　習　活　動	単元の評価規準	評価方法
1	・新聞記事選びと記事の内容まとめ 新聞記事の中から、地域や沖縄県が抱える課題・問題に関する記事を選ぶ。 ・記事の分析とまとめ 選んだ新聞記事の内容を自己の関心、視点、考えを明確にしながらまとめる。 ・問題意識・分析視点の明確化 まとめの作業の中で、分からないこと、深く掘り下げて追求したいことを明確にし、その解決に向けて自己探求する。	・新聞を中心とした情報収集を通して、自己の周辺にある社会的課題・問題に関する関心が高まっている。 【関心・意欲・態度】 ・新聞を中心とした情報やその他のマスメディアなどを通した情報収集から、何が社会的課題・問題となっているかを掴み取ろうとしている。 【思考・判断・表現】 ・現在、自らの周りにある社会的課題・問題に関して、その解決に向け焦点化して、新聞を中心としたメディアを通して情報を収集している。 【資料活用の技能】	・行動観察 ・ワークシート
2	・記事の分析のまとめ発表と交流 前時までにまとめた資料をもとにグループで発表する。 ・さらなる課題へのアプローチ 発表と交流の中から新たな視点をもとに、さらに掘り下げて分析を進める。	・主権者として、社会的課題・問題の解決に対してどう取り組むべきか、主体的・意欲的に追求している。 【関心・意欲・態度】 ・現在、自らの周りにある社会的課題・問題に関して、その解決に向け焦点化して、新聞を中心としたメディアを通して情報を収集し	・行動観察 ・ワークシート

		ている。 【資料活用の技能】 ・他者の考え、意見、見解をもとに、自己の考えや見解を相対化すると同時に分析し直し、新たな視点や考え方を導き出そうとしている。 【思考・判断・表現】	
3	・SDGｓとの関連から考える① SDGｓと自己の問題意識・課題意識の共通点に関して分析する。 ・グループでの活動結果の共有 個人の活動の結果とグループメンバーの活動の結果を交流する中で、共通点、相違点などを明確する。 ・新たな視点・観点の発見 交流と分析の中で、新たな視点・観点の発見や自己の視点・観点・見解の変化などに関してまとめる	・地球市民としての意識を持ち、地域的課題が地球的課題へと結びついていることを意識し、その解決に向け、どのような協働の世界を築けば良いかについて模索し考えている。 【関心・意欲・態度】 ・収集した資料の中から社会に生きる主権者、地球市民として、どう考え、分析し、判断し行動するべきかに関して必要な情報を適切に選択して、効果的に活用している。 【資料活用の技能】	・行動観察 ・ワークシート
4	・SDGｓとの関連から考える② ・それぞれの視点・観点のつながり 交流した視点・観点をもとに、新聞記事と課題点・問題点として設定した視点を模造紙の上に、それぞれの関連性を踏まえながら位置づけ、関連性や疑問点、さらに探究が必要な点などを記入し、相関図を作成する。 ・さらなる探究活動 相関図作成や交流と分析の中から出てきた新たな疑問点・課題点などに関して各自もしくはグループで探究を進める。	・他者の考え、意見、見解をもとに、自己の考えや見解を相対化すると同時に分析し直し、新たな視点や考え方を導き出そうとしている。 【思考・判断・表現】 ・収集したあらゆる情報を多面的・多角的に考察し、様々な立場や考え方、価値観などを踏まえながら、公正に判断し適切に表現している。 【思考・判断・表現】 ・収集した資料の中から民主的社会に生きる主権者として分析し、判断し、行動する際に必要な情報を適切に選択して、効果的に活用	・行動観察 ・ワークシート ・作成された資料

		している。 【資料活用の技能】 ・民主主義社会に生きる主権者として、沖縄や地域の課題・問題の解決に向かい実践的に考えている。 【知識・理解】 ・他者と協働的な活動を作り出していくために、自己の考え・意見・視点を他者にわかりやすく伝えようと意識し努力している。 【資料活用の技能】	
5	・沖縄２１世紀ビジョンとの関連から 取り上げた課題・問題点と沖縄県民が望む将来の姿の共通点、相違点を探す。 ・課題解決に向けた戦略とビジョン 班員との交流、分析で得た情報、考え方、沖縄２１世紀ビジョンで提起された情報をもとに課題解決に向けや戦略とビジョンを構想する。 戦略とビジョンを①自分自身がすぐに取り組めること、②周りの人と協力しながら取り組めること、③将来、学習を積んで、技術を高めてとりくめると考えることに分類していく。	・民主主義の根幹である国民主権を実現していくために、主権者としての具体的な社会参加を構想し、その実現にどのように取り組んでいけば良いのかということを分析し、理解している。 【知識・理解】 ・他者の考え、意見、見解をもとに、自己の考えや見解を相対化すると同時に分析し直し、新たな視点や考え方を導き出そうとしている。 【思考・判断・表現】 ・民主主義社会に生きる主権者として、沖縄や地域の課題・問題の解決に向かい実践的に考えている。 【知識・理解】 ・他者と協働的な活動を作り出していくために、自己の考え・意見・視点を他者にわかりやすく伝えようと意識し努力している。 【資料活用の技能】	・行動観察 ・ワークシート

【それぞれの視点で新聞記事を読みながら、沖縄の課題に関して探る生徒たちの様子】

【選んだ記事をもとに、内容をワークシートにまとめていく作業をする生徒の様子】

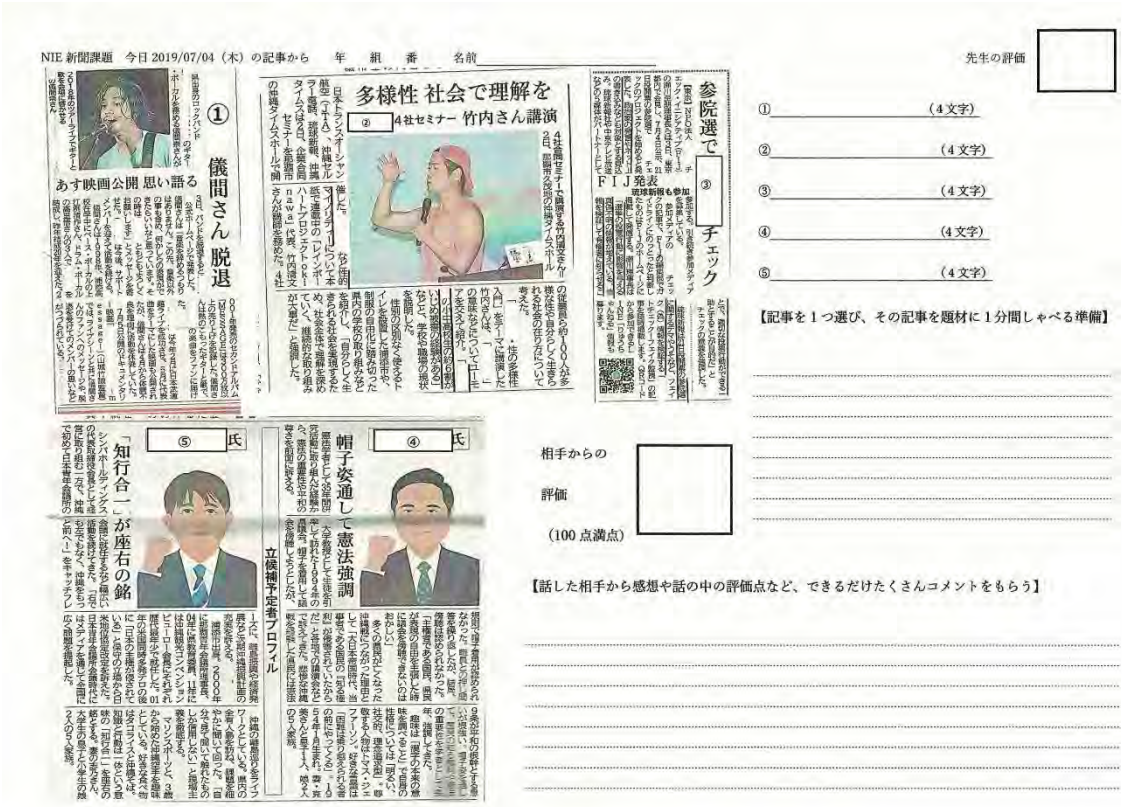


【新聞記事とまとめたワークシートをもとに、お互いに意見交換する生徒の様子】

【SDGｓとの関連から自分の選んだ課題を掘り下げていく生徒の様子】

②「３年生の新聞読み取り、意見交流～自己肯定感の醸成に向けて～」

□週の初めの授業で活用するNIEワークシートの例



NIE新聞課題　今日 2019/07/04（木）の記事から　年　組　番　名前

先生の評価

① 儀間さん 脱退

あす映画公開 思い語る

多様性 社会で理解を

② 4社セミナー 竹内さん講演

参院選で ③ チェック

① （4文字）

② （4文字）

③ （4文字）

④ （4文字）

⑤ （4文字）

【記事を１つ選び、その記事を題材に１分間しゃべる準備】

帽子姿通して憲法強調

④ 氏

「知行合一」が座右の銘

⑤ 氏

立候補予定者プロフィル

相手からの評価

（100点満点）

【話した相手から感想や話の中の評価点など、できるだけたくさんコメントをもらう】

【生徒の１分間スピーチの準備の例①】

私が選んだ記事は，参院選でのファクトチェックについての記事です。選んだ理由は，私達の生活の中でよく利用しているインターネットに関するものだからです。インターネットは，普段，私達にとって欠かせないものだと思います。調べたいものをけん索すると，すぐにその内容のものが出てきたり，テレビやしんぶんを読まなくてもいいこと。でも，その分デメリットもあることを考える必要がある。

【１分間スピーチに対する他者評価の例①】

視点を変えながらの説明は良かったと思う。普段利用する側である自分達の視点での正しい情報を選ぶ事や，発信する側の視点である，正しい情報を発信する必要があるということなど，複数の視点に立てみての意見を話すことで内容に厚みが出ていたと思う。

あとは，ここが重要だと思う部分を強調したら，もっと良くなると思った。

【生徒の１分間スピーチの準備の例②】

ネットの書き込みなどで，政治の動きが変わるのはよくないと思うのでファクトチェックはとても大事。

チェックするのはいい考えだけど，もしこの制度を利用した情報操作があると危険だなと思う。

厳しくなってしまうと，発言や考える自由をうばわれる可能性もある。

【１分間スピーチに対する他者評価の例②】

・自分もSNSとかつかうし，ラインニュースとか見るから，このきじや，他人の１けんを聞けたから，自分もファクトチェックをしてみようかなと思ったし，SNSのニュースをすぐ信じるんじゃなくて，うたがうことも大切だなって気づかされました。

・自分の書き込みで，日本がうごくって考えたら，怖くて石ばっかりはできないなって思ったから，級友の１けんをきくことができてよかったです。

③１年生　現代社会における単元との関わりから提示したNIE資料

□労働法との関連から～ハラスメント防止に関連して～

２０１９年　新聞課題【ハラスメント防止に関して（琉球新報　2019/05/30（木））】

得点

１年　組　番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

琉球新報　令和元年５月３０日（木）

罰則見送り、企業に配慮

表層深層

①　防止初の義務化

規制法成立、②なし

一歩前進も効果に懸念

問１　大見出しの空欄①に入る言葉４文字を記事の中から抜き出しなさい。（５点）

＿＿＿＿＿＿

問２　文中の「マタニティハラスメント」とは、「具体的に」どのようなハラスメント（いやがらせ）ですか？調べて例を２つ示しなさい。（１０点）

①＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問３　袖見出し中の②に入る漢字４文字を文中から探して書きなさい。（５点）

＿＿＿＿＿＿

問４　法律が制定されても、どのような言葉や行為がパワハラに当たるのかを知らなければ意味がない。文中にあるパワハラの要件となる「①優越的な関係」、「②業務上必要かつ相当な範囲を超えた言動」、「③就業環境を害する」という、それぞれの状況を左側の記事を参考にイメージしてみよう。①～③までのそれぞれの内容を「具体的に例を示して」書いて下さい。（各５点：１５点）

①＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

③＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問５　この課題をまとめる中で、考えたことや感想などをできるだけたくさん書いてください。（１５点）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【生徒のワークシートより】

問４　法律が制定されても、どのような言葉や行為がパワハラに当たるのかを知らなければ意味がない。文中にあるパワハラの要件となる「①優越的な関係」、「②業務上必要かつ相当な範囲を超えた言動」、「③就業環境を害する」という、それぞれの状況を左側の記事を参考にイメージしてみよう。①～③までのそれぞれの内容を「具体的に例を示して」書いて下さい。（各５点：１５点）

① 職務力の地位が上位の者による、罵倒雑言や身体的な攻撃に対して抵抗又は拒絶することができない関係。

② 明らかに業務上の必要性がない、又はその態様が相当でないもの。

③ パワハラを受けた者が身体的もしくは精神的に圧力を加えられ負担と感じたり、職場環境が不快なものとなり就業する上で看過できない程度の支障が生じること。

問５　この課題をまとめる中で、考えたことや感想などをできるだけたくさん書いてください。（１５点）

パワーハラスメントやセクハラは知っていたけど、「マタニティハラスメント」とはどういうハラスメントなのかということが分かりました。最近では身体的な攻撃ではなく、精神的な攻撃の方が多いのかなと記事を読んで思いました。パワハラは、知らない内に相手がパワハラだと思うこともあるそうなので、言動にはより気をつけないといけないと思います。

７　課題と展望

○今年度は、昨年度からの継続で、できるだけ週の初めの授業でNIEワークシートを利用し、新聞記事の内容読み取りと意見交流の機会を増やすことを意識して実践を行った。学力的な部分も大きく影響している部分もあるが、日常的に自分の考えや意見をまとめて話すことの経験に乏しい生徒達にとって、最初のうち、新聞記事の内容まとめを通して考えたことを思ったことを他者にわかりやすく要領よく話す１分間は、かなり長い時間に感じたはずである。あわせて、家庭で新聞を購読していない生徒の場合には、SNS以外に時事的事象にアプローチする経験はほとんどない。そのような中で、１週間に起こった主な内容から、簡単に読み取れる内容を選び、記事内容に対する考えや意見をまとめていく作業を繰り返し行った結果、基礎的な力の育成の部分でかなりのスキルアップが図れたのではないかと感じている。合わせて、他者へしっかり分かりやすく伝えることを毎回の実践で意識させることより、より発表内容が洗練されていくのが感じ取れた。同時に、その発表内容に対して他者評価が入ることで、自分の考えや意見を相対化すると同時に、肯定的な評価をもらうことで自己肯定感の醸成にも繋がる経験となったのではないだろうか。

他方で、１年生の現代社会の授業で取り組んだ「SDGsの視点から沖縄の問題・課題を考える」取り組みに関しては、新聞記事の読み込みだけでなく、これからの沖縄を担う主権者として、沖縄が抱える課題・問題を拾い上げ、その解決方法に関して模索し、討議・協議する活動を進めていった。その中で、多くの生徒が抱える読解力の弱さを改善し向上させるだけでなく、自ら考えて課題・問題の解決方法を模索し、豊かで持続可能な社会の創造に向け、新たな価値を生み出そうとする主体性の萌芽も育成することが少なからずできたのではないかとも感じる。３０万部以上のベストセラーとなった新井紀子「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」の中で、2万5千人の中高校生の基礎的読解力を調査することで、著者は次のことを強く指摘している。

（読むことが苦手な生徒は）「ドリルと暗記で定期テストを乗りきったりすることはできます。けれども、レポートの意味や、テストの意味は理解できません。AIに似ています。AIに似ているということは、AIに代替されやすい能力だということです」（ｐ230）と警鐘を鳴らす。

こうした新井さんの指摘を踏まえ、兎にも角にも、私たちがまず意識しなければならないのは、単なる学力向上だけでなく、ＮＩＥ教育実践を通し、「読みを深める力」の基礎をいかにして育成していくのかということだろう。そうした力の育成に向けてＮＩＥ教育が果たす役割はかなり大きい。今年度の実践を通して、そのことをかなり強く感じた。今後も、こうした課題意識をもとに、これまでの実践内容を精査し、来年度以降もＮＩＥ教育を通して、読解力を育てるだけでなく、自らの立ち位置をしっかり見定め、自分なりの問いを立て、その問いの解決に向け主体的に探究する姿勢を生徒たちに育てていく努力をしていきたい。【比嘉　啓信】

○2019年12月に公表されたPISAの結果についての報道を俟つまでもなく、高校の指導現場では、文章の基本的な内容を把握する意味での「読解力」の低さは多くの教員の実感であろう。その原因の一つとして、地歴公民科の視点から自戒を込めて想起するのが、ゴシック強調による教科書記述とそれに引きずられた学校での空欄補充形式の教育である。

教科書を読んで空欄を補充せよ、との指示を出して、本校の生徒の様子を見ていると、多くの場合、教科書の文章を読んでいるのではなく、ゴシック強調された語句を探しているのみである。今、空欄で問わ

れているのがどこの国・地域に関するものなのか、固有名詞であるのか一般名詞であるのか、という判断が働かない生徒が、成績のよい集団の中でも目につく。

このような困難は、新聞という「ゴシック強調」のない文章を読ませる場合、より顕著になる。授業の資料や自習課題などで新聞を提示する場合、それを読んだ上での自らの考えを書くように指示することが多かった。すると、かなりの生徒が、事実関係さえも正確に把握していないと思われる的外れな文章を返してくる、ということが少なからずある。それは、自分の意見をもつ前段階で、「読む」という行為に問題を抱えているからであろうと推察している。

逆に言えば、新聞を学校教育、とくに社会科、地歴公民科の授業の中で活用すべき領域が、ここに見いだせる。

「ゴシック強調」された文章は、“何が重要な情報であるか”という判断を制作者側が行っており、読み手（生徒）の思考停止を招く恐れが多い。そのような色づけがされていない（見出し等の誘導はあるが）新聞のテキストを、5W1H のような基礎的な情報の把握を意識して読ませることに、腰を据えて取り組みたい。基礎的な読解力が備わっている生徒に対しては、Good thinker’s toolkit のようなものを用いて、自分なりの問いを立て、探究する姿勢を育てていきたい。【齊藤　憲】

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会組織（2019 年度)】
＜会長＞　仲村守和（元沖縄県教育長）
＜副会長＞　与那嶺一枝（沖縄タイムス社編集局長）
松元剛（琉球新報社編集局長）
＜顧問＞　山内彰（元沖縄県教育長）
武富和彦（沖縄タイムス社代表取締役社長）
玻名城泰山（琉球新報社代表取締役社長）
＜ＮＩＥアドバイザー＞
甲斐崇（うるま市立川崎小学校教頭）
佐久間洋（恩納村立恩納小中学校教頭）
石川美穂（興南高校教諭）
松田美奈子（沖縄市立コザ中学校主幹教諭）
宮城英誉（名護市立小中一貫教育校緑風学園）
比嘉美保（沖縄県立桜野特別支援学校）
宮城通就（沖縄県立辺土名高校）
＜事務局長＞ 知花亜美（琉球新報社編集局 NIE 推進室長）
※事務局は沖縄タイムス社と琉球新報社が２年交代で担当

＜会員社＞琉球新報社▽沖縄タイムス社▽宮古毎日新聞社（那覇支社）▽八重山毎日新聞（那覇支局）▽朝日新聞社（那覇総局）▽毎日新聞社（那覇支局）▽読売新聞社（那覇支局）▽日本経済新聞社（那覇支局）▽共同通信社（那覇支局）▽時事通信社（那覇支局）

【沖縄県ＮＩＥ運動の経過】
＜１９９６年（平成８年）＞
「沖縄県ＮＩＥ連絡会」結成
７月２５日　第１回ＮＩＥ全国大会（東京都)。新聞社員２名、県教育庁指導主事２名が参加
＜１９９９年（平成１１年）＞
日本新聞教育文化財団によるＮＩＥ実践指定校に那覇市立松島小、同古蔵中、県立首里東高。※翌年以降の実践指定校は別紙一覧表に掲載
＜２０００年（平成１２年）＞
２月２６日 県ＮＩＥ連絡会を母体に「沖縄県ＮＩＥ推進協議会」設立総会。全国３３番目。初代会長に津留健二元教育長。事務局を沖縄タイムス社に設置
７月２７日 ＮＩＥ全国大会（神奈川県）参加
＜２００１年（平成１３年）＞
３月１６日 県ＮＩＥ推進協議会総会。津留会長再任

７月２６日 ＮＩＥ全国大会（兵庫県）参加
＜２００２年（平成１４年）＞
４月５日 県ＮＩＥ推進協議会総会。津留会長再任
８月１日 ＮＩＥ全国大会（北海道）参加
く２００３年（平成１５年）＞
３月２７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に渡久地政吉元那覇市教育長。事務局を琉球新報社へ
７月３１日　ＮＩＥ全国大会（島根県）参加
＜２００４年（平成１６年）＞
７月　日本新聞教育文化財団が「ＮＩＥアドバイザー」制度を発足。県内から兼松力教諭が認定される
７月２９日　ＮＩＥ全国大会（新潟県）参加
＜２００５年（平成１７年）＞
３月２０日　「日本ＮＩＥ学会」が発足
４月２７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。渡久地会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
７月２８日　ＮＩＥ全国大会（鹿児島県）参加
１１月７日　初めての「ＮＩＥ週間」実施
＜２００６年（平成１８年）＞
５月２５日　県ＮＩＥ推進協議会総会。渡久地会長再任
７月２７日　ＮＩＥ全国大会（茨城県）参加
く２００７年（平成１９年）＞
県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に山内彰元県教育長。事務局を琉球新報社へ
７月２６日　ＮＩＥ全国大会（岡山県）参加
１１月１０日　「沖縄県ＮＩＥ実践フォーラム」を初開催（琉球新報社で）
＜２００８年（平成２０年）＞
７月３１日　ＮＩＥ全国大会（高知県）参加
１１月８日　第２回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）
＜２００９年（平成２１年）＞
４月１７日　ＮＩＥ実践中間報告会（琉球新報社で）
５月９日　ＮＩＥワークショップ（琉球新報社で）
５月１８日　県ＮＩＥ推進協議会総会。山内会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
７月３０日　ＮＩＥ全国大会（長野県）参加
１０月３１日　第３回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（琉球新報ホールで）
く２０１０年（平成２２年）＞
３月５日　ＮＩＥ実践最終報告会（沖縄タイムス社で）
３月８日　山内会長、岸本沖縄タイムス社長、高嶺琉球新報社長らが県教育長を訪問し、

大城浩統括官にＮＩＥへの一層の理解と連携を要請

４月　財団指定の実践校「奨励枠」に県内から初めて北中城村立北中城小学校、宜野湾市立宜野湾小学校（ともに０９年度指定）を推薦し、認定される

５月１４日　ＮＩＥワークショップ（沖縄タイムス社で）

６月１日　県独自指定校制度が発足。協議会が４校を指定し、沖縄タイムス・琉球新報２紙を提供開始。１０年度はうるま市立比嘉小学校、豊見城市立豊見城中学校（以上０９年財団指定校）、うるま市立石川中学校、与那原町立与那原中学校（以上新規）

６月５日　九州地区事務局長会議・アドバイザー会議（熊本市）に与那嶺功事務局長、兼松力アドバイザー出席

６月２９日　県ＮＩＥ推進協議会総会。山内会長再任

７月２９日　ＮＩＥ全国大会（熊本県）参加

１１月６日　第４回県ＮＩＥ実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）。教育関係者、保護者ら２００人が参加した。越来小が国語の公開授業。記念講演は作家の大城貞俊さん（琉球大学准教授）。兼松力教諭（ＮＩＥアドバイザー）、古波津聡越来小教諭、山城銀子小禄南小校長、奥村敦子沖縄タイムス社学芸部デスク、佐藤ひろこ琉球新報社教育担当キャップをパネリストに、佐久間洋宜野湾小教諭をコーディネーターにシンポジウム「新学習指導要領とＮＩＥ」を行った

＜２０１１年（平成２３年）＞

２月９日　日本新聞教育文化財団の枝元一三コーディネーターを招いた特別講演会「新学習指導要領とＮＩＥ」（主催＝読谷中、喜名小、共催＝県ＮＩＥ推進協議会）を読谷中学校体育館で開催。村内の教職員ら約１２０人が参加した

２月１０日　金武正八郎県教育長に要請活動。山内会長、中根学沖縄タイムス社編集局長、玻名城泰山琉球新報社編集局長、兼松アドバイザーらがＮＩＥ活動への理解と協力を要請した

４月　２０１０年６月にパイロット事業としてスタートした沖縄タイムス社と琉球新報社による県指定校制度の継続を確認。５校を上限に指定予定

６月１７日　県ＮＩＥ推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

７月２４日　ＮＩＥ全国大会（青森県）。教師・事務局１３人、取材記者４人が参加

８月２日　ＮＩＥアドバイザー就任要請。山内会長らが４校訪問

９月１４日　日本新聞協会ＮＩＥ専門部会で仲程俊浩氏、佐久間洋氏、甲斐崇氏のＮＩＥアドバイザー認定が了承される

１０月１７日　日本新聞協会主催「第２回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域審査（琉球新報社で）

１１月１２日　第５回県ＮＩＥ実践フォーラム（那覇市立小禄南小学校で）。全２６学級で公開授業。保護者６００人を含む７５０人が参加

１２月１０日　県中学校総合文化祭。中学生が速報発行、両新聞社が支援。ＮＩＥ展示

ブースも設置。１１日まで
＜２０１２年（平成２４年）＞
２月１５日　大城浩県教育長を訪問（山内会長、アドバイザー、両新聞社編集局長）。夏休みの短期講座の開催、全国大会への職員派遣を確認
３月５日　ＮＩＥ実践最終報告会（琉球新報社で）
４月２１日　県ＮＩＥ研究会発足。教員主体の研究組織を目指す。当面、新聞社主催の講座に合わせて会合を開く
６月２２日　県ＮＩＥ推進協議会総会。地元２社の会費の増額を承認（６万円から１０万円に）。他の加盟社の会費増額は次年度総会までに議論することにした
７月３０日　ＮＩＥ全国大会（福井県）参加。県教育庁から職員３人が参加
７月・８月　県立総合教育センターで初の教員向け研修。７月２７日に短期研修講座・小学校社会科講座の一部として佐久間アドバイザーが講師。８月３日は中学校社会・高校地歴公民講座の一部として兼松アドバイザーが講師
１１月３日　第６回県ＮＩＥ実践フォーラム（うるま市立中原小学校で）。県教育委員会、うるま市教育委員会の後援を得た。特別支援を含む全学年全学級で公開授業を行い、保護者や教育関係者、新聞関係者計８００人が来場した。教師向け、保護者向けのワークショップ（分科会）も開催し、兼松・佐久間・甲斐アドバイザーが講師
＜２０１３年（平成２５年）＞
１月２０日　教師向けメーリングリスト開設
２月２０日　大城浩県教育長を山内会長らが訪問。全国大会への職員派遣、行政主催の研修へのＮＩＥ採用に謝意を述べた
３月６日　実践報告会（琉球新報社で）。協会指定、県指定１０校のうち９校が報告した
４月　県立総合教育センターの出前講座にＮＩＥが開設。甲斐崇研究主事（ＮＩＥアドバイザー）が担当して校内研修や児童生徒の授業に対応開始
５月１１日　教師向け研修会「第１回おきなわＮＩＥセミナー」開催。昨年度まで新聞社主催だった講座を推進協主催に。原則として偶数月に開催する
５月２４日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会費、会則の変更を了承。会費は地元２社１０万円から１５万円に、全国紙４社３万円から４万円に、通信社２社１万円から３万円に、宮古・八重山２社３万円据え置き。役員では副会長を１名から２名とし、地元紙２社の編集局長を充て、任期を１年から２年とした。再任を妨げないことは従来通り。事務局が沖縄タイムス社へ
７月２５日　ＮＩＥ全国大会（静岡県）参加。県教育庁が前年に続いて職員を派遣し、県内の教育関係者、新聞社関係者らが参加
７月３０日　金武町教育委員会が主催する教員研修に４人のＮＩＥアドバイザーを派遣
８月１３日　県中頭教育事務所が主催する１０年経験者研修の選択研修でＮＩＥが取

り入れられ、２０人が受講。推進協に講師派遣依頼があり、兼松、佐久間両アドバイザーが校種に分かれて講師を務めた

１１月３０日　第７回実践フォーラム（県立総合教育センターで）。沖縄市立コザ小学校の４年生、５年生が公開授業。パネルディスカッションは実践校の教員、県教育行政、教育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解説・ワークショップもあった。約１５０人が参加。※古波津聡沖縄市立コザ小学校教諭が５人目のＮＩＥアドバイザーに承認

＜２０１４年（平成２６年）＞

２月６日　山内彰会長、玻名城泰山琉球新報社取締役編集局長、武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長ら７人が県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

３月４日　実践報告会（沖縄タイムス社）１２校が発表。ほか２校が紙面発表。県指定校の拡大にともない、過去最大の報告校数になった

５月２４日　九州アドバイザー・事務局長会議を沖縄で開催（沖縄タイムス社）。沖縄からは推進協発足の経緯やフォーラム開催などの活動報告、教育センターにＮＩＥ出前講座が盛り込まれたことなどを報告

６月２８日　６月のおきなわＮＩＥセミナーから、セミナー開催前の午前中に実践教員に呼び掛けて「研究部会」を開催。それぞれの実践を持ち寄り、情報交換

７月３１日　ＮＩＥ全国大会（徳島県）参加。８月１日まで

１１月１日　第８回実践フォーラム（県立総合教育センターで）興南中学校の国語の公開授業、授業研究会を行った。約５０人が参加

＜２０１５年（平成２７年）＞

２月１３日　山内彰会長、副会長の武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長、潮平芳和琉球新報社編集局長、兼松アドバイザー、佐久間アドバイザーが県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

３月２日　実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護市立真喜屋小、興南中学・高校、那覇市立小禄南小から報告を受け、３グループに分かれて報告の内容や日頃の実践について意見交換

５月１９日　県ＮＩＥ推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

６月２５日　山内彰会長、甲斐崇ＮＩＥアドバイザーらが北中城村教育委員会に森田孟則教育長らを訪問。地域連携型の　ＮＩＥ　の推進について意見交換

６月２７日　ＮＩＥ研究部会を開催。佐久間洋ＮＩＥアドバイザー、松田美奈子美東中教諭が記事を使った道徳の授業について実践報告。１５年度から研究部会の開催を定例化し、教員らの実践内容の共有、意見交換の場とすることを確認した

７月３０日　第２０回ＮＩＥ全国大会（秋田県）に、山内彰会長ら教育関係者７人と新聞社関係者９人の計１６人が参加。「『問い』を育てるＮＩＥ思考を深め、発信する子どもたち」をテーマにしたパネル討論や公開授業、実践発表などを通して論理的思考力など「２

１世紀型学力」とＮＩＥの取り組みを学んだ

９月９日　日本新聞協会ＮＩＥアドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈子美東中教諭が認定

１１月１２日　日本新聞協会実践指定校の那覇市立城北小学校が１１月のおきなわＮＩＥ月間に合わせ、４年（総合学習）、５年（道徳）、６年（国語）の公開授業を同校で行った

１１月２６日　第６回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、小学生部門の最優秀賞に北中城小６年の瀬底蘭さんが選ばれた。同コンクールの最優秀賞は県内初。奨励賞３人、優秀学校賞に大里南小が選ばれた

＜２０１６年（平成２８年）＞

２月１６日　山内彰会長、潮平芳和琉球新報編集局長、武富和彦沖縄タイムス編集局長の両副会長らは県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問。教育行政とのさらなる連携を確認した。いっしょに読もう！新聞コンクール最優秀賞の瀬底蘭さんの受賞も報告した

３月１日　２０１５年度の実践報告会を琉球新報社で開催。日本新聞協会ＮＩＥ実践校のうち本年度で実践期間が終了する城北小、大里南小、興南中・高校がこれまでの取り組みや成果を報告した

５月２８日　県ＮＩＥ推進協議会総会

６月１８日　ＮＩＥ研究部会を「ＮＩＥカフェ」として、ケーキやコーヒーの出る飲食店で開催した。原則毎月第３土曜日の午後２時から開催し、教員が参加しやすい環境にした

８月４日　第２１回ＮＩＥ全国大会（大分県）に、山内彰会長ら教育関係者９人と新聞社関係者が参加。パネル討論や公開授業を通し、大分や各地の事例や手法などに理解を深めた

１１月４日　県ＮＩＥ実践フォーラム２０１６（沖縄市立室川小学校で）。おきなわＮＩＥ月間（県教育委員会後援）の中心行事として開催。２、３、６学年（計３クラス）の公開授業や全体会を行った。約１２０人が参加

１２月１０日　第２２回県中学校総合文化祭で中学生が速報を発行し、両新聞社が支援した。ＮＩＥ展示コーナーも設置し、実践校や新聞社の活動を紹介。１１日まで

＜２０１７年（平成２９年）＞

３月１日　実践報告会（琉球新報社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の室川小、県立森川特別支援学校が報告発表を行った

４月２０日　山内彰会長、副会長の普久原均琉球新報社編集局長、石川達也沖縄タイムス社編集局長、佐久間アドバイザー、石川アドバイザーらが県教育庁に平敷昭人県教育長を表敬訪問

５月２６日　県ＮＩＥ推進協議会総会。共同通信社の会費増額を承認（３万円から４万円に）。事務局が沖縄タイムス社へ

５月２７日　本年度最初のおきなわＮＩＥセミナー。新聞協会取材の「いっしょに読もう新聞コンクールを授業に組み込む」（佐久間アドバイザー）。その後、６月はこども新聞沖縄戦特別版の活用方法（松田アドバイザー）、１１月は「はがき新聞作り」（プール学院大学の今宮信吾准教授）、２月に「NIE 年間計画の立て方」（石川アドバイザー）を行った。

８月３、４日　ＮＩＥ全国大会名古屋大会に山内彰会長、蔵根美智子前室川小校長、松田美奈子アドバイザー、金城治・県立総合教育センター研究主事、宮城英誉・緑風学園教諭、比嘉美保・森川特支教諭、内山直美・糸満中教諭、地元新聞社員が参加した

１２月９、１０日　「第２３回県中学校総合文化祭」（沖縄市民会館など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両（ワラビーＧＯ！、りゅうちゃん号）を活用し、大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

＜２０１８年（平成３０年）＞

１月１７日　名護市教育委員会の後援を得て、実践指定校の同市立小中一貫教育校緑風学園で NIE 実践フォーラムを開催。朝の NIE フリートーク再現、５年生の社会、１年生と８年生（中学２年）合同の国語の３本の授業を公開。小中一貫校らしい異学年の学びの蓄積を他校教員、保護者らに見せた。学校の取り組みを振り返る全体会も行った

３月８日　２０１７年度の実践報告会を那覇市の沖縄タイムス社で開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の高原小、美東中、興南高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が３グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

５月１０日　緑風学園の宮城英誉教諭がＮＩＥアドバイザーに認定。北部地区での教師ネットワークづくりへ

５月２６日　６年目の「おきなわＮＩＥセミナー」スタート。この日は「話す力・書く力を育てる指導法」をテーマに佐久間洋、宮城英誉両アドバイザーが講師。その後、６月「切り抜き新聞」（甲斐崇アドバイザーがメイン講師）、１２月「はがき新聞」（講師は桃山学院教育大学の今宮信吾准教授）を行った。

５月３１日　県ＮＩＥ推進協議会総会。会長に仲村守和元県教育長を選出。山内彰会長は顧問に就任。６月４日に新旧会長が平敷昭人県教育長を訪問した

７月２６、２７日　ＮＩＥ全国大会岩手大会に宮城英誉アドバイザー、比嘉美保桜野特別支援学校教諭、宮城通就宜野座高校教諭、蔵根美智子放送大学沖縄学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した

８月４日　実践資料集（仮称）制作のため、編集委員会を結成し、８、９、１０、翌年１月に会議。編集作業を進めた。

１０月９日　県教育庁の県立学校教育課、義務教育課から各１人の指導主事を推進協の幹事に任命

１１月８日　比嘉美保桜野特別支援学校教諭がＮＩＥアドバイザーに承認された

１１月１２日　糸満市立糸満中学校でＮＩＥ実践フォーラム開催。数学、英語、国語、

理科で公開授業を行った

１２月８、９日　「第２４回県中学校総合文化祭」（うるま市民芸術劇場など）で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両で大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

＜２０１９年（平成３１年）＞

１月７、１１日　仲村守和会長が沖縄タイムス社、琉球新報社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。７日には平敷昭人県教育長を訪ね、学校図書館への新聞配備状況の調査を要請した

３月１５日　２０１８年度の実践報告会を那覇市のてぃるるで開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の糸満中、宜野座高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が３グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

４月６日　ＮＩＥカフェ開催。４月２０日、７月、９月、翌年２月、３月とアドバイザーの先生たちと実践資料集（仮称）の編集会議を開催。

５月７日　県立辺土名高校の宮城通就教諭が、日本新聞協会のＮＩＥアドバイザーに承認された。

５月２５日　７年目の「おきなわＮＩＥセミナー」がスタート。「簡単にできるＮＩＥ入門編」（宮城英誉教諭が講師）を行った。その後６月２９日に「簡単にできるＮＩＥ～特別支援教育向けと他校種への応用」（比嘉美保教諭が講師）、１０月１９日に「時事カルタ」（宮城通就教諭）のセミナーを実施した。１１月２日は、桃山学院教育大の今宮信吾准教授による「はがき新聞づくり」をセミナーの一環として開いた。

５月２９日　沖縄県ＮＩＥ推進協議会総会開催

５月３１日　仲村守和会長ら３役が沖縄県教育庁を訪れ、県立学校教育課の石垣真仁指導主事と義務教育課の山内かおり指導主事の２人を沖縄県ＮＩＥ推進協議会の幹事に任命。

８月１、２日までＮＩＥ全国大会栃木大会に、宮城英誉アドバイザー、佐久間守アドバイザー、宮城通就アドバイザーと実践指定校の古堅南小学校から教諭１１人、藏根美智子放送大学学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した。

１１月１２日　読谷村立古堅南小学校でＮＩＥ実践フォーラムを開催。２年、３年、５年の公開授業のほか、秋田大学大学院特別教授の阿部昇氏の講演会も実施。

１２月７日　「第10回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域表彰式を那覇市の琉球新報社で初めて開催。

１２月７、８日　第２５回沖縄県中学校総合文化祭（浦添市のアイム・ユニバースてだこホールなど）で、琉球新報、沖縄タイムスの両社がそれぞれ移動編集車両で大会の速報作りに協力した。

＜２０２０年（令和２年）＞

１月７、８日　仲村守和会長が琉球新報、沖縄タイムスの両社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。また平敷昭人教育長を訪ね学校図書館への新聞配備を要望した。

沖縄県内の実践指定校一覧

＜２０１９年度＞

【日本新聞協会指定】読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立高原小学校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立宜野座高校▽与那国町立与那国小学校

＜２０１８年度＞

【日本新聞協会指定】うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校▽読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽浦添市立仲西小学校

【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立美東中学校▽興南中学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄市立室川小学校▽沖縄市立高原小学校

＜２０１７年度＞

【日本新聞協会指定】沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校▽興南高校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校

＜２０１６年度＞

【日本新聞協会指定】沖縄市立室川小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽興南高校▽県立森川特別支援学校▽沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽宮古島市立西辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽八重瀬町立具志頭中学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

＜２０１５年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】興南中学校・高校【日本新聞協会指定通常枠】南城市立大里南小学校▽那覇市立城北小学校▽沖縄市立北美小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽那覇市立小禄南小学校

＜２０１４年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校【日本新聞協会指定通常枠】名護市立真喜屋小学校▽興南中学校・高校▽南城市立大里南小学校▽北谷町立浜川小学校▽那覇

市立城北小学校▽石垣市立伊野田小学校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立コザ小学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立泊高校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽宮古島市立平良中学校

＜２０１３年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽名護市立真喜屋小学校▽恩納村立喜瀬武原小中学校▽興南中学校▽県立陽明高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立沖縄工業高校

＜２０１２年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常枠】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】南城市立大里中学校▽豊見城市立豊見城中学校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校

＜２０１１年度＞

【日本新聞協会指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞協会指定通常枠】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】与那原町立与那原中学校▽豊見城市立豊見城中学校

＜２０１０年度＞

【日本新聞教育文化財団指定奨励枠】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞教育文化財団指定】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県ＮＩＥ推進協議会指定】うるま市立比嘉小学校▽与那原町立与那原中学校▽うるま市立石川中学校▽豊見城市立豊見城中学校　※年度末で日本新聞教育文化財団が日本新聞協会と合併

＜２００９年度＞

※これ以前はすべて日本新聞教育文化財団指定▽那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

＜２００８年度＞

那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

＜２００７年度＞

那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽糸満市立三和中学校（注１）▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校　（注１）座間味村立慶留間小中学校から実践者異動による実践校の変更

＜２００６年度＞

那覇市立銘苅小学校▽名護市立大宮小学校▽座間味村立慶留間小中学校▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校▽県立向陽高校（注２）▽県立南風原高校（注２）　（注２）実践者の休職などによる指定中止

＜２００５年度＞

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立浦添商業高校

＜２００４年度＞

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立那覇高校▽県立浦添商業高校

＜２００３年度＞

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立那覇高校▽県立辺土名高校

＜２００２年度＞

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立中部商業高校▽県立辺土名高校

＜２００１年度＞

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立中部商業高校▽県立浦添高校

＜２０００年度＞

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立首里東高校▽県立浦添高校

＜１９９９年度＞

那覇市立古蔵中学校▽那覇市立松島小学校▽県立首里東高校

2019年度県ＮＩＥ実践フォーラム　　読谷村立古堅南小学校

おきなわ NIE

読んで知って 世界広がる

2019年度県ＮＩＥ実践フォーラムの開催を祝う児童ら

新聞を取り入れた授業の実践事例を学ぶ2019年度ＮＩＥ実践フォーラム（主催・県ＮＩＥ推進協議会、後援・県教育委員会、読谷村教育委員会）が12日、読谷村立古堅南小学校（秋山敏浩校長）で開催された。三つの公開授業と秋田大学大学院特別教授で秋田県ＮＩＥ推進協議会会長の阿部昇氏を招き、講演会が行われた。読谷村内の小中学校教諭をはじめ県内各地から約200人が参加した。記事を題材に生活、算数、国語の授業が展開され、来場した教諭らは深い学びの実践例を学んだ。

生徒の公開授業で、先生の質問に目を輝かせて手を挙げる児童らー12日、読谷村の古堅南小学校

公開授業　3年　算数

金メダルって重いの？
社会の出来事結びつけ

3年2組の田仲麗奈教諭は、東京五輪の金メダルと同じ重さの砂金を用意を行った。はかる前に、正確に重さを予想する児童に向け、五輪の開催地である東京と比べ、どちらが重いかを尋ねた。まず、はかりを使って1グラムの砂を測り、次に、以前使用した東京五輪のメダルの重さを使う砂の量を計った。意味がピンとこない児童に対し、「金メダルの重さは500グラムの砂金袋に入れる量なのだ」と説明した。早く重さを考えた児童から「重くて、持ち上げるのが大変」などの感想が出た。

最後に、「重いほうが価値が高い」と問いかけ、「金メダルの重さを実感していた。伊波裕樹さんは「重かった。三つメダルを取った人はよくこんな重いのをかけられたなと思った」と感想を発表した。

●新聞記事を教材に重さについての授業をした田仲麗奈教諭
●体工大して五輪メダルの重さと同じ重さの砂を量る児童たち

公開授業　5年　国語

和語、漢語 特徴つかむ
色分けし、気付きを発表

5年3組の国語では、伊佐元美教諭が「和語・漢語・外来語」を題材に、「和」と「漢」の特徴を考えた。「和」は和歌や和服などを例に「やまと言葉」と説明。「漢」は漢字で表す言葉で、「漢字」と「漢語」の違いを説明した。「漢」は「漢字」と「漢語」の両方を表すことを伝えた。「和」は「やまと言葉」と「漢字」の両方を表すことを伝えた。「外来」は「外国から来た言葉」と説明した。

「和」「漢」「外来」の特徴を考えるグループ活動では、「和」は「やまと言葉」「ひらがな」「カタカナ」「漢字」「漢語」「外来」は「カタカナ」「漢字」「漢語」と、それぞれ色分けした。「和」は「やまと言葉」「ひらがな」「カタカナ」「漢字」「漢語」「外来」は「カタカナ」「漢字」「漢語」と、それぞれ色分けした。

NIE実践フォーラム

新聞使い対話的学び

決められた重さになるよう砂を付加に乗せる3年生

3年生 算数

メダルの重さ 砂で作る

田嶋美穂教諭

3年算数の授業は二年生の単元で、重さを測って重さの違いを比べる活動から始まった。教諭は「五輪の記事からヒント」と題した授業を紹介した。

導入では世界陸上競技の選手の写真を見せた。「何を持っているか」と問いかけ、ペットボトルやビニール袋などを使ったメダルを作った。「どちらが重いか」と問いかけ、子どもたちは手で持ち比べ、「こっちの方が重い」などと答えていた。

次に、3人分のビニール袋を渡した。「重さが同じになるようにしてください」と指示し、子どもたちは砂を入れたり、ビニール袋を足したりして、重さを調整していた。

「砂を使ったメダルを作ってみて、どんな感じがしましたか」と問いかけると、「重くて作るのが大変だった」などと答えていた。

教諭は「五輪の記事からヒントを得て、子どもたちが重さを調べる活動に取り組んだ。2年生の時に重さを測ったことを思い出して、重さを測ったり、比べたりしたいという意欲を高めることができた」と話した。

伊礼美幸子教諭

授業、講師それぞれの特徴が一点突破型出し。親が作る弁当は第一は白。古型隠れ学校

読谷村立古堅南小学校　公開授業

和語と漢語 特徴挙げる

本文や見出し 言い換え探す

5年生 国語

5年国語の授業は「説明・意見を聞き取り、要点をとらえ、自分の意見をもつ」ことを目的に、「新聞を使って説明しよう」という単元で行われた。

授業では、新聞の見出しを言い換えたり、説明文を読みかえたりする活動を通して、「和語と漢語の違いを多角的に考える」ことを目的とした。

授業では、まず、「和語と漢語の違いを考えよう」という課題を提示した。子どもたちは、和語と漢語の違いを考えるために、教科書の文章を使って、和語と漢語の違いを考えるための活動に取り組んだ。

その後、「新聞の見出しを言い換えよう」という課題を提示した。子どもたちは、新聞の見出しを言い換えるために、教科書の文章を使って、和語と漢語の違いを考えるための活動に取り組んだ。

授業では、「和語と漢語の違いを考えよう」という課題を提示した。子どもたちは、和語と漢語の違いを考

NIE全国大会宇都宮大会

「深い対話を育むNIE」

生きる力 育てる教育へ

教育新聞のように生かせるか？ 第21回NIE全国大会宇都宮大会（日本新聞協会等主催）は8月1、2の両日、会場から教室新聞の関係者約1100人が集まり、熱気に満ちた。大会スローガンは「学校・対話型教育のNIE」。2020年以降に実施される新学習指導要領の「生きる力」を育むことを念頭に、良き学び、考える力を育てるNIEの在り方を探った。基調講演やパネルディスカッションが行われた。

NIE全国大会宇都宮大会の開会式（8月1日、宇都宮市の宇都宮文化会館）

「私たちの大事な指針」 大村はまさんの教育紹介

対話型授業の特徴は次の通り。

◇大任だと思い、責任を感じる。

◇一生懸命に考える。

◇自分の考えを言える。

◇仲間を認める。

◇仲間の考えを聞く。

◇仲間の考えを受け入れる。

◇仲間の考えを生かす。

◇仲間の考えを変える。

◇仲間の考えを高める。

◇仲間の考えを広げる。

◇仲間の考えを深める

第24回NIE全国大会 宇都宮大会

生きる力育む新聞

県内参加者の声

公開授業 素晴らしい

仲村守和さん　2年前の第1回大会に県教育庁指導主事として参加した。今回参加して、大会参加者が増え、公開授業も多様な教科で数も多くなっていて、NIEの発展ぶりが感じられた。公開授業では児童生徒が発表力を引き出した、想像以上に素晴らしかった。同時に沖縄の先生方の授業もこれに引けを取らないと実感した。（NNIE推進協議会長）

教材研究力高めたい

佐久嶋洋さん　鈴木県の子どもたちが新聞を読み解く力が高いことに驚かされた。先生方の教材研究力が高いからこそ、子どもの深い学びにつながっているのだと気付いた。これから、日常的に新聞を活用して子どもたちの知識量を増やしていきたい。県内のアドバイザーも教材研究力を高めて、新聞の活用法を勉強していきたい。（比謝川小学校教諭・NIEアドバイザー）

子の学ぶ姿 生き生き

宜誠英智さん　大会のテーマである「深い対話を育てるNIE」をまさに目の当たりにした大会だった。新聞を基に子どもたちが生き生きと、深い考えを持ちながらお互いに学び合っていた。普段から新聞が身近にあるからこそできることだと思う。しっかりと沖縄へ持ち帰ってNIEの可能性を広めていきたい。（緑風学園教諭・NIEアドバイザー）

新聞は有効と再確認

宜誠義就さん　「テキストとの対話」「自己との対話」「他者との対話」を学び取る要素と考えているが、これらには新聞が極めて有効だと再確認できた。高校生はこれから自分の意見を論理的に説明し、発信していく力が重要になっていく。そのサポートをしていくため、先生方にもNIEを取り入れた学習環境を考えて欲しい。（辺土名高校教諭・NIEアドバイザー）

生涯学習につなげる

喜屋武香子さん　大村はまさん関する基調講演は朝倉所だった。朝倉、子どもたちの「言葉の力」を育てるために新聞を活用した話は、自然わかりやすく聞いたことがあった。今大会で挙げられたNIEの三つの課題である「組織化」「日常化」「見える化」を具現化するためにNIEと生涯学習との一体化をさらに模索したい。（放送大学沖縄学習センター客員准教授）

実践発表

司書と教師 連携し授業活用

宇都宮市立金井中学校「理解深まった」96%

宇都宮市立金井中学校の中川紀恵子司書教諭、「学校図書館を核とした言語力育成の取り組み」と題した実践発表を行った。中川さんは、「国語」の授業で、新聞記事を活用した授業を行っている。「情報ファイル」を使っている。「現代の言葉」の授業では、教科書の題材に沿った新聞の記事を提示し、生徒は興味深く考える姿を見せていた。

2年生の授業では、「ICT（情報通信技術）」を使っての授業を紹介した。「ICTを活用した授業は、生徒の学びを深めるものだと思う。ICTを使うことで、生徒は自分の考えを共有することができる。ICTを使うことで、生徒は自分の考えを共有することができる。ICTを使うことで、生徒は自分の考えを共有することができる

２０１９年度沖縄県ＮＩＥ実践報告書

２０２０年５月発行

発行　沖縄県ＮＩＥ推進協議会（会長・仲村守和）
事務局　〒９００－８５２５
那覇市泉崎１－１０－３
琉球新報社 ＮＩＥ推進室
電　話：０９８－８５１－５１９０
ＦＡＸ：０９８－８６５－５２２２
メール：nie@ryukyushimpo.co.jp

生きる力育む新聞

県内参加者の声

公開授業 素晴らしい

仲村守和さん　2年前の第1回大会に県教育庁指導主事として参加した。今回参加して、大会参加者が増え、公開授業も多様な教科で数も多くなっていて、NIEの発展ぶりが感じられた。公開授業では児童生徒が民談力を引き出した、想像以上に素晴らしかった。同時に沖縄の先生方の授業もこれに引けを取らないと実感した。（NNIE推進協議会長）

教材研究力高めたい

佐久嶋洋さん　鈴木県の子どもたちが新聞を読み解く力が高いことに驚かされた。先生方の教材研究力が高いからこそ、子どもの深い学びにつながっているのだと感じた。これから、日常的に新聞を活用して子どもたちの知識量を増やしていきたい。県内のアドバイザーも教材研究力を高めて、新聞の活用法を勉強していきたい。（比屋根小学校教諭・NIEアドバイザー）

子の学ぶ姿 生き生き

宮城英誉さん　大会のテーマである「深い対話を育てるNIE」をまさに目の当たりにした大会だった。新聞を基に子どもたちが生き生きと、深い考えを持ちながらお互いに学び合っていた。普段から新聞が身近にあるからこそできることだと思う。しっかりと神髄へ持ち帰ってNIEの可能性を広めていきたい。（緑風学園教諭・NIEアドバイザー）

新聞は有効と再確認

宮城義誠さん　「テキストとの対話」「自己との対話」「他者との対話」を学び方3要素と考えているが、これらには新聞が極めて有効だと再確認できた。高校生はこれから自分の意見を論理的に説明し、発信していく力が重要になっていく。そのサポートをしていくため、先生方にもNIEを取り入れた学習環境を考えて欲しい。（辺土名高校教諭・NIEアドバイザー）

生涯学習につなげる

喜屋武智子さん　大村はま先生に関する基調講演は朝倉所だった。朝倉、子どもたちの「言葉の力」を育てるために新聞を活用した話は、自然わかりして聞いたことがあった。今大会で挙げられたNIEの三つの課題である「組織化」「日常化」「見える化」を具現化するためにNIEを生涯学習との一体化をさらに模索したい。（放送大学沖縄学習センター客員准教授）

実践発表

司書と教師 連携し授業活用

宇都宮市立金井中学校「理解深まった」96%

宇都宮市立金井中学校の中川紀子司書教諭は、「学校図書館を核とした言葉の力を育む取り組み」と題した実践発表をした。テーマに「朝倉プリント」を使っている。「朝倉プリント」を使っている理由は、生徒が朝倉先生と共に、NIEを活かした言葉の教育を実践するためだ。学校図書館の中川さんは、「朝倉プリント」を使って、「言葉の力」を育てるNIEを活かした授業の実践を紹介した。

2年間のNIE教育の成果として、「言葉の力」の変化について、「朝倉プリント」を使った授業を通して、「言葉の力」が高まったと答えた生徒は、96%だった。「朝倉プリント」は、「いいな」と思った言葉に「いいな」、「なぜ」と書くプリントだ。

中川さんは、「朝倉プリントを使った授業を通して、生徒の言葉の力が高まったと感じている。朝倉先生と共に、言葉の力を育てる授業を実践していきたい」と話した。

故大村はまさんの実践紹介

記事を教材化 言葉鍛える

基調講演　作家の辻谷夏子さん

1日目は、作家で「大村はま国語教室の会」事務局長の辻谷夏子さんが基調講演、教育の専門家で東京の元教師だった故大村はまさん（1906～2005年）の業績を紹介した。

大村はまは戦後、新制中学に赴任した。2人に1人は「先生、ついていけません」という状況だった。中学生たちが意味のないことをしていると考えていた。

そこで、「生きる力」を育てるために、新聞を教材として使うことを思いついた。

「生きる力」とは、「自分で考える力」、「人と共に生きる力」、「人の痛みを分かる力」の三つだ。

大村はまは、「言葉の力」を育てるために、「言葉の力」を使って、「言葉の力」を使って、「言葉の力」を使って

２０１９年度沖縄県ＮＩＥ実践報告書

２０２０年５月発行

発行　沖縄県ＮＩＥ推進協議会（会長・仲村守和）
事務局　〒９００－８５２５
那覇市泉崎１－１０－３
琉球新報社 ＮＩＥ推進室
電　話：０９８－８５１－５１９０
ＦＡＸ：０９８－８６５－５２２２
メール：nie@ryukyushimpo.co.jp